

中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（11）

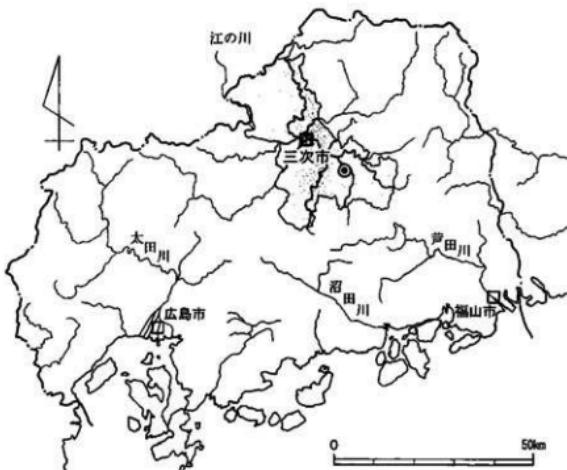
大畠奥池第1～3・7号古墳

2010

財団法人 広島県教育事業団

中国横断自動車道尾道松江線建設 に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（11）

大畠奥池第1～3・7号古墳



三次市位置図（◎は古墳群を示す。）

2010

財団法人 広島県教育事業団



a 大番奥池古墳群遠景（空中写真、東から）

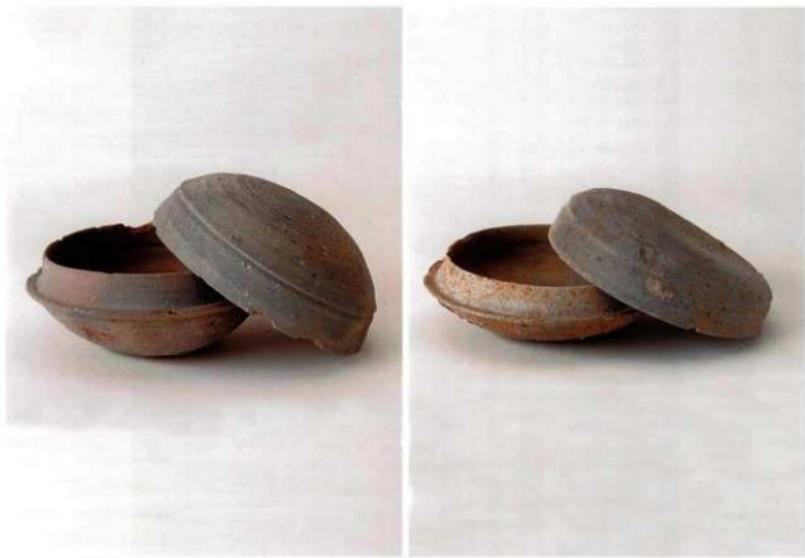


b 第2号古墳全景（空中写真、南から）

卷頭図版 2



a 第3号古墳全景（空中写真、南から）



b 出土遺物（左；第2号古墳SK2出土須恵器14・16、右；第3号古墳SK1出土須恵器20・21）

例　　言

- 1 本書は、平成18（2006）年度に実施した中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る大畠奥池第1～3・7号古墳（三次市吉舎町敷地字中山546ほか所在）の発掘調査報告である。
- 2 発掘調査及び整理作業・報告書作成は、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所との委託契約により財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が実施した。
- 3 発掘調査は、梅本健治、辻満久が担当した。
- 4 出土遺物の整理・復元は梅本と賃金職員の木村和美が、実測・図面の整理・写真撮影は梅本が中心となって行った。
- 5 本書は、梅本が執筆・編集した。
- 6 図版の遺物番号と挿図の遺物番号は同一である。
- 7 本書に使用した北方位はすべて平面直角座標第Ⅲ座標系北である。
- 8 第2図は国土交通省国土地理院発行の1:25,000の地形図（吉舎）を使用した。
- 9 当初は第3号古墳の東側にある第4号古墳の一部が調査範囲に含まれる可能性があったが、調査の結果、第4号古墳に關係する遺構は検出できなかつたので、調査の対象から外した。また、第7号古墳は当初、第3号古墳の搅乱坑の堆土の堆積と認識していたが、調査の結果、小型の円墳であることが明らかになつたので、新出の古墳として報告することになった。
- 10 遺構の略号はSKのみで、古墳の埋葬施設を示す。
- 11 埋葬施設の副葬品の位置の説明における左右は被葬者から見て、である。

目 次

Iはじめに	(1)
II位置と環境	(5)
III調査の概要	(10)
IV遺構と遺物	(12)
1 大番奥池第1号古墳	(12)
2 大番奥池第2号古墳	(14)
3 大番奥池第3号古墳	(18)
4 大番奥池第7号古墳	(24)
Vまとめ	(37)

巻頭図版目次

巻頭図版 1 a	大番奥池古墳群遠景（空中写真、東から）
b	第2号古墳全景（空中写真、南から）
巻頭図版 2 a	第3号古墳全景（空中写真、南から）
b	出土遺物

挿図目次

第1図 中國横断自動車道尾道松江線路線図	(3)
第2図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)	(7)
第3図 大番奥池古墳群周辺地形図 (1:3,000)	(11)
第4図 大番奥池第1～4・7号古墳調査前地形測量図 (1:200)	折込み
第5図 大番奥池第1～3・7号古墳墳丘測量図 (1:200)	折込み
第6図 大番奥池第1・2号古墳墳丘土層断面実測図 (1:60)	折込み
第7図 大番奥池第1号古墳出土遺物実測図 (1:2, 1:3)	(13)
第8図 大番奥池第2号古墳SK1実測図 (1:30)	(14)

第9図	大番奥池第2号古墳SK2実測図(1:30)	折込み
第10図	大番奥池第2号古墳出土遺物実測図(1:2, 1:3)	(17)
第11図	大番奥池第3・7号古墳墳丘土層断面実測図(1:60)	折込み
第12図	大番奥池第3号古墳SK1・2実測図(1:30)	(19)
第13図	大番奥池第3号古墳SK3・4, 第7号古墳SK1実測図(1:30)	(21)
第14図	大番奥池第3号古墳出土遺物実測図(1:2, 1:3, 1:4)	(23)
第15図	大番奥池第7号古墳出土遺物実測図(1:2, 1:3)	(24)

表 目 次

第1表	中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る報告書一覧	(2)
第2表	大番奥池第1~3・7号古墳埋葬施設一覧	(10)
第3表	大番奥池第1~3・7号古墳出土遺物一覧	(25)
第4表	広島県内の主な墳頂部複数埋葬古墳	(27)
第5表	広島県内の主な須恵器副葬・供獻古墳	(31)
第6表	広島県内の主な鐵鎌副葬古墳	(33)

図版目次

図版1	a 古墳群遠景(空中写真, 東から)	図版4	a 第1号古墳墳丘土層 (東西方向東半, 北から)
	b 古墳群全景(空中写真, 東から)		b 同上(東西方向西半, 北から)
	c 同上(南北方向北半, 西から)		c 同上(南北方向南半, 西から)
図版2	a 第1号古墳全景 (空中写真, 北から)	図版5	a 第1号古墳墳丘土層 (南北方向南半, 西から)
	b 第2号古墳全景 (空中写真, 南から)		b 第2号古墳全景(調査前, 北から)
図版3	a 第3・7号古墳全景 (空中写真, 南から)		c 第2号古墳墳丘(南西から)
	b 第1号古墳全景(調査前, 西から)	図版6	a 第2号古墳墳丘土層 (東西方向東半, 南から)
	c 第1号古墳墳丘(北西から)		b 同上(東西方向西半, 南から)
			c 同上(南北方向南半, 東から)

- | | | | |
|------|-----------------------------|--------------|-----------------------------|
| 図版7 | a 第2号古墳墳丘土層
(南北方向北半、東から) | 図版12 | a 第3号古墳SK1~4
(南西から) |
| | b 第2号古墳周溝土層
(SW区、南東から) | | b 第7号古墳墳丘土層
(東西方向、南から) |
| | c 第2号古墳SK1・2(北から) | | c 同上SK1(北から) |
| 図版8 | a 第2号古墳SK1(北から) | 図版13 | a 第2号古墳SK1鉄鎌12
出土状況(南から) |
| | b 第2号古墳SK2(北から) | | b 同上鐵鎌9~11出土状況
(南から) |
| | c 第3号古墳全景(調査前、
南から) | | c 同上SK2須恵器4出土状況
(南西から) |
| 図版9 | a 第3号古墳墳丘(南西から) | | d 第2号古墳SK2作業風景
(西から) |
| | b 第3号古墳墳丘土層
(東西方向東半、北から) | | e 第3号古墳SK1須恵器
出土状況(北から) |
| | c 同上(東西方向西半、北から) | | f 同上SK2須恵器出土状況
(北から) |
| 図版10 | a 第3号古墳墳丘土層
(南北方向北半、西から) | | g 同上SK3刀子出土状況
(東から) |
| | b 同上(南北方向南半、西から) | | h 同上SK4鉄器出土状況
(南東から) |
| 図版11 | c 第3号古墳SK1(北から) | | |
| | a 第3号古墳SK2(北から) | 図版14 出土遺物(1) | |
| | b 同上SK3(北から) | 図版15 出土遺物(2) | |
| | c 同上SK4(南から) | | |

I はじめに

大畠奥池第1～3・7号古墳の発掘調査は中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係るものである。本事業は、本州四国連絡道路尾道今治ルート（瀬戸内しまなみ海道）と一体になって、山陰、山陽及び四国地方を南北に結ぶ地域連帯構想を推進し、本圏域の産業、経済及び文化の発展と沿線地域の生活向上に寄与しようとするものである。

日本道路公団中国支社（以下、「道路公団」という。）は、平成13（2001）年2月、当該事業地内の文化財等の有無及び取扱いについて、広島県教育委員会（以下、「県教委」という。）と協議した。県教委はこれを受けて現地踏査を行い、平成14（2002）年9月事業地内に試掘調査が必要な箇所が存在する旨を回答した。県教委は平成17（2004）年11月に当該箇所の試掘調査を実施し、大畠奥池第1～4号古墳の存在を確認した旨を同年12月19日に道路公団に回答した。この遺跡の取扱いについて県教委と道路公団は協議を重ねたが、設計変更による現状保存は不可能との結論に達した。なお、中国横断自動車道尾道松江線建設事業は、平成17（2005）年10月1日の日本道路公団の解散に伴って西日本高速道路株式会社（以下、「西日本高速」という。）に引き継がれ、平成18（2006）年度からは国土交通省に承継された。そのため、西日本高速は、平成18（2006）年2月9日付けで三次市教育委員会（以下、「市教委」という。）あてに「埋蔵文化財発掘の通知（土木工事の通知）」を提出し、市教委は同年2月16日付けで西日本高速あてに工事に先立って発掘調査が必要である旨を通知した。国土交通省はこれを受けて、同年3月2日付けで財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室（以下、「教育事業団」という。）に大畠奥池第1～4号古墳（1,428m²）の調査依頼を行なった。国土交通省と教育事業団は同年4月3日付けで委託契約を結び、教育事業団は同年4月17日から8月4日までの3か月半発掘調査を行った。なお、7月15日には三次市教育委員会と共に遺跡見学会を開催し、60名の参加があった。

本報告書は、以上のような経緯のもとに行った発掘調査の成果をまとめたものであり、今後の埋蔵文化財の資料として、またこの地域の歴史の一端を知る手がかりとして、少しでも寄与できれば幸いである。

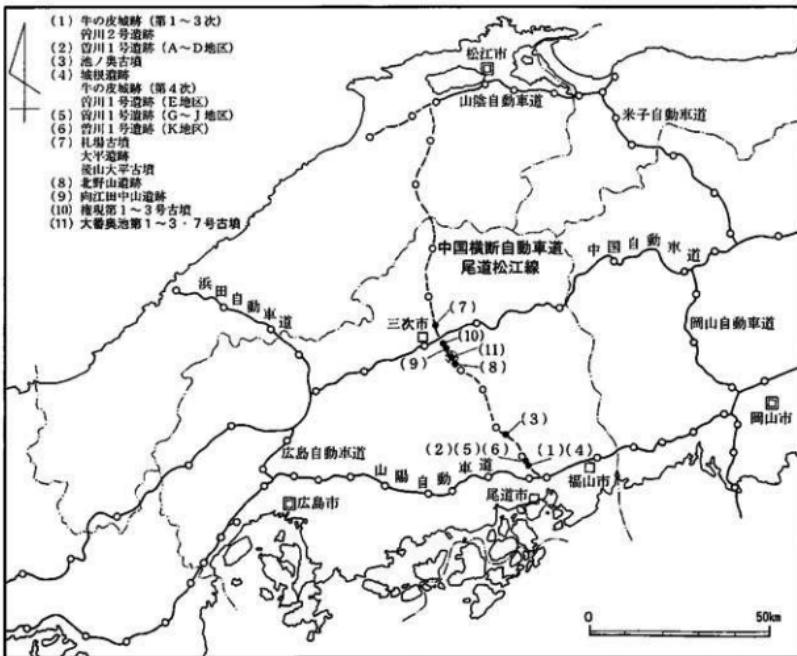
発掘調査にあたっては、国土交通省中国地方整備局三次河川国道事務所、西日本高速道路株式会社中国支社広島工事事務所、三次市教育委員会及び地元の方々に多大な御協力をいただいた。記して感謝の意を表します。

第1表 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に伴う報告書一覧

報告書	遺跡名		地区名	調査期間	所在地	時期	内容			
(1)	牛の皮城跡 (北郭群)		第1次 峠状堅堀群	平成15年1月20日～3月14日	尾道市御調町 大町字二の丸	中世	城跡			
			第2次 1～4郭	平成15年7月7日～10月31日						
			第3次 西堅堀	平成15年11月10日～11月28日						
	曾川2号遺跡			平成15年1月20日～3月7日	尾道市御調町 大町字西川	古代末～中世	集落跡			
(2)	曾川1号遺跡	A地区	旧・平成14年度調査区	平成14年10月21日～平成15年1月17日	尾道市御調町 大町字曾川	弥生時代～中世	集落跡			
		B地区	旧・P2第一調査区	平成15年4月7日～5月23日						
		C地区	旧・P2第二調査区							
		D地区	旧・P1	平成16年1月6日～2月5日						
(3)	池ノ奥古墳			平成16年8月23日～10月28日	世羅郡世羅町 宇津戸字天神	古墳時代後期	古墳			
	城根遺跡			平成15年1月27日～3月7日	尾道市御調町 大町字城根	古墳時代か	箱式石棺			
(4)	牛の皮城跡 (北郭群)	第4次	5郭	平成18年1月30日～2月24日	尾道市御調町 大町字二の丸	中世	城跡			
	曾川1号遺跡	E地区	旧・P4	平成15年12月1日～12月19日	尾道市御調町 大町字米田	縄文時代後期～中世	遺物包含層			
(5)	曾川1号遺跡	G地区	旧・P3	平成16年6月7日～8月6日	尾道市御調町 大町字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡			
		H地区	旧・P3側道							
		I地区	旧・P4側道	平成17年1月11日～3月4日						
		J地区	旧・P2							
(6)	曾川1号遺跡	K地区		平成17年4月11日～7月1日	尾道市御調町 大町字曾川・米田	弥生時代～中世	集落跡			
	札場古墳			平成17年11月21日～平成18年1月27日	三次市後山町 字札場	古墳時代後期	古墳			
(7)	大平遺跡			平成19年6月25日～10月5日	三次市後山町 字大平	弥生時代後期～古代	集落跡			
	後山大平古墳					古墳時代後期	古墳			
(8)	北野山遺跡			平成18年7月3日～8月4日	三次市吉舎町 敷地	平安時代	仏教開闢の施設跡			
(9)	向江田中山遺跡			平成18年4月17日～6月23日	三次市向江田町 中山	飛鳥時代	集落跡			
(10)	權現第1～3号古墳			平成17年7月11日～11月11日	三次市向江田町 権現	古墳時代中期	古墳			
(11) 本番	大番奥池第1～3・7号古墳			平成18年4月17日～8月4日	三次市吉舎町 敷地	古墳時代後期	古墳			

(報告書)

- (1) 財団法人広島県教育事業団『牛の皮城跡・曾川2号遺跡 中国横断自動車道尾道松江線建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書(1)』2005年
- (2) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(2) 曾川1号遺跡(A~D地区)』2006年
- (3) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(3) 池ノ奥古墳』2007年
- (4) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(4) 城根遺跡 曾川1号遺跡(E地区) 牛の皮城跡(第4次)』2008年
- (5) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(5) 曾川1号遺跡(G~J地区)』2008年
- (6) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(6) 曾川1号遺跡(K地区)』2008年
- (7) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(7) 札場古墳 大平遺跡 後山大平古墳』2009年
- (8) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8) 北野山遺跡』2009年



第1図 中国横断自動車道尾道松江線路線図 ((1)~(11)は報告書番号を示す。)

- (9) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（9）向江田中山遺跡』 2010年
- (10) 財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（10）椎現第1～3号古墳』 2010年

II 位置と環境

大番奥池第1～3・7号古墳は広島県北部の三次市吉舎町に所在する。三次市は49km×31kmと北西～南東方向に長い市で、旧双三郡吉舎町は平成16（2004）年4月に三次市と合併した。三次市南東部に位置する吉舎町は12km四方の町域で、その中央を南から北に江の川支流馬洗川が流下し、町域の北東部を流れる上下川を三次市三良坂町の西端で合わせて西に流れ、三次市街を抜けて本流となりやがて日本海に注ぐ。町域の大半は西の撫臼山（標高522.5m）、南東の水呑山（標高557.2m）を最高所にはほぼ標高250～500mほどの丘陵地帯で、馬洗川・上下川沿いに幅200～500mのごく狭く細長い谷底平野がみられる（標高190～300m）。町域は全体に標高が北西に低く、南あるいは東に高くなる。地形的には広義の三次盆地を形成する小盆地のひとつで、北は中国脊梁山地の一部を形成する備北山地に、南から東は吉備高原面の世羅台地及び甲奴高原と接する。三次市吉舎町は古来備後北部と南部を結ぶ交通の要衝で、帆立貝形古墳の県史跡三玉大塚古墳などの古墳を中心とする数多くの文化財が残されている。ここでは、大番奥池第1～3・7号古墳が存在する三次市吉舎町周辺を中心にその歴史的環境についてみていくことにしたい。

旧石器・縄文時代 町域南端の徳市地区の馬洗川本流と黒瀬川が合流する地点の南岸の徳市遺跡^{（1）}で、二側縁加工の小型のナイフ形石器2点（安山岩・流紋岩製）が採集されている。三次盆地では下本谷遺跡をはじめ、江の川各支流の河岸段丘上に堆積する備北層群から近年旧石器の出土が相次いでおり、これらとの比較検討が試みられようとしている。縄文時代の遺跡としては明確なものはない。

弥生時代 この時代についても殆ど様子はわかっていない。徳市遺跡及び大番奥池古墳群北方の馬洗川南岸の丘陵上に広がる敷地本郷遺跡から弥生土器や土師器が出土し、弥生時代～古墳時代の集落跡の存在が考えられる。

古墳時代 この時代の遺跡としては古墳がある。

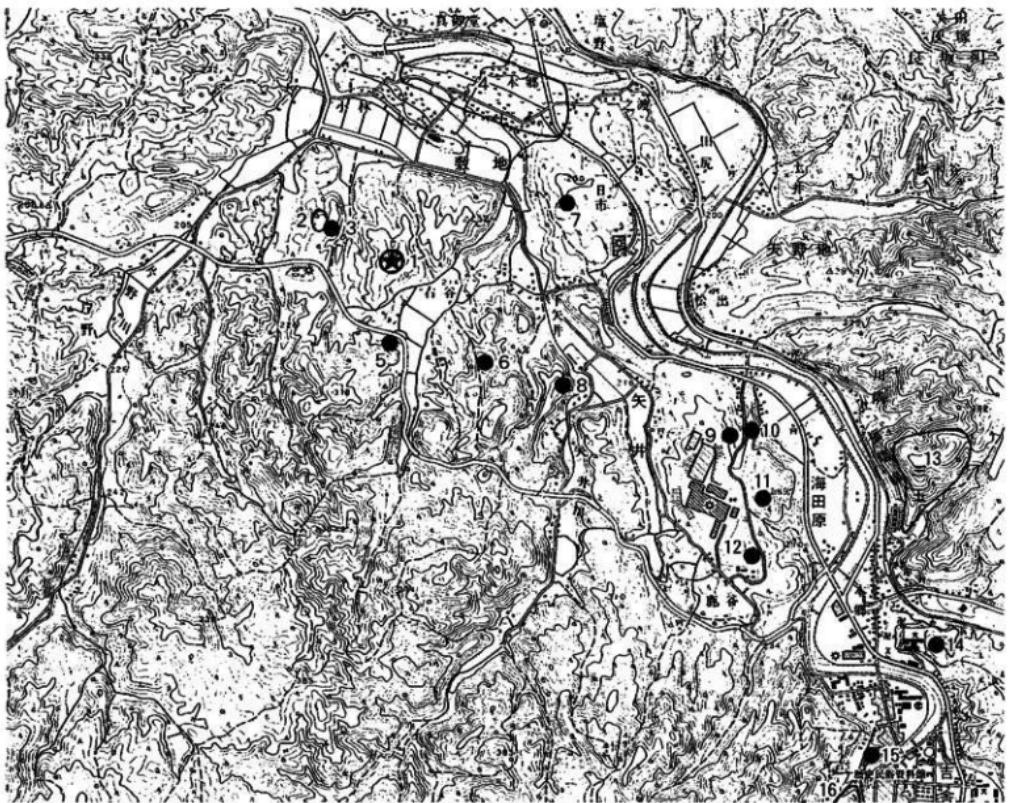
町域北西部の馬洗川沿いの敷地・矢井・海田原・矢野地地区や北東部の上下川流域の知和・上安田・安田地区などの標高200～300mの小起伏丘陵に多くの古墳が営まれている。その多くは直徑数～10数mの円墳で、いずれも堅穴系埋葬施設である可能性が高い。そのなかに、全長20～30mほどの前方後円墳を数基程度含み、盟主墳の系譜に連なる古墳とみられる。特に、県史跡三玉大塚古墳（三玉第1号古墳、三玉）は全長42mと町内最大規模をもつ帆立貝形古墳で、明治年間に短甲・筒形銅器・仿製鏡（珠文鏡・変形文鏡）をはじめ多くの鉄製品や装身具などが堅穴式石室からみつかっている。昭和55（1980）～昭和57（1982）年度に整備に伴って墳丘を中心とした調査が行われた結果、円筒埴輪・形象埴輪が出土し、三段の葺石が廻ることが判明した。5世紀後半の築造と考えられている。このほか、調査は行われていないが、全長28.5mの帆立貝形古墳

の八幡山第1号古墳（敷地）や海田原第20号古墳（全長40m、矢井）、同第29号古墳（全長33m、矢井）などの前方後円墳がある。調査が行われた古墳としては、下矢井南第3～5号古墳（矢井）、寺津第1～3号古墳（知和）、片野中山第9～12号古墳（敷地）、殿平古墳（海田原）、燎東古墳（矢井）などがある。下矢井南第3～5号古墳は比高50mの丘陵上に位置する古墳群で、径18mと最大規模の円墳である第4号古墳では東西に並列する南北に長軸をもつ粘土椁（割竹形木棺）3基と土坑（割竹形木棺）1基の計4基の埋葬施設を検出し、鉄斧・鉄劍などの鉄器、堅櫛と類例の少ない筒形石製品が出土し、4世紀末～5世紀初頭の築造とみられている。寺津第1～3号古墳では、比高40～50mの丘陵端部の径9.8～12.5mの円墳2基と丘陵上の全長35～40mの前方後方墳1基の調査が行われた。前者の第1・2号古墳はいずれも木棺墓を埋葬施設とし、墳丘・周溝内から破碎された大甕など多くの須恵器が出土し、埋葬施設からも杯蓋・杯身のセットをはじめとする須恵器や玉類（勾玉・管玉）・刀子などが出土した。6世紀前葉～中葉の築造と考えられる。第3号古墳は県内でも類例の少ない前方後方墳で、現状保存されたため後方部の詳細は不明だが、前方部では粘土椁・箱式石棺・石蓋土坑といった埋葬施設が検出されている。5世紀後半～6世紀初頭の築造と考えられている。片野中山第9～12号古墳は、大番奥池古墳群が立地する丘陵の西隣の比高30mの低丘陵上に築造された径8～10mの円墳群で、土坑を埋葬施設としている。埋葬施設から鉄鎌や刀子、周溝内から須恵器などが出土し、5世紀末～6世紀前半に古墳が造られたと考えられる。殿平古墳は比高47mの丘陵端部に築かれた箱式石棺を埋葬施設とする径7.5mの背面カットの溝をもつ古墳である。遺物は出土していないが、埋葬施設の構造などから5世紀代の築造と考えられる。燎東古墳は、大番奥池古墳群の南300mの比高20mの丘陵端部に立地する径8mの円墳で、墳頂部で並列する木棺墓2基を検出し、鉄刀・刀子片と須恵器などが出土した。6世紀前半の築造とみられる。

吉舎町内では横穴式石室を埋葬施設とする古墳はそれほど多くない。町域の縁辺部に近いあたりの谷奥や丘陵上、山麓などに散在的・孤立的な立地をみせるものが多い。調査されたものとしては、長煙山古墳（海田原）がある。径10.5m×12mの楕円形の墳丘に南に開口する石室を築いている。石室内から鉄鎌や須恵器、玉類、耳環が出土しており、6世紀末～7世紀中ごろに構築されたものと考えられる。

古代 吉舎町は大半が古代の三谿（谷）郡に含まれるが、南端の徳市は世羅郡鞆張郷、東方の知和・安田・上安田は甲勞（奴）郡田總郷に属す。「和名類聚抄」によれば、三谿（谷）郡は三谿（谷）・松部・江田・額田・刑部の五郷から成り、吉舎町は松部（「私部」の誤記と考えられている）郷にあたり、皇后のために設けられた部民（私有民）である「私部（きさいべ）」に関わると考えられている。また、律令制下では三谿（谷）郡をはじめ備後国北部の諸郡は庸・調として鉄や銅を国に納めたことが延喜式や平城京跡出土木簡などに記載されており、古くから当地域では鉄が産出したことが分かる。

古代の遺跡としては、西隣の三次郡で検出された県史跡下本谷遺跡（西酒屋町）に相当する郡衙跡は三谿（谷）郡域では見つかっていないが、三良坂町と旧三次市との境界付近の志幸町幸利



第2図 周辺遺跡分布図 (1:25,000)

- 1 大番奥池第1～3・7号古墳
- 2 片野中山第9～12号古墳
- 3 右谷遺跡
- 4 犬地本郷遺跡
- 5 煉東古墳
- 6 北野山遺跡
- 7 八幡山第1号古墳
- 8 下矢井南第3～5号古墳
- 9 長烟山古墳
- 10 殿平古墳
- 11 海田原第29号古墳
- 12 海田原第20号古墳
- 13 平松山城跡
- 14 三玉大塚古墳
- 15 尾崎山墳墓
- 16 南天山城跡

地区の馬洗川南岸の丘陵上に想定されている。

古代の遺跡としては、右谷遺跡^(敷地)・北野山遺跡^(敷地)がある。右谷遺跡は、片野中山古墳群が立地する丘陵の東斜面にある古墳時代末～奈良時代の集落跡で、方形住居跡・掘立柱建物跡のほかに須恵器・甕を杯身で蓋をした蔵骨器が出土した。北野山遺跡は大番奥池古墳群の東側の比高60mの丘陵上に立地する遺跡で、掘立柱建物跡2棟や柱穴列を検出し、杯蓋・杯や鉄鉢形の須恵器、須恵器・杯の内底面を使用した転用硯、鉄滓や鉄釘などが出土した。9世紀後半～10世紀初頭の仏教関連施設跡と考えられている。

このほか、平安時代末～鎌倉時代初頭の寺院跡の上安田廃寺跡（上安田）や11、12世紀の土師質土器が出土した県史跡吉寺廃寺跡（桧）などがある。

中世 鎌倉幕府の御家人である武藏国広沢氏が三谷郡ほぼ全域を所領化したのは12世紀末～13世紀前半で、13世紀後半には武藏国から三谷郡に移住したと考えられる。「とばすがたり」の記述によれば、鎌倉時代末期の14世紀初頭には三谷郡和知郷・江田郷周辺に居住し、和智・江田両氏を分出していたことが確認できる。このうち和智氏は南北朝時代に入ると拠点を和知郷から南の平松山城（三玉）、14世紀後半にはその南の南天山城（吉舎）に移している。1333（元弘3）年の後醍醐天皇挙兵に馳せ参じ、その後室町時代にかけて尊氏方（幕府方）と直義・直冬方（南朝方）の間で離合を繰り返す。所領の「三谷西条」（三谷郡西半の和知郷・江田郷あたり）の地をめぐり幕府と対立するものの、やがて和睦し幕府方に転じる。その後、15世紀末の応仁・文明の乱などしばらくは備後北部（内郡）の国人衆の一として守護山名氏に属して芸備地域や播磨地域などを転戦するが、芸備地域に大内氏・尼子氏が侵攻してくると、ほかの備後国人衆と同じくそれらの間で離合を繰り返すようになる。そして、1527（大永7）年の尼子氏と大内・毛利氏が激突した和智細沢山合戦で、和智氏は尼子氏から大内氏方に転じる。しかし、その後富田月山城の攻略に失敗し、勢力を急速に衰退させた大内氏や尼子氏に代わって毛利氏が芸備地域における盟主化への道を開き、やがて中国一円の領主となると、和智氏はその家臣團に組み込まれる。

中世の遺跡としては、平松山城跡・南天山城跡などの山城跡がある。平松山城跡は馬洗川東岸の比高160mの山塊に築かれた3つの郭群からなる。東西に長い80m×30mの1郭の南北には土壘があり、その北下方には東辺に土壘をもつ2郭と東の尾根続きには堅堀群がみられる。1郭の西に続く3郭は75m×55mの規模をもつ中心的な郭で、井戸跡と思われる窪地がある。貞治4（1365）年に和智氏が築城したと伝える。この平松山城跡の南方1.3kmの馬洗川西岸にある南天山城跡は、比高130mの南から北に細長く延びる丘陵尾根上に郭が連続的に築かれた山城跡で、和智氏の本拠である。南の最高所に位置する1郭は背後に高さ4mの土壁をもち、1郭の西下方には堀切を挟んで井戸跡が残る小郭がある。1郭から北に郭が連なり、2郭とその北下方の谷部の小郭にも井戸跡がみられる。軒丸・軒平瓦や懸仮、鉄滓、土鍤などが採集されているが、瓦はいずれも小振りのものであることから、仏像を安置する仏堂のようなものが存在したと考えられている。

註

- (1) 三枝健二「吉舎町出土のナイフ形石器」『みよし風土記の丘』8 みよし風土記の丘友の会 1982年
- (2) 広島県教育委員会「下本谷遺跡発掘調査概報」1980年
広島県教育委員会「下本谷遺跡第2次発掘調査概報」1981年
広島県教育委員会「下本谷遺跡第4次発掘調査概報」1983年
広島県教育委員会「下本谷遺跡第5次発掘調査概報」1984年
広島県教育委員会「下本谷遺跡第6次発掘調査概報」1985年
三次旧石器文化研究会「下本谷遺跡の基礎的研究」2007年
- (3) 最近の県北の旧石器事情については、
戸田正勝・三枝健二「広島県北東部における後期旧石器時代初頭の石器文化について」『広島県立歴史民俗資料館研究紀要』第7集 広島県立歴史民俗資料館 2009年
に詳しい。また、平成18(2006)年度以降、中国横断自動車道尾道松江線建設に伴って、財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が三次市・和知白鳥遺跡、同・段遺跡、庄原市・向泉川平1号遺跡など旧石器時代遺跡の調査を行い、まとまった良好な旧石器資料が出土している。
- (4) 広島県双三郡吉舎町教育委員会「三五大塚－調査と整備－」1983年
- (5) 平成19(2007)年度に財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。
- (6) 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺津古墳群」「灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」
(I) 1994年
- (7) 註(5)と同じ。
- (8) 平成20(2008)年度に財団法人広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が発掘調査を実施した。
- (9) 吉舎町教育委員会「焼東古墳」1995年
- (10) 註(8)と同じ。
- (11) 下本谷遺跡発掘調査団「下本谷遺跡－推定三次郡衙跡の発掘調査報告－」1975年
広島県教育委員会「下本谷遺跡発掘調査概報」1980年
広島県教育委員会「下本谷遺跡第2次発掘調査概報」1981年
広島県教育委員会「下本谷遺跡第3次発掘調査概報」1982年
広島県教育委員会「下本谷遺跡第4次発掘調査概報」1983年
広島県教育委員会「下本谷遺跡第5次発掘調査概報」1984年
広島県教育委員会「下本谷遺跡第6次発掘調査概報」1985年
- (12) 註(5)と同じ。
- (13) 財団法人広島県教育事業団「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(8)－北野山遺跡－」2009年

参考文献

- ・広島県双三郡 三次市史料総覧編集委員会「広島県双三郡 三次市史料総覧」第五篇 広島県双三郡 三次市史料総覧刊行会 1974年
- ・広島県『広島県史』地誌編 1977年
- ・広島県『広島県史』原始 古代 通史Ⅰ 1980年
- ・広島県『広島県史』中世 通史Ⅱ 1984年
- ・吉舎町教育委員会「吉舎町史」上巻 1988年
- ・三次市『三次市史』Ⅰ 2004年
- ・三次市『三次市史』Ⅱ 2004年

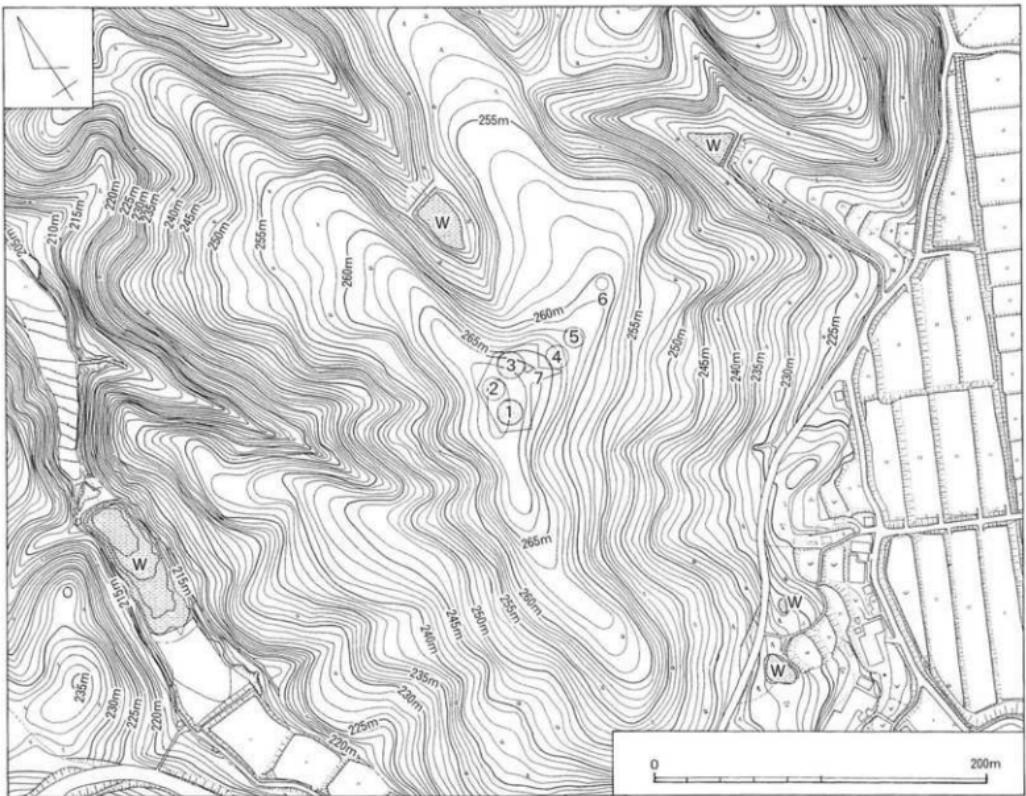
III 調査の概要

大番奥池第1～3・7号古墳は三次市吉舎町敷地に所在する木棺墓・土坑墓を埋葬施設とする古墳である。三次市南東部の、南東から北西方向に流れる江の川水系馬洗川南岸に位置する。古墳群は、ほぼ南北に細長く延びる丘陵尾根の頂部を中心存在する計7基の円墳で構成され、今回はその南西側の4基が調査対象となった。西側には幅200mほどの狭小な谷平野が北から入り込んでおり、この平野部からの比高は約50mである（尾根頂部の標高268m）。

調査は、各古墳の墳丘に十字に土層観察用の畦を設定し、人力で腐葉土・表土を除去しながら行った。南端に位置する第1号古墳は径11m、高さ1.4mの低墳丘に周溝が廻る円墳であるが、攪乱などにより埋葬施設を検出することはできなかった。墳丘盛土から摘鎌・管玉が出土した。第1号古墳の北4mにある第2号古墳は径7.7m、高さ1.3mほどの低墳丘に周溝が廻る円墳で、墳頂部で南北に並列するほぼ東西軸の木棺墓2基を検出した。埋葬施設から須恵器（杯蓋・杯身）や鉄器（鉄鎌・鉄鏃・刀子）が出土した。この第2号古墳の北東側に接するように築かれた第3号古墳は、径10.5m、高さ1.96mの墳丘に周溝が廻る円墳で、墳頂部で木棺墓3基・土坑墓1基の計4基の埋葬施設を検出した。これらの埋葬施設は攪乱坑により大きく損なわれたものもあるが、須恵器（杯蓋・杯身）や鉄器（鉄刀・鉄鎌・刀子）が出土した。また、周溝内からも鉄鎌が出土している。第3号古墳の南東側に接して2.9m×4.6mの楕円形をした低墳丘の第7号古墳がある。周溝の存在は明確でないが、墳頂には方形の土坑墓があり、内部から鉈・鉄鎌が、墳丘からは鉄鎌・鉄製紡錘車が出土した。

第2表 大番奥池第1～3・7号古墳埋葬施設一覧（単位：cm）

古墳No.	埋葬施設No.	内容	主軸方位		尾根線と 頭位	墓 坑 平面形	墓坑規模			木棺規模		出土遺物	
			長さ	幅			長さ	幅	深さ	長さ	幅		
第2号 古墳	SK 1	木棺墓	N74° W	西北西-東南東	直交	東	長方形	241	121	32	200	85	鉄鎌3・鉄鎌1+・刀子1
	SK 2	木棺墓	N77° W	西北西-東南東	直交	東	長方形	272	116	66	224	81	須恵器（杯蓋1・杯身3）・鉄鎌1
第3号 古墳	SK 1	木棺墓	N66° W	西北西-東南東	斜交	西	長方形	213	91	31	156	69	須恵器（杯蓋1・杯身1）
	SK 2	木棺墓	N48° W	西北-南東	斜交	北西	長方形	153	65	31	?	?	須恵器（杯蓋1・杯身1）
第7号 古墳	SK 3	木棺墓	N90° W	東西	平行		方形	132+	125	49	65	63	刀子1
	SK 4	土坑墓	N48° E	北東-南西	平行		長方形	82+	95	27	-	-	鉄刀1・鉄鎌4
SK 1	土坑墓	N 6° W	南北		直交		長方形	120	103	25	-	-	鉄鎌2+・施?1



第3図 大番奥池古墳群周辺地形図 (1:3,000)

IV 遺構と遺物

1. 大番奥池第1号古墳

(1) 立地と調査前の状況 (第3・4図、図版1a・1b・3b)

第1号古墳は大番奥池古墳群の南端に位置する古墳で、南北に長い丘陵尾根線頂部に立地する (標高268m)。調査前の観察では、径10.5m、高さ0.6~1.2mの円形の墳丘の裾の西半を中心に幅1.6~2m、深さ10~20cm程度のごく浅い周溝が廻ると思われた。古墳が幅20~30mの丘陵頂部から東側緩斜面 (傾斜角度約10°) に変換するあたりに立地しており、この結果、墳丘が東側からより高くみえる。また、周溝が東側では明確でないことから考えて、第1号古墳は東側を前面とする円墳であると考えられた。なお、墳丘東側斜面には後世の擾乱坑が存在する。調査前の状況は山林である。

(2) 墳丘 (第5・6図、図版2a・3c・4a~4c・5a)

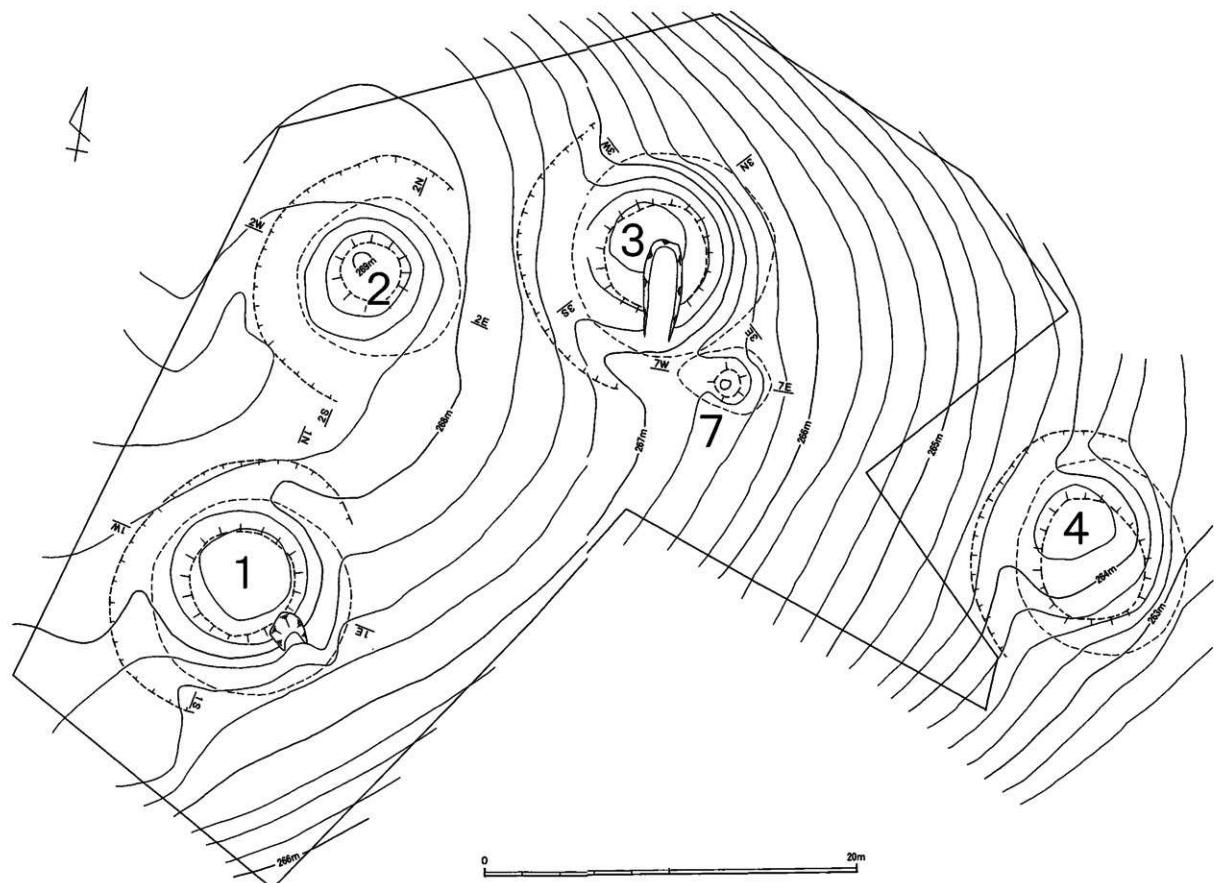
厚さ数cmの表土 (淡黄褐色土) を除去すると、南北11m、東西10.6m、高さ0.88~1.40mの大きさの円形の墳丘とその裾を取り巻く、幅1.1~1.8m、深さ14~50cmの深い周溝を検出した。周溝は北~西~南の墳丘西半2/3の範囲に馬蹄形に廻り、東側1/3の墳丘裾には周溝は存在しない。周溝底で最も標高が高いのは墳丘北西側 (標高267.906m) で、最も低い東側墳裾 (標高267.25m) と65cmの高低差がある。ほぼ東西・南北方向に設定した畦の土層を観察する限りでは、北から南、西から東に向かって緩やかに下傾する旧表土 (8層=淡黄褐色粘質土) の存在から、本古墳はほぼ北西から南東方向へとごく緩やかに下る旧地形に僅かな整地を行ったあと、厚さ50~70cmほど (現状) の盛土により構築したと考えられる。墳丘盛土には2~7層の淡橙褐色土・黄褐色土・黄褐色粘質土・明黄褐色粘質土などの黄褐色系の粘質土を用いている。

(3) 埋葬施設

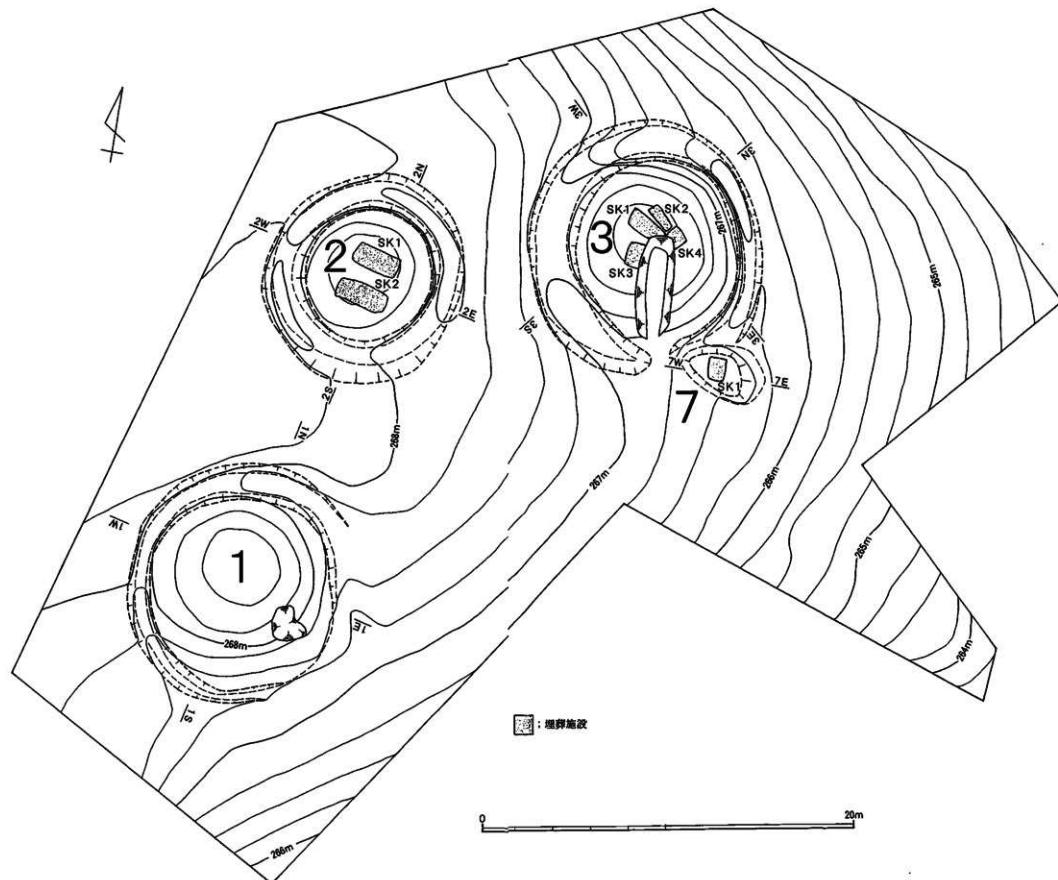
埋葬施設は検出されなかったが、墳丘中央の土層観察用畦が交差する部分の墳頂から数~10cm程度掘り下げた位置の1m程度の範囲から摘錠1点、碧玉製管玉5点が出土しており、この付近に埋葬施設が存在した可能性があるが、大きく木根による擾乱を受けており、詳細は不明である。

(4) 出土遺物 (第7図、図版14)

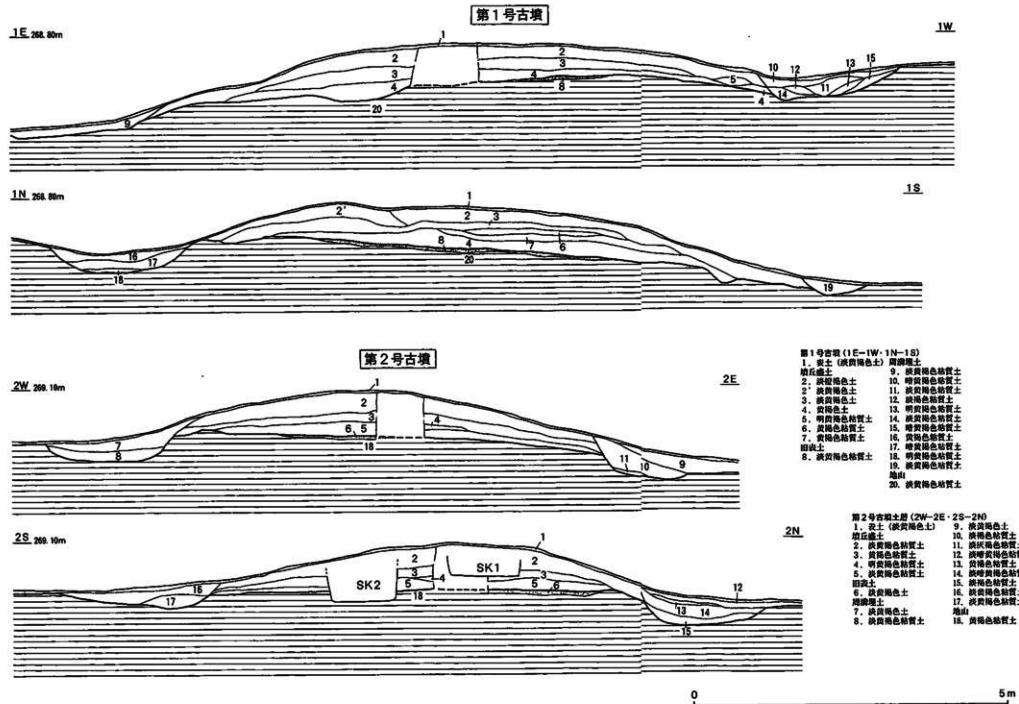
墳頂部中央で摘錠1点(3)、管玉5点(4~8)、SW区周溝内から須恵器・杯蓋片1点(1)、SW区周溝外から須恵器・杯身1点(2)が出土した。2は第1号古墳に伴うかどうか明確ではないが、その出土位置や1と時期的に近い形態的特徴などから墳丘外に削平・擾乱など何らかの理由によって出されたものと考えられ、ここでは本古墳に伴う遺物として述べることにする。



第4図 大番奥池第1～4・7号古墳調査前地形測量図(1:200)



第5図 大番奥池第1~3・7号古墳墳頂測量図 (1:200)

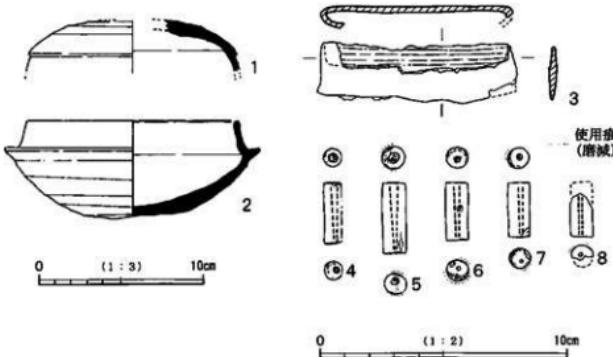


第6図 大番奥池第1・2号古墳墳丘土層断面実測 (1:60)

須恵器は杯蓋・杯身各1点がある。杯蓋1は天井部を主とする小破片で、図面上の法量や傾きに若干の誤差が存在する可能性がある。天井部と口縁部の境に鈍い稜をもち、その下にはごく浅い凹線がみられる。天井部は平坦面からこの稜部に向けて下傾しており、丸みが強い。天井部外面は稜までの $2/3$ の範囲に回転ヘラケズリが施され、そのほかの部位は内外面ともに回転ナデである。色調は灰色である。杯身2は体部は完存するが、口縁は $1/3$ 周程度を欠損している。丸みの強い体部から短く突出した受部の端部は先細り気味である。この受部から立ち上がり部がやや内傾気味に直立し、その端部は丸く納める。受部と立ち上がり部の境はあまり明確でなく、立ち上がり部は比較的高い。調整は、体部外面の $2/3 \sim 3/4$ の範囲まで回転ヘラケズリがみられ、そのほかの部位は内外面とも基本的に回転ナデを施している。ただ、内底面中央はナデつけを行っている。口径12.4cm、器高5.8cmである。

3は長さ8cm、幅2.1cm、厚さ0.3cmの摘鎌である。両側縁と刃縁に沿って袋状にしており、内部には刃縁に並行する木目がみられる。

管玉5点は、いずれも暗緑色を呈する光沢のある硬質の石材で、碧玉製と考えられる。8のみ欠損品だが、ほかはいずれも完形品である。長さ2.2~2.8cm、径0.7~1.0cm、孔径0.1~0.4cm、重さ2.19~4.19gである。5が最も大型で、4が細身、6・7はほぼ同規模で平均的な大きさ・形状である。穿孔はいずれも上→下方向への1方向と考えられる。孔径は上孔が大きく、下孔が小さく、その差は2mm程度である。これらの管玉には、両端面に擦痕を顕著に伴う摩滅がみられること、縁辺に刃毀れ的な摩滅がみられること、側面にも部分的ではあるが欠損がみられること(5~7)、孔の縁辺に紐擦れかと思われる小さな摩滅がみられること(4・6)など、使用状況を窺わせる痕跡が顕著にみられる。



第7図 大番奥池第1号古墳出土遺物実測図 (1:2, 1:3)

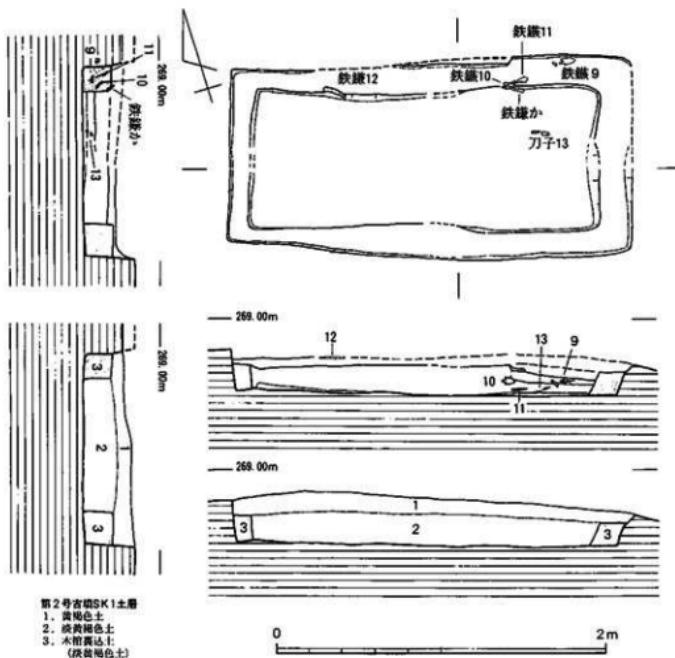
2. 大畠奥池第2号古墳

(1) 立地と調査前の状況 (第3・4図、図版1a・1b・5b)

第2号古墳は第1号古墳の北4mの尾根頂部に立地する円墳で、調査前の観察では、径が東西8.6m、南北8.3m、高さ0.79~1.17mのやや不整円形の墳丘の周囲（西半）に幅1.8~2.6mのごく浅い周溝が廻る状況がみられた。墳丘は西~南にかけて低く、北~東にかけて高い。古墳が尾根頂部の平坦部からやや北方向や東方向に下りかけたあたりに立地していることから、本古墳は北あるいは東側から墳丘がより高く見えるように造られたとみられる。即ち、北~東方向を前面とする円墳で、調査前の観察では周溝は全周せず、北~西~南の主に墳丘西側の裾を馬蹄形に廻るものと予想された。調査前の状況は山林である。なお、第2号古墳の墳頂は第1号古墳のそれに較べて0.37m高く、墳裾も同程度標高差があることから、第2号古墳は第1号古墳に較べて若干高い位置に構築されたことが分かる。

(2) 墳丘 (第5・6図、図版2b・5c・6a~7b)

厚さ数cmの表土（淡黄褐色土）を除去すると、南北7.7m、東西7.3m、高さ0.96~1.3mの規模をもつ円形の墳丘とその裾を全周する幅1.5~2.3m、深さ24~70cmの周溝を検出した。周溝底面



第8図 大畠奥池第2号古墳SK1実測図 (1:30)

は墳丘南側（標高268.06m）から墳丘西側（標高267.98m）にかけて標高が高く、最も低い墳丘北東側の周溝底面（標高267.6m）との高低差は38~46cmである。本古墳は尾根頂部の平坦面から北東側に傾斜角度6°で緩やかに下傾する緩斜面の傾斜変換点に立地する。北東3.6mには第3号古墳が近接して造られており、この第3号古墳が立地するあたりから斜面はやや急になる。

ほぼ東西・南北方向に設定した畦の土層を観察する限りでは、東西方向西半と南北方向北半の旧表土（6層=淡褐色粘質土）の残存状況から、旧地表面の南西側を僅かに削平して基盤面を形成した上に厚さ60~70cm程度（現状）の盛土を行って古墳を構築したものと考えられる。墳丘盛土は2~5層の淡黄褐色粘質土・黄褐色粘質土・明黄褐色粘質土などの黄褐色系の粘質土である。

（3）埋葬施設

墳頂部中央で南北に並列するほぼ東西方向に主軸をもつ木棺墓2基を検出した。墳頂の高い位置にある北側のSK1は墳頂から18cm下位で、また墳頂のやや低い位置にある南側のSK2は墳頂から30cmほど下位で墓坑上端を検出した。墓坑の平面形はいずれもやや不明確なもので、本来の墓坑掘り込み面は多少前後する可能性がある。2基とも墓坑内に箱形木棺を納め、裏込めを行ったものである。墓坑底面の標高はSK1が268.54m、SK2は268.14mとSK2が40cmも低い。墳丘中央に整然と並葬されており、両者の埋葬はほぼ同時で、計画的なものだったと考えられる。ただ、主軸方位や墓の構造は近似するものの、副葬内容は異なる。北側のSK1は小型武器（鉄鎌）+農工具（鉄鎌・刀子）のみで土器類をまったくもたないのに対して、南側のSK2は須恵器（杯蓋・杯身）+農具（鉄鎌）といった器を主体とした副葬内容である。これらの副葬品の大半は棺外（棺上・棺側）に置かれており、棺内に副葬された可能性のあるものはSK1の刀子のみである。

①SK1（第8図、図版7c・8a・13a・13b）

墳頂部北側に位置する木棺墓で、墓坑の主軸方位は西北西-東南東方向を指し（N74°W）、尾根線に直交する。墓坑の平面形はほぼ長方形で、長さ241cm、幅121cm、深さ32cmである。墓坑内に長さ200cm、幅85cmほどの長方形の箱形木棺が納められていたとみられる。北側辺棺外と東小口寄りの棺内から副葬品が出土した。鉄製の武器と農工具で、土器は出土していない。北側辺東半の棺外からは鉄鎌3点（9~11）と鉄鎌状製品（曲刀・未報告）、同西半から鉄鎌（曲刀）1点（12）が、東小口寄りの棺内底面からは折れた刀子1点（13）が出土した。鉄鎌・鉄鎌はいずれも切先を頭位の東小口側に向け、長軸を木棺の主軸に沿わせており、木棺側板と墓坑の間（裏込め部分）に入れ込まれたものと考えられる。刀子は切先を足位の西小口側に向けていた。鉄鎌と鉄鎌状製品は木棺上面付近で出土したのに対して、鉄鎌は中位～底面付近で出土していることから考えて、鉄鎌は木棺を墓坑に安置して裏込土を入れ込んだあとに棺の上面レベルに置かれたが、鉄鎌は裏込土を入れる途中で入れ込まれた可能性が高い。また、刀子は被葬者に副えて棺内に置かれた可能性が高く、SK1に伴う遺物は刀子（棺内）、鉄鎌（棺外側辺中位～下位）そして鉄鎌（棺外側辺上面）と3段階の副葬状況を窺うことができる。木棺の幅は東小口・西小口ともほぼ同じであるが、棺底面は西小口側が僅かに高い。しかし、墓坑幅は東小口側が広く、また遺物の

出土状況からも東小口側が頭位と考えられる。

出土遺物（第10図、図版14） いずれも鉄器で、鉄鎌（9～11）・鉄鎌（12）・刀子（13）がある。このほか、図示できなかったが、鉄鎌状製品1点がある。

鉄鎌は脇抉三角形鎌2点（9・10）と類五角形の三角形鎌1点（11）である。9は全長（現存）13.2cm、鎌身部長7.0cm、頭部長4.5cm、茎部長（現存）3.6cmである。頭部闊は角闊である。茎部は断面横長の長方形の鉄芯に縦走する木質、その上に横走する木質がみられる。頭部闊の直下4～9mm付近には横方向に巻かれた樹皮状のものが残存している。10は全長（現存）8.8cm、鎌身部長5.5cm、同幅3.1cm、頭部長5.5cmで、茎部は大半を失っている。頭部闊は角闊で、頭部には木質がみられるが、鋸び脛の可能性もある。11は全長（現存）9.1cm、鎌身部長（現存）4.2cm、同幅3.3cm、頭部長4.0cmの短い五角形の鎌身をもつもので、鎌身闊部が浅い逆刺状をなす。茎部は下半を失っている。頭部闊は角闊で、茎部には縦走する木質が良く残っている。

12は切先及び背部を一部欠くが、ほぼ原状を留める細身で小型の曲刃の鉄鎌である。長さ（現存）13.7cm、幅1.8～2.7cmで、向かって右側にある折り返しは74°、着柄角度は103°と柄に対して鈍角である。13は長さ10.5cmの刀子で、刃部長7cm、同幅1.2cm、茎部長3.5cm、同幅0.7～1.2cmである。茎部には部分的に横走する木質が認められる。闊は刃部側にあるが、その形状は明確でない。

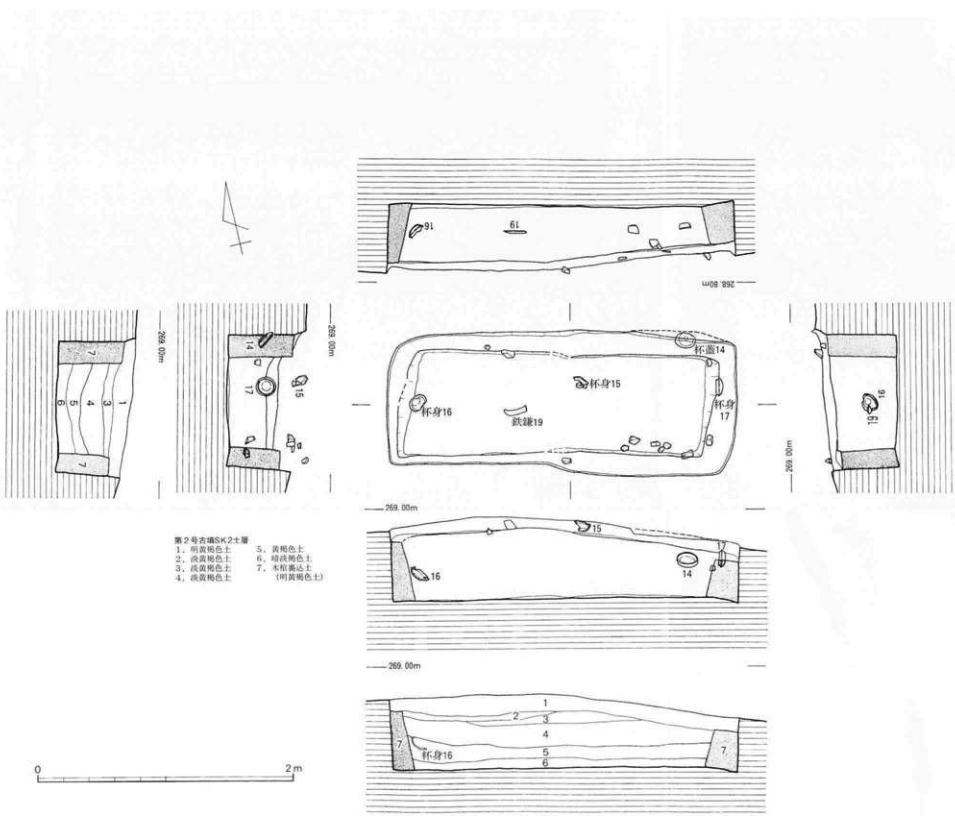
②SK 2（第9図、図版7c・8b・13c・13d）

SK 2はSK 1の南側0.7mの近距離に沿うように並葬された木棺墓で、その主軸方位はほぼ西北西～東南東方向（N77°W）を指す。長さ272cm、幅116cm、深さ66cmと深い平面長方形の墓坑の中央に、長さ224cm、幅81cmの長方形の箱形木棺を納めている。木棺と墓坑の間には縮まつた裏込土（7層、明黄褐色土）がみられる。北辺中央と南辺東半の木棺側板上付近には数～10cm大小の小礫が散在しているが、これらは木棺蓋板上に置かれた可能性がある。SK 2に伴う副葬品は須恵器（杯蓋・杯身）と鉄鎌である。須恵器はいずれも棺外、鉄鎌も棺底面から20cm上位から出土していることから、棺上に置かれたものが棺の腐朽に伴って棺内に落ち込んだ可能性が高い。杯身15は棺蓋上中央付近に置かれており、割れが激しい。杯身16は西小口、杯身17は東小口、唯一の杯蓋14は東小口寄りの北側辺棺外のいずれも上半付近に横に立てた状態で副葬されたとみられる。棺底面は若干東小口側が高く、幅は西小口側がやや広いがいずれも殆ど差がない。頭位については明確ではないが、墓坑幅がやや広い東小口側と考えられる。

出土遺物（第10図、図版14）須恵器と鉄鎌がある。須恵器は杯蓋1点（14）と杯身3点（15～17）である。

杯蓋は天井部の丸みが強い大型のもので、天井部と口縁部の境に形骸化したやや鈍い稜とその下位に接して浅い凹線がみられる。天井部外面にはこの稜の上1.7cm付近まで回転ヘラケズリがなされ、そのほかの外面から内面にかけては回転ナデを施す。なお、天井部内面中央は未調整である。色調は暗灰色で、口径14.2～14.6cm、器高5.6cmである。

杯身はいずれも酷似した器形で、丸みの強く深い底部から外上方に内湾気味に立ち上がったあ

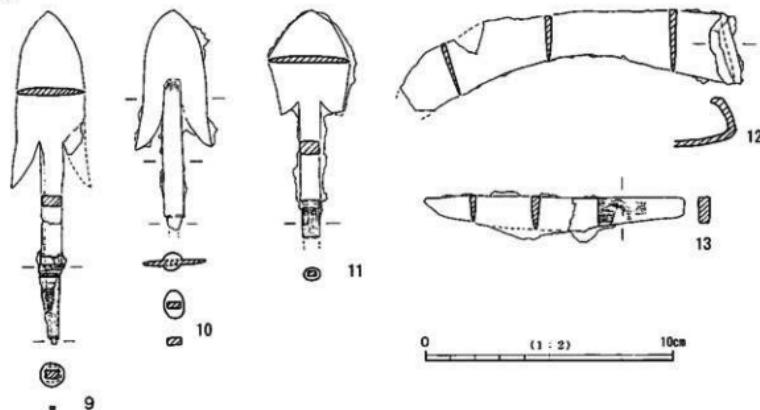


第9図 大番奥池第2号古墳SK2実測図(1:30)

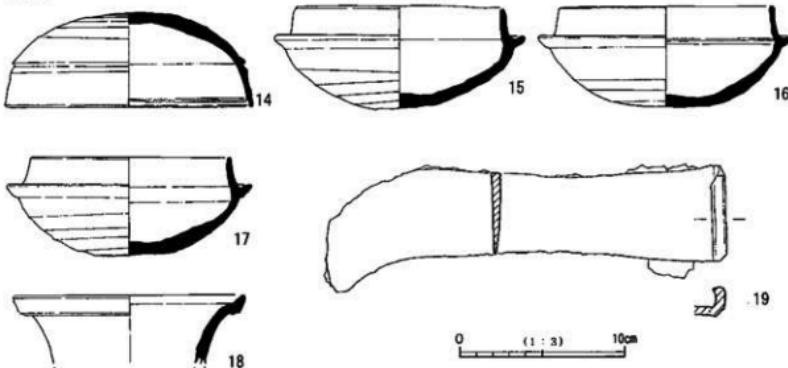
と、直角に近く折れて外方に突出する受部の端部をやや尖り氣味に納める。水平に近い受部と若干内傾氣味にほぼ直立する長い立ち上がり部との境はやや不明確である。立ち上がり部の端部はほぼ丸く納めている。口径11.8~12.4cm、器高5.9~6.1cmとほぼ同じ大きさである。調整は、外面の受部直下1~3cm程度まで回転ヘラケズリ、そのほかはほぼ回転ナデである。17は底面中央が平坦で回転ヘラ切りを行っている。また、16・17の内底面中央は一定方向のナデあるいは未調整とみられる。

鉄鎌は長さ16.1cm、基部幅3.8cmの曲刃鎌で、完形である。折り返し角度・着柄角度ともにほぼ直角である。

SK1



SK2



第10図 大番奥池第2号古墳出土遺物実測図 (1:2, 1:3)

(4) 周溝出土の遺物（第10図）

18は復元口径13.7cmの須恵器・壺の口縁部片で、北西側の周溝上面で出土した。外反する口頭部の端部を肥厚させて尖り気味に納める。調整は、頭部外面はやや斜行する櫛描直線文のうちに回転ナデを施す。口縁外面から内面にかけては回転ナデである。

3. 大番奥池第3号古墳

(1) 立地と調査前の状況（第3・4図、図版1a・1b・8c）

第3号古墳は第2号古墳の東4m弱に近接して造られている。尾根頂部から緩やかに傾斜する東斜面の上端付近に立地する。古墳が立地するあたりの斜面は、古墳の西側は傾斜角度6~8°と比較的緩やかだが、東側は10°とやや急になる。この付近の標高は266~268mである。調査前の観察では、西側の墳丘高は低く、東側は高く、かなり高低差があるようみえた。東西11m、南北10.7m、高さ0.6~1.2mの墳丘の西側裾を幅2.5~3m、深さ10cm程度の浅い周溝が半周程度廻るとみられた。墳丘中央から南側にかけて長さ5m、幅2mほどの深い擾乱坑が存在する。調査前の状況は山林である。

(2) 墳丘（第5・11図、図版9a~10b）

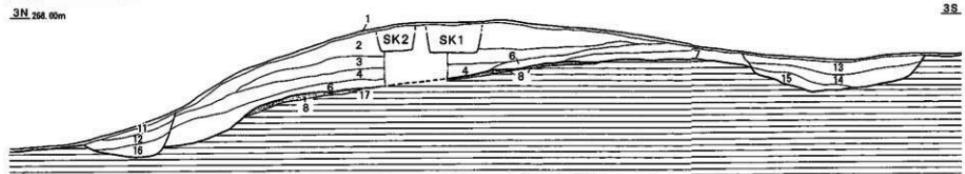
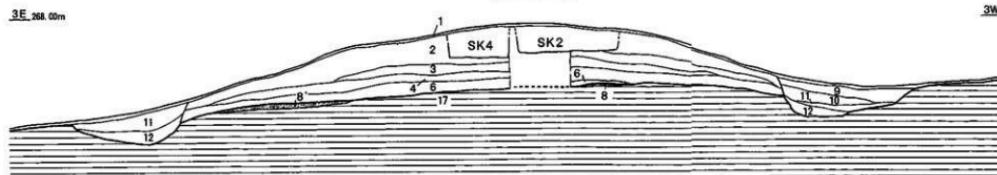
厚さ数cmの表土（淡黄褐色土）を除去すると、南北10.5m、東西9.3m、高さ1.02~1.96mのやや南北に長い円形の墳丘が現れ、墳丘の裾に幅1.3~2.8m、深さ0.18~0.65mの周溝が廻る。周溝はほぼ全周するが、南端が1m程度途切れている。周溝底面は墳丘西側が標高267.078mと最も高く、最も低い墳丘北～北西側と1m以上の高低差がみられる。

ほぼ東西・南北方向に設定した畦の土層を観察する限りでは、南から北、西から東へと緩やかに下傾する旧表土（8・8'層=淡暗褐色粘質土）の存在から、南西から北東方向へと緩やかに下る旧地形上を僅かに整地したあと、厚さ80~90cm程度（現状）の盛土を行って古墳を構築したと考えられる。墳丘盛土は、2~7層の淡黄褐色粘質土・黄褐色粘質土・淡褐色粘質土などの黄褐色系統の粘質土を用いている。

(3) 埋葬施設

墳頂部で4基の埋葬施設を検出した。木棺墓3基と土坑墓1基で、大きな擾乱坑によって破壊を受けている。これらの埋葬施設は第2号古墳のものに比べて、明確な重複こそ現状ではみられないものの、配置状況はやや雑然としており、埋葬時期にある程度の時間差が考えられるとともに、被葬者間に階層差が存在した可能性が高い。木棺墓は長方形ないしは方形の墓坑内に木棺を納めて裏込めを施したものである。各墓坑はその上端面の検出が難しく、墳頂部（標高267.90m）から10~10数cm盛土を掘り下げたあたり（標高267.73~267.77m）で墓坑上端をやや不明確ながら検出することができた。墓坑の深さはSK3（深さ49cm）を除いていずれも30cm内外と浅く、墓坑底面の標高も267.27~267.49mと比較的揃っている。墓坑の平面形が長方形の木棺墓2基（SK1・2）は墓坑上面に須恵器の蓋杯のセット1組を置き、正方形に近い平面形をした木棺墓SK3は棺内から刀子のみ出土しており、いずれも副葬内容は第2号古墳の埋葬施設に比べる

第3号古墳



第7号古墳



第3号古墳土層 (3E-3W・3N-3S)

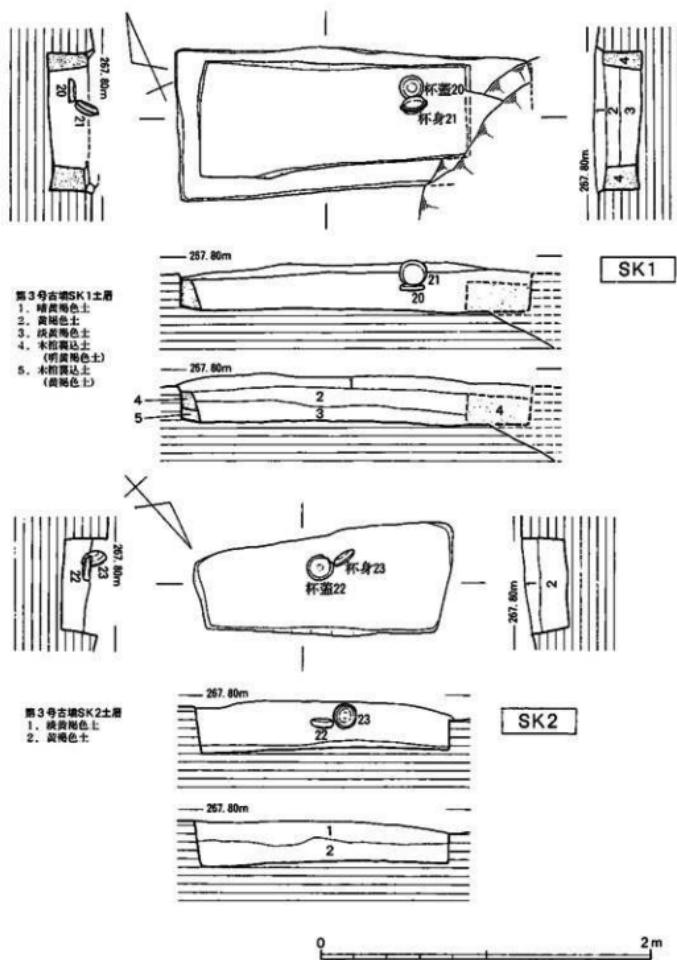
- 1. 黄土 (赤褐色土) 周縁埋土
- 2. 黄褐色粘質土
- 3. 黄褐色粘質土
- 4. 黄褐色粘質土
- 5. 黄褐色粘質土
- 6. 黄褐色粘質土
- 7. 黄褐色粘質土
- 8. 黄褐色粘質土
- 9. 淡黄褐色粘質土
- 10. 淡黄褐色粘質土
- 11. 淡紫色粘質土
- 12. 淡暗黄褐色粘質土
- 13. 淡黄褐色粘質土
- 14. 淡黄褐色粘質土
- 15. 淡黄褐色粘質土
- 16. 黄褐色粘質土
- 17. 淡黄褐色粘質土

第11図 大番奥池第3・7号古墳墳丘土層断面実測図 (1:60)

0

5m

と貧弱である。これに対して、土坑墓SK4は擾乱坑によって大きく壊されているものの、鉄刀や複数の鐵鏃が出土しており、副葬内容は豊かである。須恵器のみ副葬するものと小型鐵製工具のみを副葬するもの、そして武器のみを集中的に副葬するものなど、副葬内容と状況は様々で、統一性がない点が注意される。



第12図 大番奥池第3号古墳SK1・2実測図(1:30)

① SK 1 (第12図、図版10 c・12 a・13 e)

墳頂部中央に位置する木棺墓で、墓坑の主軸はほぼ西北西-東南東方向 (N66° W) を指す。墓坑の平面形はやや東小口が狭くなる長方形で、長さ213cm、幅(西小口)91cm、深さ31cmである。東小口は攪乱坑によって一部壊されている。墓坑の中央に長さ156cm、幅55~69cmの長方形の箱形木棺を納めたとみられる。木棺東小口から30cm西に寄った位置の上半に横に立った状態の須恵器・杯身1点(21)とその北側に接するように伏せて置かれた杯蓋1点(20)が出土した。本来は木棺蓋板上に置かれたものが、木棺の腐朽に伴ってなかに半ば落ち込んだものとみられる。墓坑底面は西小口側が若干高く、幅は東小口よりも西小口のほうが広い。これらのことからSK 1の頭位は西小口側と考えられる。

出土遺物 (第14図、図版15) 須恵器(杯蓋・杯身)各1点がある。

杯蓋(20)は扁平な器形で、口縁に一部欠損があるがほぼ完形である。凹凸があるがほぼ平坦な天井部から開き気味に短い口縁が垂下し、端部は丸く納める。天井部と口縁の境の屈曲部外面には形骸化した稜のごく僅かな名残とその直下にごく浅い凹線1条が施される。天井部外面には稜の1cm程度近くまで回転ヘラケズリが行われている。口縁外面から内面全体にかけて回転ナデで、天井部内面中央には一定方向のナデがみられる。口縁内面の端部近くはごく緩やかな段状を呈する。色調は明灰色で、口径14.3cm、器高3.2~3.9cmである。杯身(21)も扁平な器形で、口縁に部分的に欠損があるもののほぼ完形品である。丸みのある体部から外上方に延びて外方に突出する受部からやや不明確な境界を経て若干内傾気味に立ち上がり、口縁端部は丸く納める。受部は水平に近く、端部は丸い。受部から2cm程度のあたりまで体部外面に回転ヘラケズリを行い、体部上半~口縁部の内外面の調整は回転ナデ、体部中位の内面は未調整で、内底面は一定方向のナデを施している。色調は灰色で、口径12.2~13.1cm、器高4.6cmである。

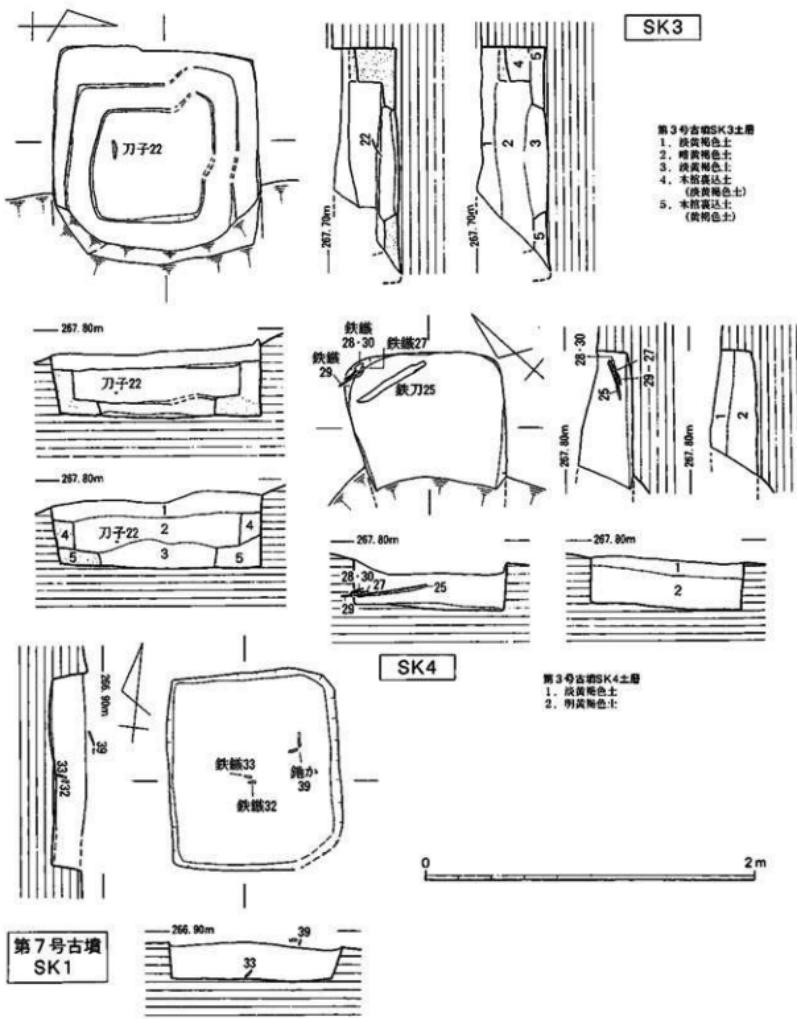
② SK 2 (第12図、図版11 a・12 a・13 f)

墳頂部北東側にSK 1とほぼ主軸を揃えて接するよう造られている木棺墓で、墓坑の主軸はほぼ北西-南東方向 (N48° W) を指す。北西側小口の幅が広く、南東側小口の幅が狭い長台形状の平面長方形の墓坑に木棺を納めたと考えられる。木棺痕跡は明確にしえなかったが、墓坑の大きさは長さ153cm、幅(北西側小口)65cm、同(南東側小口)40cm、深さ31cmである。墓坑ほぼ中央の、底面から12cm上位で須恵器・杯蓋は仰向けの状態で、杯身は横に立てた状態で相接するように出土した。これらの須恵器は墓坑内中位付近にあることから、本来は棺上に置かれていたが、棺の腐朽に伴って棺内に半ば落ち込んだものとみられる。坑底の幅が広く、底面が若干高い北西側が頭位と考えられる。

出土遺物 (第14図、図版15) 須恵器(杯蓋・杯身)各1点がある。

杯蓋・杯身共にSK 1出土のものに形態・調整が酷似する。杯蓋(22)は凹凸があるもののほぼ水平な天井部から強く屈曲して、口縁が開き気味に垂下する。口縁部は端部で外側に短く折れ、端部は丸く納める。口縁端部の内面には緩やかな段がみられる。天井部と口縁部の境の屈曲部の外面には形骸化した僅かな稜とその下位に浅い凹線がみられる。天井部外面は稜から2cm近くま

で回転ヘラケズリを施し、そのほかの部位は口縁部内外面を主体に回転ナデ、天井部内面中央付近は一定方向のナデ、そのほかはごく軽い回転ナデかあるいは未調整である可能性がある。口縁の1/6周程度に欠損がみられるものの、ほぼ完形である。暗灰色の色調をなし、口径15.0cm、



第13図 大番奥池第3号古墳SK3・4、第7号古墳SK1実測図 (1:30)

器高2.7~4.1cmである。杯身(23)は21に較べると底部の丸みが強く、立ち上がり部が長い。受部は端部を尖り気味に納め、立ち上がり部との境は明確である。立ち上がりは内上方に直線的に延び、端部を丸く納める。口縁端面は内傾し、そこにごく細い沈線を施している。調整は、体部外面は底部から受部の2cm近くまで回転ヘラケズリを施し、そのほかは内面にかけて回転ナデである。色調は暗灰色で、口径12.7~13.0cm、器高4.7cmである。口縁部や受部に若干の欠損がみられるが、ほぼ完形である。

③SK3(第13図、図版11b・12a・13g)

SK3はSK1の南0.4mに位置する方形の木棺墓で、東端を擾乱坑によって壊されている。主軸は東西方向(N90°W)を指す。墓坑の大きさは東西(現存)132cm、南北125cm、深さ49cmで、その中央が二段構造になっており、下段中央に65cm×63cmの大きさのほぼ正方形の木棺が納められていたと考えられる。南辺寄りの底面から8cm上方で刀子が出土した。切先は東に向けており、本来的には木棺の蓋の上に置かれていたと考えられる。

出土遺物(第14図、図版15) 刀子1点(24)がある。全長11.5cm、刃部長8.4cm、刃部幅1.7cm、茎部長3.2cmで、両闘(角闘)とみられる。闘寄りの茎部の表面には横走する木質が残存する。

④SK4(第13図、図版11c・12a・13h)

墳頂部中央やや東寄りに位置する土坑墓で、西側に接するようにSK1・2が存在する。墓坑の主軸はほぼ北東-南西方向(N48°E)を指し、南西側を擾乱坑によって壊されていた。墓坑の平面形はほぼ長方形ないしは方形とみられるが明確ではない。墓坑の大きさは、北東-南西方向(現存)82cm、北西-南東方向95cm、深さ27cmである。墓坑北隅の底面から数~10cm程度上方で鉄刀1点と鉄鎌4点がいずれもほぼ東西方向に並んで一塊で出土した。鉄刀の切先は西、鉄鎌の切先はいずれも東に向いていた。これらはその出土状況から、本来的には墓坑上面に置かれていたものが、墓坑内部に落ち込んだものと考えられる。このことから、本墓坑には蓋で覆われていたかあるいは木棺が納められていた可能性がある。

出土遺物(第14図、図版15) 鉄刀1、鉄鎌4がある。このほか図示していないが、鉄刀の近くから須恵器の小破片が出土した。

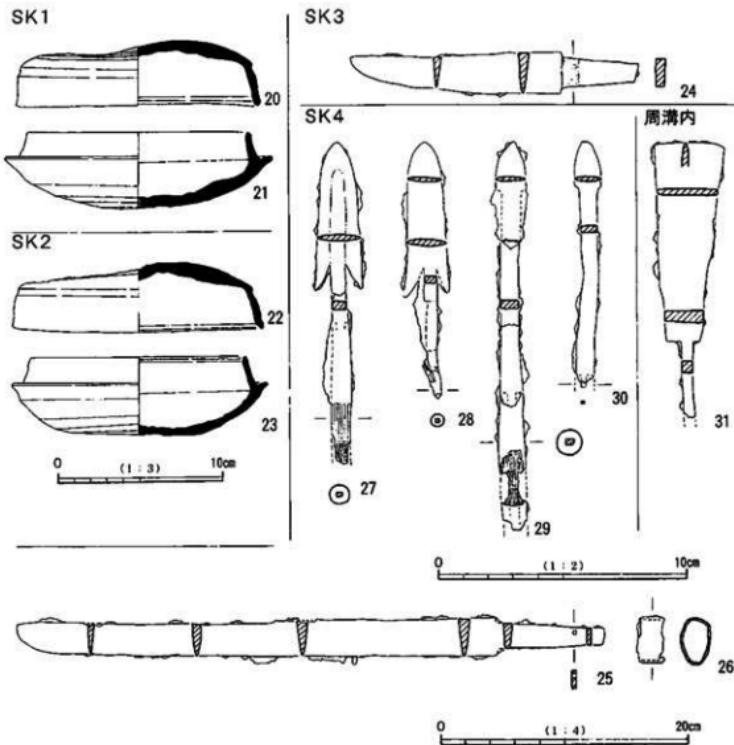
鉄刀(25)は全長47.2cm、刃部長38.6cm、刃部幅3.2cm、茎部長8.5cm、茎部幅2.1cmで、角闘の両闘である。基尻から2.2cmのところに径3mmほどの目釘孔がある。26はこの鉄刀に伴う刀装金具のひとつとみられるが、詳細は不明である。長さ2cm、幅3.7cm、厚さ2.4cmで、断面形は倒卵形である。内面には横走する木質がよく残ることから、柄に伴う金具の可能性が高い。例えば、レドウ鉢に近い縁金具かあるいは柄尻の縁目金具が考えられる。

鉄鎌4点は脇抉三角形鎌2点(27・28)と長頭鎌の鐵身部が三角形のもの2点(29・30)がある。27は全長(現存)12.8cm、鐵身部長5.9cm、同幅2.0cm、頭部長2.4cm、茎部長(現存)5.6cmである。頭部にはごく部分的に桜の樹皮状のものの痕跡がみられ、茎部には縦走する木質が顕著に残る。28は基部が多少折れているが、ほぼ完形品である。全長(現存)10.2cm、鐵身部長6.2cm、同幅1.9cm、頭部長3.4cm、茎部長(現存)1.9cmである。茎部には部分的に縦走する木質が残る。

29・30は三角形の鐵身部の間が角闘のもので、29は全長15.5cm、鐵身部長2.0cm、同幅1.2cm、頭部長8.0cm、茎部長（現存）5.5cmである。茎部には縦走する木質が顯著に残る。30は全長（現存）9.8cm、鐵身部長1.9cm、同幅1.1cm、頭部長7.4cm、茎部長（現存）0.5cmである。鐵身部の間は撫^{なぐ}角氣味、頭部は角闘と考えられる。

（4）周溝出土の遺物（第14図、図版15）

31はS E区周溝内で出土した鐵鎌（方頭鎌）で、茎部を一部欠失している。大きさは、全長（現存）11.1cm、鐵身部長8.0cm、同幅1.3～2.8cm、茎部長（現存）3.1cmである。鐵身部の間は角闘である。



第14図 大番奥池第3号古墳出土遺物実測図 (1:2, 1:3, 1:4)

4. 大番奥池第7号古墳

(1) 立地と調査前の状況 (第3・4図、図版1a・1b・8c)

第7号古墳は第3号古墳の南東側に接する平面不整橢円形の古墳で、当初は第3号古墳の櫛乱坑から出された排土の堆積で、古墳の可能性は少ないと考えていた。しかし、表土を除去する段階で鉄鎌片(40)が出土したことから精査したところ埋葬施設を検出し、内部から鉄鎌片などが出土し古墳であると断定した。

第7号古墳は尾根頂部から緩やかに東方向に下傾する斜面に立地する(標高267m)。調査前の状況では、東西5m、南北3.5m、高さ0.23~0.74mの墳丘をもち、周溝は存在しない可能性が高いと思われた。墳形は東西に長い不整橢円形で、墳丘は西が低く、東が高い。調査前の状況は山林である。

(2) 墳丘 (第5・11図、図版9a・12b)

厚さ数cmの表土(1層=淡黄褐色土)を除去すると、東西4.6m、南北2.9m、高さ0.24~0.76mの大きさの不整橢円形の墳丘が現れた。周溝はない。

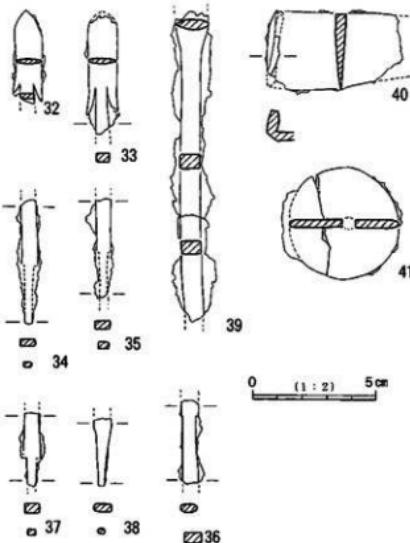
等高線に直交するほぼ東西方向の土層を観察する限りでは、西から東に緩やかに下る旧地形上に2・3層(黄褐色粘質土・淡黄褐色粘質土)の黄褐色系の粘質土を40cm程度盛って古墳は構築されている。

(3) 埋葬施設 (第13図、図版12c)

墳頂部中央で、南北120cm、東西103cm、深さ25cmの平面形長方形の土坑墓を検出した。主軸はほぼ南北方向(N6°W)を指す。坑内中央の底面付近から鉄鎌の鎌身部片2点(32・33)、東辺寄りの墓坑上面付近から鉢状の鉄器片(39)が、そのほか坑内覆土から頭部・茎部を主体とする鉄鎌片5点(34~38)が出土した。

出土遺物(第15図、図版15) 鉄鎌片7点と鉢状の鉄器片がある。

鉄鎌片はいずれも長頭鎌の鎌身部及び頭・茎部の破片で、完形のものはない。32・33は脇抉三角形の長頭鎌の鎌身部で、やや細身の32は全長(現存)3.7cm、鎌身部長3.6cm、同幅1.1cmである。33は先端に欠損がみられるが、全長(現存)4.7cm、鎌身



第15図 大番奥池第7号古墳出土遺物実測図(1:2, 1:3)

部長（現存）4.0cm、同幅1.3cmである。34～38は全長（現存）2.7～5.0cmの頸部・茎部片で、いずれも鐵身部を欠いている。ただ、これらはいずれも墓坑内中央付近で出土しているので、鐵身部片の32・33と接合する可能性は高い。34・35・37はいずれも頸部の関が角関で、36は鐵身部の関が角関の可能性が高い。

39は茎部を主とする鉢の破片と考えられるもので、全長（現存）12.4cmである。上端に一部刃部が残る。

（4）墳丘出土の遺物（第15図、図版15）

鉄鎌片と鉄製紡錘車各1点がある。

40は向かって左側に着柄のための折り返しをもつ曲刀鎌で、長さ（現存）5.5cm、幅3.2cmである。折り返し角度は85°、着柄角度は97°である。墳頂部で出土した。

41は墳丘北側裾で出土した鉄製紡錘車で、径4.5cmである。中央に円孔があると思われるが明確でない。

第3表 大番奥池第1～3・7号古墳出土遺物一覧

（1）須恵器（＊：復元値）

報告 No.	器種	古墳名	出土位置	法量(cm)		
				口径	受部径	器高
1	杯蓋	第1号古墳	SW区周溝内	—	—	—
2	杯身	第1号古墳	SW区周溝外	12.4	—	5.8
14	杯蓋	第2号古墳	SK2	14.6	—	5.6
15	杯身	第2号古墳	SK2	12.2	15.0	6.1
16	杯身	第2号古墳	SK2	12.4	15.2	6.0
17	杯身	第2号古墳	SK2	11.8	14.4	5.9
18	壺	第2号古墳	NW区周溝上面	*13.7	—	—
20	杯蓋	第3号古墳	SK1	14.3	—	3.9
21	杯身	第3号古墳	SK1	13.1	15.7	4.6
22	杯蓋	第3号古墳	SK2	15.0	—	4.1
23	杯身	第3号古墳	SK2	13.0	15.1	4.7

(2) 鉄器(括弧:現存値)

報告 No.	器種	古墳名	出土位置	法量(cm)						
				全長	鐵身部長さ	鐵身部幅	頭部長さ	頭部幅	基部長さ	基部幅
3 捣鎌		第1号古墳	埴丘盛土	長さ8.0	刃幅2.1	厚さ0.3				
9 鉄鎌		第2号古墳	SK1	(13.2)	7.0	(2.7)	4.5	0.9	(3.6)	0.6
10 鉄鎌		第2号古墳	SK1	(8.8)	5.5	3.1	5.5	0.8	(0.5)	0.5
11 鉄鎌		第2号古墳	SK1	(9.1)	(4.2)	3.3	4.0	0.8	(1.5)	0.7
12 鉄鎌		第2号古墳	SK1	長さ(13.7)	幅2.7	背厚0.4				
13 刀子		第2号古墳	SK1	長さ10.5	刃部長7.0	刃部幅1.4	刃部背厚0.4	茎部長3.2	茎部幅1.2	
19 鉄鎌		第2号古墳	SK2	長さ16.1	幅3.8	背厚0.4				
24 刀子		第3号古墳	SK3	長さ11.5	刃部長8.4	刃部幅1.7	刃部背厚0.5	茎部長3.2	茎部幅1.1	
25 鉄刀		第3号古墳	SK4	長さ47.2	刃部長38.6	刃部幅3.2	刃部背厚1.0	茎部長8.5	茎部幅2.1	
26 柄縁金具か		第3号古墳	SK4	—						
27 鉄鎌		第3号古墳	SK4	(12.8)	5.9	2.0	2.4	0.6	(5.6)	0.8
28 鉄鎌		第3号古墳	SK4	(10.2)	6.2	1.9	3.4	0.5	(1.9)	(0.4)
29 鉄鎌		第3号古墳	SK4	(15.5)	2.0	1.2	8.0	0.9	(5.5)	1.1
30 鉄鎌		第3号古墳	SK4	(9.8)	1.9	1.1	7.4	0.7	(0.5)	0.2
31 鉄鎌		第3号古墳	SE区周溝内	(11.1)	8.0	2.8	—	—	(3.1)	0.5
32 鉄鎌(鐵身)		第7号古墳	SK1	(3.7)	3.6	1.1	(0.8)	0.5	—	—
33 鉄鎌(鐵身)		第7号古墳	SK1	(4.7)	(4.0)	(1.3)	(1.9)	0.6	—	—
34 鉄鎌(頭・茎)		第7号古墳	SK1	—						
35 鉄鎌(頭・茎)		第7号古墳	SK1	—						
36 鉄鎌(頭)		第7号古墳	SK1	—						
37 鉄鎌(頭・茎)		第7号古墳	SK1	—						
38 鉄鎌(頭・茎)		第7号古墳	SK1	—						
39 鈴か		第7号古墳	SK1	長さ(12.4)	刃部幅1.3	茎部幅0.8				
40 鉄鎌		第7号古墳	埴丘	長さ(5.5)	幅3.2	背厚0.4				
41 編鍔車		第7号古墳	埴丘	径4.5	厚さ0.3					

(3) 玉類(括弧:現存値)

報告 No.	器種	古墳名	出土位置	法量(cm · g)			
				長さ	径	孔径	重さ
4 管玉		第1号古墳	埴丘盛土	2.5	0.7	0.4	2.19
5 管玉		第1号古墳	埴丘盛土	2.8	1.0	0.4	4.19
6 管玉		第1号古墳	埴丘盛土	2.3	0.9	0.3	3.22
7 管玉		第1号古墳	埴丘盛土	2.2	0.9	0.2	2.88
8 管玉		第1号古墳	埴丘盛土	(1.8)	0.9	0.2	(1.11)

第4表 広島県内の主な墳頂部複数埋葬古墳

No.	文獻番号	所在地	古墳名	立地	墓室(m)	比高	形状	道丘規模(直徑.m)	時期	埋葬施設**			副葬品	その他の	
										基盤(壁面)	内室	名義			
1	本古	三次市吉舎町大畠興池2	丘頂	268m	50m	円	7.7×7.5		6c前半	○石垣(木棺)	SK1	A	鏡3・鏡1面(?)~2.刀子1		
										○石垣(木棺)	SK2		漆器(?)		
2	本古	三次市吉舎町大畠興池3	丘陵端斜坡最高点	267m	50m	円	10.5×9.3		4	○石垣(木棺)	SK3	C	漆器(?)		
										○石垣(木棺)	SK4		刀子1		
3	1	三次市吉舎町燈籠	丘陵端部	242m	20m	円	9×8	6c前半	2	○石垣(木棺)	SK1	A	東山器(?)・骨身3?	剪刀片1・刀子1	
										○石垣(木棺)	SK2		剪刀片1・刀子1		
4		三次市吉舎町片野中山12	丘頂	235m	30m	円	10×9.7	5c末~6c前半	2	○石垣(木棺)	第1主室施設	A			
										○石垣(木棺)	第2主室施設				
5		三次市吉舎町下矢井南4	丘頂	273m	50m	円	18	4c末~5c初	4	○石垣(羽竹形木棺)	SK1	A	刀子2	短棒1	
										○石垣(羽竹形木棺)	SK2		短棒2・刀子1		
										○石垣(羽竹形木棺)	SK3		短棒1・鏡1・刀子1		
										○石垣(羽竹形木棺)	SK4		短棒1		
6	2	三次市向江田町櫛原2	丘頂	209m	20m	円	20		5c	○式石垣	SK1	C			
										○式石垣	SK2		刀子1	骨玉・管玉	
7	3	三次市向江田町櫛原3	丘頂	208m	20m	円か	10~12		2	○式石垣	SK1	A	刀子1	22.3・骨玉・刀子1	
										○式石垣	SK2		刀子1・骨玉・刀子1		
8	4	三次市向江田町下山手5	丘頂	223m		長方	22×16	5c	3	○式石垣	SK1	C	短棒1		
										○式石垣	SK2				
9		三次市向江田町櫛原4	丘頂	211m	10m	椭円	10×8.4	5c	3	○式石垣	SK1	C		ガラス小玉4	
										○式石垣	SK2				
10		三次市向江田町櫛原5	丘頂	208m	10m	方	14×13.7	5c	3	○式石垣	SK1	B	短棒1・不明鉄器	短棒1	
										○式石垣	SK2				
11		三次市向江田町櫛原6	丘頂	206m	10m	方	9.3	5c	3	○式石垣	SK1	C			
										○式石垣	SK2				
12	5	三次市向江田町野福南11	丘頂	210m		円	10×8+	6c前半	2	○式石垣	2.2主室	A			
										○式石垣	2.2主室				
13		三次市向江田町宮の本21	丘頂	245m	50m	円	14.4×13.6	5c	2	○式石垣	SK1	A	短棒1・鏡(?)・鏡1		
										○式石垣	SK2				
14		三次市向江田町宮の本22	丘頂	244m	50m	円	10.8×9.6	5c	2	○式石垣	SK1	A	刀子1		
										○式石垣	SK2				
15		三次市向江田町宮の本23	丘頂	243m	50m	円	10.6×8.8	5c	3	○式石垣	SK1	C			
										○式石垣	SK2				
16		三次市向江田町宮の本24	丘頂	247m	50m	円	30.8×29.6	5c	3	○式石垣	SK1	A		小型鏡(珠文鏡)	
										○式石垣	SK2		(鏡1・鏡底・刀子片か)		
17	6	三次市十日市花園19	丘頂	193m		円	15	5c末~6c前半	3	○式石垣	第1主室	A'			
										○式石垣	第2主室				
18	7	三次市南塙敷縄壺	丘陵端部	205m		円	20	6c前半	3	○式石垣	3.3主室	A			
										○式石垣	3.3主室				
19	8	三次市南塙敷縄原下7	丘頂	226m		円	10	5c末~6c初	2	○式石垣	SK1	A	短棒2・刀子1		
										○式石垣	SK2				
20	9	三次市西酒屋通高塚	丘頂	224m		帆立貝	全長46	5c後半	2	○式石室	第1主室	A	鏡1+3.3主室・鏡1・刀子	文書帶神鏡鏡・鏡1・ガラス小玉・日石	
										○式石室	第2主室				
21	10	三次市西酒屋通大坂6	丘陵端部	238m	2~5m	円	9	5c後半~6c前半	2	○式石室	第1主室	A	鏡器(?)・鏡1・骨身7・骨身7・骨身7・刀子1・鏡1		
										○式石室	第2主室				
22	11	三次市西酒屋通寄貢8	丘頂	230m		円	12		2	○式石室	第1主室	A			
										○式石室	第2主室				

地 文 號 番 号	所 在 地	古 墳 名	立 地	高 度 (m)	比高	造形	道丘規範 (直徑, m)	時 期	墳 頂 施 設**			土 器	副 葬 品	その 他		
									基數(埋藏)	内 容	配列					
49 28	福山市駅家町	石牆複現2	丘頂	74m	40m	円	15×12	5c 中項	2	木蓋土坑	第1号主体部	A				
50 29	福山市駅家町	石牆複現3	丘陵端部	67m	35m	方	8	5c 後半~ 6c 前半	2	木蓋土坑	第2号主体部	A	不明鉄器1	馬頭1		
51 30	福山市駅家町	石牆複現4	丘頂	70m	35m	円	14×13.5	4c 来~5 c 後半	2	○ 鋼六式石室(櫛床)	第1号主体部	A	刀子1			
52 31	福山市駅家町	石牆複現5	丘頂	66m	30m	長方	8×3		2	土坑	第2号主体部	A				
53 32	福山市駅家町	長追2	丘頂	60m		長方	33×24	4c 後半	4	×	1号主体部		骨鏡2			
										土坑(木棺)	2号主体部	B	上附-1. 銀鏡(圓・直)・鉄劍2 上附-1. 銀鏡(圓・直)・鉄劍1			
										○ 鋼六式石室(木棺)	3号主体部		鏡1			
										×	4号主体部		刀劍1・鉄劍3			
										土坑	S.K.	A	刀子1			
										×	石蓋土坑	S.K.2				
										鑿穴式石室	中央石室	A	刀子1			
										鑿穴式石室	南側石室					
										土坑(削竹形木棺2)	北側木棺	A	刀子1			
										土坑(削竹形木棺)	南側木棺		鉄刀1			
56 35	福山市神辺町	道上2	丘陵端部	95m	80m	椭円	8×6.5	中期前半	2	鑿穴式石室(削竹形木棺)	第1号主体部	A	鉄2・刀子1・鉄劍14・斜紋 鉄2・刀子1・鉄劍2・刀子1	勾五5・鉄亞42・斜紋 二神二鐵劍1		
57 36	福山市加茂町	石越山1	丘陵端部	63m		円	19.4×19.2	4c 後半	2	鑿穴式石室(削竹形木棺)	第2号主体部	A	馬頭1・馬頭27・刀子1・鉄劍5・刀子1	馬頭1・馬頭5・刀子1		
58 37	福山市赤坂町	石越山2	丘頂	62m	30m	円	16	4c 来~5 c 後半	2	鑿穴式石室(削竹形木棺)	第3号主体部	A	馬頭1・馬頭27・刀子1・鉄劍1	馬頭1・刀子1	馬頭1・刀子1	
59 38	福山市赤坂町	赤坂8	丘頂	75m	50m	円	21×20	5c 前半	2	×	石蓋土坑	第4号主体部	C		勾五1・盾玉26	
60 39	安芸高八代田町	新宮2	丘頂	267m	40m	長方	15×8.5	4c 後半	2	石蓋土坑	第5号主体部	A	鐵鏡1・盾1	盾玉3		
61 40	安芸高八代田町	新宮1	丘頂	325m	30m	円	11×10	6c 初頭	2	石蓋土坑	第6号主体部	A				
62 41	安芸高八代田町	赤迫1	丘頂	298m	30m	円	12.5×11.5	5~6c	2	鑿穴式石室(削竹形木棺)	第1号主体部	A				
63 42	安芸太田町	中脇横路小善1	丘頂	323m	40m	円	19×18	5c 前半	3	鑿穴式石室(削竹形木棺)	第2号主体部	A	土師器(壺)・馬先1・刀子2・鉄劍1・盾玉1・石盾・年輪2	土師器(壺)・馬先1・刀子2・鉄劍1・盾玉1・石盾・年輪2		
64 42	安芸太田町	中脇横路小善2	丘頂	322m	40m	方	8	5c 前半	2	鑿穴式石室(削竹形木棺)	第3号主体部	A	土師器(壺)	盾玉2・ガラス小玉10		
65 43	広島市安佐南区	猿渡	丘頂	70m	30m			5c	2	土坑	第4号主体部	C	鐵刀1・鉄鏡20・盾2・鐵石1			
66 44	広島市安佐北区	大明地2	丘頂	46m	20m	円	8	5c 前半	2	土坑(木棺)	第1号主体部	A	刀子1・盾玉1・刀子1	盾石1		
67 45	広島市安佐北区	中山田9	丘陵端部	94m	40m	円	5	5c	4	箱式石室	1号主体部	A		盾玉・盾玉・ガラス製小玉1		
68 46	広島市安佐北区	紅山	丘頂	129m	70m	円	(造出)	全長24.6 中巣	2	×	箱式石室(削竹形木棺)	2号主体部	A	刀子1・盾1・刀子1	刀子1・盾1・刀子1・ガラス製小玉5	
69 47	広島市安佐北区	鹽本	丘頂	72m	25m	円	11	5c 中巣	2	土坑(木棺)	第3号主体部	A	土師器(壺)・盾1・刀子1	土師器(壺)・盾1・刀子1		
70 48	広島市安佐北区	大久保	丘頂	55m	20m	円	12×9	5c	2	鑿穴式石室	第4号主体部	A	刀子1・盾1・刀子1	盾石1・鉄劍4		
71 49	広島市安佐北区	立石	丘頂	44m		長方	17×10	6c 前半	3	鑿穴式石室	第5号主体部	A				
72 50	広島市安佐北区	河原寺山5	丘頂	95m		長円	12.5×10.5	5c 前半	2	○ 鋼六式石室(木棺)	第6号主体部	A		盾形鉄斧1		
73 51	広島市東区	須賀2	丘頂	86m	80m	不規則	14×10	5c 後半	2	土坑	第1号主体部	A	刀子1	盾玉1・ガラス小玉8		

No.	文獻 名	所 在 地	古 墓 名	立 地	標 高 (m)	北高	墳 形	墳丘標高 (直高, m)	時 期	墓 内 葬 墓		附 属 品	土 壤	地 級	考 古 学 の 類
										高 古 墓	内 墓				
74	52	広島市	佐伯区 月見城ST 2	丘陵斜面	72m	20m	方	6	5c 後半～ 6c 初頭	4	a 主体部 b 从主体部 c 从主体部 d 从主体部	A			内行花文鏡片1・勾玉1
75	52	広島市	佐伯区 月見城ST 3	丘陵斜面 突堤点	74m	20m			5c 後半～ 6c 初頭	3	a 主体部 b 从主体部 c 从主体部 d 从主体部	C			
76	52	広島市	佐伯区 月見城ST 5	丘陵斜面	62m	20m	円	3+	5c 後半～ 6c 初頭	2	a 主体部 b 从主体部 c 从主体部	A			铁劍1
77	52	広島市	佐伯区 月見城ST 6	丘陵斜面	58m	20m	方	7	5c 後半～ 6c 初頭	3	a 主体部 b 从主体部 c 从主体部	A			
78	52	広島市	佐伯区 月見城ST 7	丘陵斜面	56m	16m	方	9	5c 後半～ 6c 初頭	2	a 主体部 b 从主体部 c 从主体部	A			
79	53	広島市	佐伯区 城ノ下3	丘頂	79m	35m	円	14.5	5c 中葉	2	a 主体部 b 从主体部 c 从主体部	A			壓伏製品 鐵鏡
80	53	広島市	佐伯区 城ノ下6	丘頂	80m	35m	方	10	古墳時代初	2	a 主体部 b 从主体部	A			
81	54	海田町	東海田 上安井	丘頂	80m	50m	不整圓	15×13.5	4c 前半	2	O 鎏六衣石室(銀竹形木棺) 埋葬施設1	A	土師器(壺1・甕1) 铁刀1・盾1・铁鎧2・ 盾先1・盾鎧1・盾先1 刀子1	铁劍1・盾1・铁鎧2・ 盾先1・盾鎧1・盾先1 菅玉1・ガラス製小玉1	
82	55	呉市	鹿町町 峰	丘陵端部	44m	20m	円	8	5c 前半	3	X 鎏六衣石室 盾形木棺	C			
83	56～ 61	東広島市	西条町 三ツ城1	丘頂	237m	10m	前方後圓 全長91		5c 後半～ 6c 初	3	O 鎏六衣石室(銀竹形木棺) 盾形木棺 X 鎏六衣石室	B	盾刀2 盾刀1・刀子2 盾刀2・盾鎧2・盾先1 盾先1・秋穂3・盾鎧1 盾先1・秋穂1・刀子1	盾刀1・刀子1・刀子1 盾刀1・刀子2 盾刀2・盾鎧2・盾先1 盾先1・秋穂3・盾鎧1 盾先1・秋穂1・刀子1	
84	62	東広島市	西条町 大根3	丘陵端部	233m	18m	方		5c 前半	2	O 鎏式石棺(鐵石) X 鎏式石棺	C			
85	63	東広島市	西条町 八幡山大池	丘頂	254m	40m			5c 中葉～ 後半	3	第1号 鎏式石棺 新式石棺 新式石棺 新式石棺	B			不明銛器2
86	64	東広島市	高屋町 才が造1	丘頂	250m	25m	方	11.2×9.5	4c 初頭	2	鎔六衣石室(木棺) 鎔六衣石室(木棺) 鎔六衣石室(木棺) 鎔式石棺	A	铁劍1 鎔六衣石室(木棺) 鎔六衣石室(木棺) 鎔式石棺	铁劍1・盾2・菅玉1 鎔劍1・盾鎧1・盾先1 盾先1・盾鎧1・盾鎧1 盾先1・盾鎧1	
87	65	東広島市	高屋町 楓ヶ坪1	丘頂	247m	15m	長方	15×7	4c 後半	2	X 鎔式石棺 鎔式石棺	C			
88	66	東広島市	高屋町 楓ヶ坪3	丘頂	248m	15m	円	8	6c	3	鎔式石棺 鎔式石棺 鎔式石棺 鎔式石棺	B			
89	67	東広島市	高屋町 鏡向山1	丘頂	247m	20m	円	8	5c 後半～ 6c 前半	2	鎔式石棺 鎔式石棺 鎔式石棺 鎔式石棺	C			
90	68	東広島市	志和町 蛇追1	丘陵端部	260m	30m	円	10	4c 末	3	O 鎔式石棺(銀竹形木棺) 鎔式石棺 鎔式石棺 鎔式石棺	A	刀子1 刀子2 刀子3	ガラス製小玉1	
91	69	東広島市	志和町 蛇追3	丘頂	264m	30m	円	12	5c 前半	2	鎔式石棺 鎔式石棺 鎔式石棺 鎔式石棺	A			
92	70	東広島市	豊栄町 山王5	丘陵斜面 突堤点	435m	60m	円	6		2	土原 S K 1 鎔式石棺	A			鎔斧2
93	70	東広島市	豊栄町 山王6	丘頂	433m	60m	円	15		2	土原 S K 2 鎔式石棺	A			

* 空欄はいずれも以下の年度に(財)広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が中國機関自動車道尾道松江線建設事業に伴って発掘調査を実施した。

平成18年度=N5・9～11、平成19年度=N6.13～16・34・35、平成20年度=N30・39・40。

** 「從属」=○：優位性の高い中心的な埋葬施設、×：従属性の高い埋葬施設。無印：優位性・従属性を断定できない埋葬施設。

*** 「配列」=墳頂部における埋葬施設の並び方。A：並置と並列するもの、A'：ほぼ並列するものの、やや斜めに並ぶもの。B：中心的な埋葬施設は並列するが、従属性の一部の埋葬施設が並列しないもの、C：埋葬施設が並列しないもの。

第5表 広島県内の主な須恵器副葬・供獻古墳(横穴式石室古墳は除く)

地 名	文獻 *	所 在 地	古 墓 名	時 期	埋 葬 施 設	出 土 項 意 器 (一部、土師器を含む)		器 類 ・ 個 体 数	
						内 容	名 称		
1 本音	三次市	吉舎町	大番奥地2	6 c 前半	土坑(木棺)	SK2	C 棺外(側辺・小口上附)	杯蓋1・杯身3	
2 本音	三次市	吉舎町	大番奥地3		土坑(木棺)	SK1	B 棺蓋上(中央)	杯蓋1・杯身1	
3 1	三次市	吉舎町	船東	6 c 前半	土坑(木棺)	SK2	B 墓坑上面(北西小口) 離然	杯蓋1・杯身1	
94 71	三次市	吉舎町	寺津1		土坑(木棺)	C 棺外(北小口底面) B 墓坑上面(南者西側辺) E a 墳頂部 E b	杯蓋2・杯身2 杯蓋1・杯身1 杯蓋1・杯身1・増1 大甕1		
95 71	三次市	吉舎町	寺津2	6 c 前半	土坑(木棺)	C E a E b	棺外(南側辺底面・横立て) 棺外(西小口中附・底面) 墳頂部	杯蓋2・杯身2・高杯蓋1 高杯1・有蓋高杯1・甕1 杯蓋1・杯身4・高杯1・高杯蓋1・短頭蓋4・蓋蓋4ほか 大甕1	
96 72	三次市	向江田町	野福南10		小型竖穴式石室	E a E a	墳頂 墳丘掘	增1 杯蓋1・杯身1・甕1	
12 5	三次市	向江田町	野福南11	6 c 前半	土坑2基	E a E a	墳頂 墳丘掘	增1 杯蓋2・杯身2・增蓋1・増1・甕1・ほかに杯蓋1	
18 7	三次市	南畠町	縦岩	6 c 前半	堅穴式石室2基・土坑1基	F a F b 主	周溝内(85×80cmの浅い坑内) 周溝内全体	土器群D=杯蓋12・杯身12のセット 杯蓋13・杯身16・高杯2~3・甕1・有蓋短頭蓋4・甕2他	
21 10	三次市	西酒屋町	大坂6	6 c 中葉	土坑(木棺)	第2主体部	C E a	棺外小口底面 墳頂部	杯蓋7・杯身7・増蓋1・増1・錐瓶1 杯身1
97 73	三次市	西酒屋町	天狗附6	6 c 中葉	不明		F a	周溝内	杯身2
98 74	三次市	四拾貯町	西拾貯小屋4	5 c 前半	不明	F a	周溝内	杯蓋3・杯身1・甕1・甕1	
99 75	三次市	四拾貯町	西拾貯小屋17	5 c 末	不明	E a	墳丘上	杯蓋1・杯身2	
100 11	三次市	四拾貯町	上四拾貯5	5 c 後半	不明	E a	墳丘上	杯蓋1・杯身2	
28 16	三次市	三良坂町	袖松1	6 c 前半	土坑	B主体	C A?	杯底西小口 棺内? (坑底上10cm前後)	杯蓋1・杯身1・甕1 杯蓋1・杯身1
101 76	庄原市	市町	一の谷6	6 c 中葉	土坑(木棺)		F	周溝内	杯蓋1・杯身1
35	庄原市	口和町	櫻子塚4	6 c 前半	七坑3基	F	周溝内	杯蓋・杯身・甕	
102 77	庄原市	東城町	大塚3	6 c 中葉	石蓋土坑	B	蓋石下(上段墓坑内)	杯蓋1・杯身1	
103 78	庄原市	東城町	大塚4	6 c 中葉	土坑	C	境内底面(開闢面中央)	杯蓋1・杯身1	
104 79	庄原市	東城町	川東大仙山11	6 c 前半	土坑	B	土坑被覆粘土上	杯蓋1・杯身1	
105 80	福山市	加茂町	吹越2	6 c 前半	土坑(木棺)	F a	棺外(南北口上面)	杯蓋4・杯身3・高杯1	
106 81	安芸高田市	美土里町	向井	6 c 前半	堅穴式石室(箱式石棺状)	Bか	石室埋土面上か	杯蓋3・杯身2	
107 82	安芸高田市	美土里町	宮谷	6 c 中葉	堅穴式石室(箱式石棺状)	B	石室南北口東側壁上面(蓋石横)	杯身2・機1	
108 89	安芸高田市	八千代町	新宮7	5 c 末~6 c 初	不明	E a F a	墳丘 周溝内	杯蓋2 杯蓋1・甕1	
109 83	北広島町	千代田	吉保剣44	6 c 初頭	堅穴式石室(箱式石棺状)	B	石室外・西小口壁上(離然)	杯蓋9・杯身9・高杯1・増蓋1・増1・甕1	
110 84	広島市	安佐南区	寺山5	6 c 前葉	土坑(木棺)	F b	周溝内(2m程以上)	17個体以上(杯蓋5・杯身4・甕1・錐瓶1・大甕1など)	
111 85	広島市	安佐南区	池の内3	4 c 末~5 c 初	堅穴式石室(削竹形木棺)	A主体	B	主体部上面(現存深10cm) 把手付短頭蓋(加那系陶質土器)1	
69 47	広島市	安佐北区	鶴木	5 c 中葉	土坑(木部・磯床・木棺)	第1主体部	B	掘方上面(木部蓋上か)	甕1
112 86	広島市	安佐北区	弘住4	6 c 前半	箱式石棺		B	南側右中央上面(蓋石との間)	杯蓋1

No.	文獻*	所 在 地	古 墳 名	時 期	埋 葬 施 設		出土 順 序 (一部、土筒器を含む)	器 種 ・ 個 体 数
					内 容	名 称	類型**	
71	49	広島市 安佐北区	立石	6 c 前半	箱式石棺 3基		G 囲溝外側の肩	杯蓋 2
113	52	広島市 佐伯区	月見城 S T 8	5 c 後半	土坑		F a 囲溝内の小土坑から一括	杯蓋3・杯身1・直口盃1
81	54	南田町 東海田	上安井	6 c 前半	土坑 (木棺)	埋葬施設3	B 棚外 (棺上・西小口)	杯蓋2 (赤色顔料塗布1)・杯身1
114	66	東広島市 高屋町	棚ヶ原4	6 c 後半	小型堅穴式石室		F a 囲溝内 (浮く)	杯身1・鏡2
115	66	東広島市 高屋町	棚ヶ原6	6 c 前半	土坑 (木棺)		F a 囲溝内 (底面)	杯蓋1・杯身1・甕1
116	87	東広島市 高屋町	棚ヶ原山2	6 c 前半	箱式石棺		E b 墳丘側に故意に破壊状態	杯蓋1・杯身2・甕1
117	88	東広島市 高屋町	金口1	6 c 初～半ば	箱式石棺		F a 囲溝内	杯蓋1・杯身2
118	89	東広島市 高屋町	金口2		石蓋土坑		F a 囲溝内	杯身1
119	90	東広島市 高屋町	金口3		箱式石棺		F a 囲溝内	杯蓋1・杯身1
120	91	東広島市 高屋町	金口4		箱式石棺		F a 囲溝内	杯蓋1ほか
121	92	東広島市 高屋町	金口7		箱式石棺		F b か 囲溝内	杯蓋1ほか

* 空欄はいずれも以下の年度に(財)広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室が中國横断自動車道尾道松江線建設事業に伴って発掘調査を実施した。

平成18年度=No 9～11、平成19年度=No 5・13～16・34～35、平成20年度=No 30・39・40。

** 「類型」: 棚内A、棚外 (棺上面) B、棺外 (側辺～小口裏込め部分、墓坑内) C、埋葬施設周辺 (主に墓坑周辺) D、墳丘上部E、周溝内F、その他G。

(なお、E・Fにおいて、a = 完形、ほぼ完形状態で出土。b = 破碎状態で出土。)

A = 1、B = 14、C = 6、D = 0、E a = 9、E b = 3、F a = 11、F b = 3、F = 1、G = 1。

分析対象古墳計39基 (計49事例、なお類型A～Dの事例の埋葬施設数は計20施設)。

第6表 広島県内の主な主な鉄鎌副葬古墳（横穴式石室古墳及び埋葬施設以外からの出土は除く）

No.	文獻	所 在 地	古墳名	時 期	埋 葬 施 設			出 土 鉄 鑑***				重****	
					内 容**	名 称	類型	出土位置・状況	形 式・個体数	頭位	朝 先	軸	數
1	木暮	三次市 吉舎町	大畠奥邊2	6 c 前半	土坑(木棺)	SK 1	C 桜外(北側邊上層)	鰐抉三角形2、三角形(頭正角形)1	東 ○ 縦				
2	木暮	三次市 吉舎町	大畠奥邊3	6 c 前半	土坑	SK 4	G 坑内底面(北側)	長頸・鰐抉三角形2、長頸・三角形2	(東) 橫				
122	木暮	三次市 吉舎町	大畠奥邊7	6 c 前半	土坑	SK 1	G 坑内底面(中央)	長頸・鰐抉三角形2、頭部片5					
13	*	三次市 向江田町	置の本21	5 c	箱式石棺(櫛床)	SK 1	B 桜外(蓋石東小口北側)	圭頭・斧面1	東				
123	93	三次市 大田余町	上定25	5 c 末~6 c 初	横穴式石室		C 石室内(底面・東小口寄り)	長頸・片刃1、圓・長三角形1、圭頭片1	東 ○ 縦				
124	94	三次市 岩戻町	太郎丸		横穴式石室(櫛床)		C 石室内(東小口)	柳葉形38					
20	9	三次市 西酒屋町	源羅高塚	5 c 後半	横穴式石室	第1号主体	G 石室内(浮遊遺物)	短掌・三角形(重抜)2、長頸・片爪片(銅鏡1、圭頭片1)					
23	12	三次市 四拾貫町	西酒屋小原1	5 c 前半	船土櫛(割竹形木棺)	C主体	B 桜外(棺上・北西小口寄り)	短掌・長・三角形(解縫状・重抜)1 尾頭・長・三角形23	(北西) 縦 2 10				
125	13	三次市 四拾貫町	上田拾拾6	5 c 後半	土坑(木棺)	A 桜内(西小口底面)	短掌・長・三角形2、長・三角形(頭蓋片20	東 △ 縦・横					
24	13	三次市 四拾貫町	上田拾拾10	6 c 前半	船式石棺	B主体	C 桜外(北側邊・側面上)	鰐抉三角形1、尾頭・長・三角形(重抜・有孔)1	東 △ 縦・横				
126	95	三次市 三良坂町	寺山1	6 c 前半~中項	土坑(木棺か)	G 東小口近く底面		長頸・片刃5、圭頭片3					
127	96	庄原市 板崎町	大風呂	5 c 末~6 c 初	土坑(木棺)	C 桜外(底面・東側壁寄り中央)	柳葉形2、片刃1、頭蓋片3						
101	76	庄原市 市町	一の谷6	6 c 中葉	土坑(木棺か)	C 桜外(南側壁際中央ほど底面)	長頸・柳葉形1、長・三角形1、圭頭片6	(東) 縦・横					
128	97	庄原市 東城町	大迫山1	4 c 中葉	横穴式石室(粘土床・木棺)	C 桜外(粘土床北側辺縫)	圭頭(頭蓋側・定角式)28(矢箇2)	北西 ○ 縦					
129	98	庄原市 東城町	大坂2	5 c 末~6 c 初	土坑(木棺)	A 桜内(底面中央)切先東小口	鰐抉三角形2、三角形(斜行頸)1	(東) 縦					
130	99	府中市 梨栄町	寺山1	5 c	船式石棺*女・成年	A 桜内(東小口近く南側壁際・床面)	長頸・三角形2	西 △ 縦					
43	24	府中市 元町	山の神4	4 c 後半	船式石棺*女・壯年	第1号主体	A 桜内(左上輪廊付・床面)	柳葉形1	東 ○ 縦				
131	100	福山市 新町市	城山2	古墳時代初期	土坑*男・人骨	G 周内(前小口10cm浮く)	短掌・鰐抉長三角形2						
45	25	福山市 新町市	城山4	古墳時代初期	土坑(木棺)*男・熟年	第1号主体	A 桜内(北小口=頭蓋底)	三角形か1	北			横か	
50	29	福山市 駅家町	石越櫻根3	5 c 後半~6 c 年半	土坑(木棺)	第2号主体	B 桜外(棺蓋上)	圭頭片1					
135	105	福山市 駅家町	石越櫻根5	5 c 前半	船式石棺(木棺)		A 桜内(床面2か所)-6点						
53	33	福山市 駅家町	長道2	4 c 後半	土坑(木棺)	1号主体部	C 桜外(底面)	柳葉形(斜行頸)6、方頸・盤頸1	北				
54	33	福山市 駅家町	法成寺本谷4	4 c	土坑(木棺)	SK 1	C 桜外(底面・北東小口寄り中央)	鰐抉三角形3	東北				
57	36	福山市 加茂町	石越山1	4 c 後半	横穴式石室(割竹形木棺)	第1号主体部	D 埋坑外北50cm	圭頭(頭蓋側・定角式)14	東北 O3・△1・東10				
105	80	福山市 加茂町	吹越2	6 c 前半	土坑(木棺)		B 桜外(棺上・東小口寄り/西小口外)	長頸・片刃(頭蓋・五小爪馬蹄式)13 鰐抉長三角形1、長・三角形(斜行頸)1	西 △ 縦				
132	101	福山市 加茂町	吹越5	5 c 前葉	土坑(木棺)	Cか 桜外か(底面・南小口西側切跡)	柳葉形5		(南) 縦				
133	102	福山市 神辺町	道上3	古墳時代初期	土坑*骨2分	G 埋坑・東側辺中央	短掌・鰐抉三角形1、無茎・三角形(有孔)1	北か ○か 縦					
134	103	福山市 神辺町	亀山1	5 c 前半	船土櫛(割竹形木棺)	A 桜内(西小口側・床面)	150cm埋度(鰐抉柳葉形・片刃・無茎 鰐抉五角形・柳葉形など)	東 △(O1) 縦 1 150					
106	81	安芸高田市 美土里町	向井	6 c 前半	小型横穴式石室(蓋石)	C 石室内棺内(底面・西側壁際中央)	鰐抉三角形2、長頸・長・三角形3	北					
137	107	北広島町 千代田	金子2	5 ~ 6 c	小型横穴式石室(蓋石)	C 石室内棺外(底面・北側壁際中央)	鰐抉三角形1、長頸・片刃为主に13 頭蓋部片4+						
138	108	北広島町 千代田	中出野舟1	5 ~ 6 c	横穴式石室(蓋石)*人骨2(男・年少、?・廿世)	C 石室内底面(西小口寄り南側壁際)	鰐抉頭蓋3、鰐抉三角形1、頭蓋片1	西					
139	108	北広島町 千代田	中出野舟8	4 c	土坑(木棺)	SK 8 - 1 A	棺内床面(南側辺縫中央)	圭頭(頭蓋側・定角式)6、柳葉形 5、圭頭片1	北か ○か 縦・横				
140	109	広島市 東区	御昌寺西	5 c 前半	船式石棺	A主体	B 桜外(棺上・北小口側上)	無茎・三角形(頭蓋側)1	北 (西) 橫				
				5 c 後半	土坑(木棺)	C主体	C 桜外(底面・東側辺縫中央)	長頸・三角形6、鰐抉三角形(頭蓋側)1、同 五角形3、同・片刃1、頭蓋部片2	北				

編 號	文獻	所 在 地	古墳名	時 期	埋 蔵 施 設			出 土 器 物***					重****	
					内 容**		名 称	類 型	出 土 位 置 ・ 状 況	形 式 ・ 個 体 數	頭 位	切 先	輪 軸	重 量 本 数
65	43	広島市 安佐南区	楊地	5C	箱式石棺	B主体	B	棺外(西小口蓋石構3か所)	長頸・片刃11、同・柳葉形7、黒茎・ 輪抜三角形2	東△	鋤	2	9~11	
141	84	広島市 安佐南区	寺山3	5c後半	堅穴式石室(敷石)	B	棺外部内(棺上・西小口付近)	長頸・片刃11、頭蓋部片11+	東		鋤・楕			
142	85	広島市 安佐南区	池の内5	5c末~6c初	不明(敷石)	G	不明	長頸・片刃5、頭蓋部片3			○?			
66	44	広島市 安佐北区	大明地2	5c前半	土坑(木棺)	1号主体部	B	棺外(棺上・東小口寄り南側邊際)	長頸・柳葉形1、長頸・輪抜三角形/片刃12	東か	○	鋤	1	20
68	46	広島市 安佐北区	紅山	5c前半~中葉	土坑(割竹形木棺)	1号主体	A	棺外(床面・南小口寄り中央)	柳葉形1、長頸・斧削1、長頸・三 角形1、頭蓋部片5	北西△	鋤			
70	48	広島市 安佐北区	大久保	5c後半	土坑(割竹形木棺・鍵床)	2号主体部	A	棺外(寝床上・東小口側)	柳葉形2、頭蓋部片2		鋤			
143	110	広島市 安佐北区	地蔵山堂1	5c中葉~後半	土坑(木棺)	B	棺外(棺上・北側邊際部分)	頭蓋・輪抜三角形(直抜)1		(北)	斜め			
144	110	広島市 安佐北区	地蔵山堂2	5c中葉	堅穴式石室(割竹形木棺か)	C	石室内棺外(西小口寄り北側邊際)	頭蓋・片刃3、長頸・片刃1、頭蓋部片3						
145	111	広島市 安佐北区	手山1	5c	土坑(鍵床・木棺)	C	棺外(北側邊際中央)	頭取1						
146	111	広島市 安佐北区	手山3	古墳時代中期	土坑(木棺か)	B	棺外(中側・東側邊際中央)	頭取2		南	○	鋤		
147	112	広島市 安佐北区	弘住3	5c後葉~6c前期	堅穴式石室(鍵床・木棺)	A	棺内(底面・南側壁寄り中央ほか)	頭蓋・五角形(大型・透か・直抜)1、 柳葉形4、輪抜柳葉形(透鋼錫)26	東	○△ほか	鋤・楕	○	H?×2	
148	113	広島市 安佐北区	中小田2	5c後半	堅穴式石室(鍵床・木棺)	C	石室内棺外(1.北側縁、2.北西 縁、3.南北縁・南西側のやや北寄 りの兩側壁路)	頭蓋・長頸・三長形43、3=頭 蓋・輪抜長・三長形43	北	○①② △3	鋤	○		
149	53	広島市 佐伯区	城ノ下1	5c中葉	土坑(割竹形木棺)	B	棺外(東小口寄り南側邊際)	長頸・片刃逆列1、長頸・片刃1+ 頭蓋・三角形1、長頸・片刃2+ 頭蓋・三角形1	東△	鋤	3	23~30		
79	53	広島市 佐伯区	城ノ下3	5c中葉	土坑(木棺)	B	棺外(棺上・東小口寄り)	柳葉形1		斜め				
150	114	広島市 安佐区	成岡3	古墳時代初期	土坑(木棺・割竹形木棺か)	B主体部	C	棺外部内(北側邊際中央)	頭蓋・斧削1、柳葉形1				2	19
81	54	海田町 東浦田	上安井	4c前半	堅穴式石室(割竹形木棺)	B	棺外(棺上・南西小口寄り南側邊 際)	頭蓋形(細身・骨頭形)・平島由来19						
151	115	東広島市 西条町	豊が城	6c後半	堅穴式石室	A	棺内(床面中央)	柳葉形2	北○	鋤				
152	116	東広島市 西条町	古市	6c後半	堅穴式石室	C	棺外石室内(北西隅・床面)	三角形1、頭蓋1、方頭1、輪抜二 角形1、長頸・長・三長形3、同・柳 葉形4、某部片1			鋤			
83	56~ 61	東広島市 西条町	三ツ城1	5c後葉~6c初	箱式石棺(敷石)	3号棺	A	棺内(南西半・敷石上)	頭蓋・三角形(直抜)1	西か	○	鋤		
84	62	東広島市 西条町	大槻3	5c前半	箱式石棺(敷石)	1号石棺	A	棺内(床面・東小口寄り)	三角形1、三角形(斜行窓)2、輪抜 三長形2、頭蓋・斧削1、頭蓋片1	○(北西)				
85	63	東広島市 西条町	八幡山大池	5c中葉~後半	箱式石棺	第1号石棺	B	棺外(北側上・東小口蓋石下)	頭蓋・三角形(直抜)9、短茎・五 角形1、長頸・柳葉形69	南西△(南東)	鋤	4	15~20	
153	117	東広島市 高原町	豊ヶ崎	6c前半~中葉	堅穴式石室(箱式石棺状)	B	棺外(椁板上面・天井石下面)	三角形2		南西	鋤			
154	118	東広島市 高原町	森庭10	6c初~前半	堅穴式石室(箱式石棺状)	C	棺外石室内(北側壁中央・床面)	長頸・長・三長形1、同・輪抜三角形1	東○	鋤				

* 平成19年度に(財)広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査班が中國横断自動車道沿道松江線建設事業に伴って発掘調査を実施した。

** 1. 埋葬施設・内容の以下は出土人骨の性別・推定年齢を示す。

出土人骨の年齢=小兒：6~15才、成年：16~20才、壯年：20~39才、熟年：40~59才

(谷畠美帆、鶴木隆雄「考古学のための古人骨調査マニュアル」学生社 2004年。による。)

*** 1. 「類型」=棺内A、棺外(棺上面)B、棺外(側面~小口裏込め部分、墓坑内)C、埋葬施設説明(主に墓坑周辺)D、その他・不明G。

・「形式」=鍵孔の分類・形式等については主に次の論文を参考にした。なお、無茎・短茎・頭蓋・長頸・圭頭族群は形式と鎌身體を併記し、そのほかの一般的な有茎族群に含まれる数据については、原則として鎌身體のみを記した。(数値は出土点数)。

(杉山秀彦「古墳時代の鐵について」『原研考古學研究所論集』第八 吉川弘文館 1988年)

・「頭位」=埋葬施設の頭位。

・「切先」=出土鐵軸の切先の指す方向。○：頭位△：足位。

・「輪」=鐵軸軸輪が埋葬施設長軸に沿うもの=輥、直交するもの=轔。

**** *・「東」=東状態で出土した鐵軸の東の数及び1東あたりの鐵軸の本数。○は本数が不明のもの。

文献

- 1 吉舎町教育委員会「燎東古墳」 1995年
- 2 財団法人広島県教育事業団「権現第2号古墳」「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(10) 2010年
- 3 財団法人広島県教育事業団「権現第3号古墳」「中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(10) 2010年
- 4 三次市教育委員会「下山手第4号古墳」「下山手第4・5号古墳」 1994年
- 5 三次市教育委員会「第11号古墳」「野稻南第8~11号古墳」 2004年
- 6 花園古墳群発掘調査団「花園古墳群」 1976年
- 7 広島県教育委員会「綠岩古墳」「綠岩古墳」 1983年
- 8 三次市教育委員会「掛原下第7号古墳」 2002年
- 9 広島県教育委員会「酒屋高塚古墳」 1983年
- 10 大坂跡発掘調査団「大坂跡跡」 1985年
- 11 三次市「寄貞古墳群」「三次市史」II 2004年
- 12 四拾貢小原発掘調査団「四拾貢古墳」「四拾貢小原」 1969年
- 13 広島県教育委員会「上四拾貢古墳群」「中國継貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- 14 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「五反田第1・2号古墳発掘調査報告書」 1985年
- 15 広島県教育委員会「鞍ヶ谷北古墳群」「中國継貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(2) 1979年
- 16 河瀬正利・向田裕始「双三郡三良坂町植松第1号古墳発掘調査報告」「芸備」第3集 芸備友の会 1975年
- 17 三良坂町教育委員会「杉谷第9号古墳」 1999年
- 18 広島県教育委員会「財」広島県埋蔵文化財調査センター「西ヶ迫第11号古墳」「西ヶ迫古墳群」 1983年
- 19 広島県教育委員会「月貞寺古墳群」「中国継貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
- 20 広島大学文学部考古学研究室「中央山第1号古墳」「中央山古墳群の発掘調査」 1978年
- 21 広島大学文学部考古学研究室「中央山第2号古墳」「中央山古墳群の発掘調査」 1978年
- 22 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「川東大仙山第10号古墳」「川東大仙山第10~11号古墳」 1994年
- 23 府中市教育委員会「山ノ神1号古墳発掘調査報告」 1983年
- 24 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「山の神遺跡群」「山の神遺跡群・池ノ迫遺跡群」 1998年
- 25 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「城山B遺跡」「城山」 1996年
- 26 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「城山A遺跡」「城山」 1996年
- 27 広島県教育委員会「才谷道跡群」「呂宮駅家住宅宅地造成地内埋蔵文化財発掘調査報告」 1976年
- 28 広島県立埋蔵文化財センター「石鎚権現第2号古墳発掘調査報告」 1984年
- 29 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚権現第3号古墳」「石鎚権現遺跡群・茜ヶヶ跡遺跡発掘調査報告」 1985年
- 30 広島県教育委員会「石鎚権現古墳群発掘調査報告第6・7・8号古墳」 1981年
- 31 広島県教育委員会「石鎚権現古墳群発掘調査報告(第9~10号古墳)」 1982年
- 32 広島県教育委員会「財」広島県埋蔵文化財調査センター「長迫遺跡発掘調査報告」 1982年
- 33 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「法成寺本谷古墳」「法成寺本谷古墳 法成寺本谷古墳」 1998年
- 34 掛追古墳調査団「傍後掛追古墳」「芸備文化」第5、6合併号 1956年
- 35 財団法人広島県教育事業団「道上第2号古墳」「道上第2・3・5号古墳 門前2号遺跡」 2004年
- 36 広島県教育委員会「財」広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚山1号古墳」「石鎚山古墳群」 1981年
- 37 広島県教育委員会「財」広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚山2号古墳」「石鎚山古墳群」 1981年
- 38 広島県教育委員会「財」広島県埋蔵文化財調査センター「吹越第8号古墳」「石鎚山古墳群」 1981年
- 39 八千代町教育委員会「新宮遺跡群発掘調査報告書」 2000年
- 40 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「宮城古墳群」「中國横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(II) 1993年
- 41 広島県教育委員会「塚迫遺跡群」「中國継貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(3) 1982年
- 42 広島県教育委員会「横路小谷古墳群」「中國継貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(3) 1982年
- 43 広島市教育委員会「權地遺跡」「九郎丸遺跡 権地遺跡発掘調査報告」 1984年
- 44 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大明地遺跡」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(IV) 1987年
- 45 広島市教育委員会「廣島大学考古学研究室「小田第9号古墳」「中小田古墳群」 1980年
- 46 虹山古墳発掘調査団「虹山古墳発掘調査報告」 1989年
- 47 広島県教育委員会「諸木古墳」「高陽新住宅街市街地開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」 1977年
- 48 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大久保古墳」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(IV) 1987年
- 49 立石古墳発掘調査団「立石古墳発掘調査報告」 1978年
- 50 広島県教育委員会 株式会社アコード「可部寺山第5号古墳」「可部寺山第2号遺跡発掘調査報告書」 2004年
- 51 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「須賀谷古墳群」「須賀谷古墳群・豊谷東遺跡発掘調査報告書」 1985年
- 52 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「月見城遺跡」「月見城遺跡」 1987年
- 53 財団法人広島市歴史科学教育事業団「城下古墳群」「城下A地点遺跡発掘調査報告」 1991年
- 54 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「上安井古墳発掘調査報告書」 2001年
- 55 峠古墳発掘調査団「峠古墳発掘調査報告書」 1979年
- 56 広島県教育委員会「三ツ城古墳」 1954年
- 57 東広島市教育委員会「史跡三ツ城古墳-保存整備事業第1次発掘調査概報-」 1990年
- 58 東広島市教育委員会「史跡三ツ城古墳-保存整備事業第2次発掘調査概報-」 1989年
- 59 東広島市教育委員会「史跡三ツ城古墳-保存整備事業第3次発掘調査概報-」 1990年
- 60 東広島市教育委員会「史跡三ツ城古墳-保存整備事業第4次発掘調査概報-」 1991年
- 61 東広島市教育委員会「史跡三ツ城古墳-保存整備事業第5次発掘調査概報-」 1991年
- 62 建設省中国地方建設局広島国道工事事務所 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「大槻第3号古墳」「大

- 遺跡群」 1985年
 63 広島県教育委員会 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「八幡山大池古墳」「道照遺跡」 1982年
 64 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「才が迫古墳群」「山陽自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(IX) 1993年
 65 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「植ヶ坪3号古墳(B地区)」 1988年
 66 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「植ヶ坪3号古墳(A地区)」「東広島ニュータウン遺跡群」(1) 1990年
 67 広島県教育委員会「鏡向山第1号古墳」「賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告」 1975年
 68 財団法人東広島市教育文化振興事業団「蛇迫第1号古墳」「蛇迫第1~4号古墳・蛇迫遺跡発掘調査報告書」 2005年
 69 財団法人東広島市教育文化振興事業団「蛇迫第3号古墳」「蛇迫第1~4号古墳・蛇迫遺跡発掘調査報告書」 2005年
 70 豊栄町教育委員会「山王4・5・6号古墳」 1994年
 71 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺津古墳群」「灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(1) 1994年
 72 三次市教育委員会「第10号古墳」「野稻南第8~11号古墳」 2004年
 73 広島県教育委員会「天狗松南第6号古墳」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1978年
 74 四拾貢小原発掘調査団「第4号古墳」「四拾貢小原」 1969年
 75 広島県教育委員会(財)広島県埋蔵文化財調査センター「四拾貢小原第17号古墳」「下山遺跡群発掘調査報告」 1980年
 76 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「第6号古墳」「一の谷第6・7号古墳」 1998年
 77 大塚古墳群発掘調査団「大塚第3号古墳」「大塚古墳群発掘調査報告書」 1980年
 78 大塚古墳群発掘調査団「大塚第4号古墳」「大塚古墳群発掘調査報告書」 1980年
 79 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「川東大仙山第11号古墳」「川東大仙山第10・11号古墳」 1994年
 80 広島県教育委員会(財)広島県埋蔵文化財調査センター「吹越第2号古墳」「石鎚山古墳群」 1981年
 81 広島県教育委員会「向井古墳」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(3) 1982年
 82 広島県教育委員会「宮谷古墳」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(3) 1982年
 83 龍岩・吉保利埋蔵文化財発掘調査団「吉保利第44号古墳」「龍岩・吉保利、上春木埋蔵文化財発掘調査報告書」 1976年
 84 財団法人広島市歴史科学教育事業団「寺山遺跡発掘調査報告」 1997年
 85 広島市教育委員会「池の内遺跡発掘調査報告」 1985年
 86 広島市教育委員会「第4号古墳」「弘佐遺跡発掘調査報告」 1983年
 87 広島県教育委員会「鏡向山第2号古墳」「賀茂カントリークラブゴルフ場内遺跡群発掘調査報告」 1975年
 88 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口第1号古墳」「金口古墳群」 1997年
 89 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口第2号古墳」「金口古墳群」 1997年
 90 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口第3号古墳」「金口古墳群」 1997年
 91 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口第4号古墳」「金口古墳群」 1997年
 92 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「金口第7号古墳」「金口古墳群」 1997年
 93 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「上定古墳群の調査」「大判・上定・殿山」 1987年
 94 本村豪章「備後三次市太郎丸古墳調査報告」「古代吉備」第4集 1961年
 95 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「寺山第1~4号古墳」「灰塚ダム建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」(V) 2003年
 96 広島県教育委員会「大風呂古墳発掘調査概報」 1976年
 97 広島県東城町教育委員会 広島大学文学部考古学研究室「広島県比婆郡東城町 大迫山第1号古墳発掘調査概報」 1989年
 98 大塚古墳群発掘調査団「大塚第2号古墳」「大塚古墳群発掘調査報告書」 1980年
 99 寺山遺跡発掘調査団「寺山1号古墳」「寺山遺跡発掘調査報告」 1979年
 100 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「城山B遺跡」「城山」 1996年
 101 広島県教育委員会(財)広島県埋蔵文化財調査センター「吹越第5号古墳」「石鎚山古墳群」 1981年
 102 財団法人広島県教育事業団「道上第3号古墳」「道上第2・3・5号古墳、門前2号遺跡」 2004年
 103 広島県教育委員会「龜山遺跡第1次発掘調査概報」 1982年
 104 広島県教育委員会「龜山遺跡第2次発掘調査概報」 1982年
 105 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「石鎚現第5号古墳の調査」「石鎚現遺跡群発掘調査報告」 1981年
 106 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「みたち第2号古墳」「みたち第2・3号古墳」 2004年
 107 広島県教育委員会「金子古墳群」「中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(3) 1982年
 108 財団法人広島県埋蔵文化財調査センター「中出勝負岡墳墓群」「歳・神遺跡群 中出勝負岡墳墓群」 1986年
 109 神昌寺西遺跡発掘調査団「神昌寺西遺跡発掘調査報告」 1980年
 110 広島県教育委員会「地蔵堂山古墳群」「高陽新住宅街開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」 1977年
 111 広島県教育委員会「山手遺跡群」「高陽新住宅街開発事業地内埋蔵文化財発掘調査報告」 1977年
 112 広島市教育委員会「第3号古墳」「弘佐遺跡発掘調査報告」 1983年
 113 広島市教育委員会 広島大学文学部考古学研究室「中小田第2号古墳」「中小田古墳群」 1980年
 114 財団法人広島市文化財団「成岡A地点遺跡」 2001年
 115 広島市教育委員会「狐が城古墳」「岡谷遺跡 狐が城古墳発掘調査報告」 1985年
 116 広島県教育委員会(財)広島県埋蔵文化財調査センター「古市古墳」「西条第一土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告」(1) 1983年
 117 広島県教育委員会 広島県開発局「豈ヶ崎古墳」「賀茂工業団地内遺跡発掘調査概報」 1972年
 118 東広島市教育委員会「森信第10号古墳発掘調査報告書」 1990年

V まとめ

大畠奥池古墳群は、三次市東部、吉舎町敷地の江の川支流馬洗川南岸の丘陵上に立地する古墳時代後期の古墳群である。南北に延びる主尾根から北西に延びる小尾根に7基の円墳が築かれているが、今回はその南西側の4基の調査を行った。第1～3号古墳の3基はほぼ4mの間隔で並び、北東側に位置する第3号古墳に接するように第7号古墳が築かれている。第1～3号古墳は径7～11m、高さ1～2mの墳丘の裾に幅1～2m、深さ0.2～0.7m程度のごく浅い周溝が廻る。第7号古墳は径3～5m、高さ0.8mの不整橈円形の古墳で、周溝は存在しない。埋葬施設は、第1号古墳については不明で、第2号古墳は南北に並列する木棺墓2基、第3号古墳は3基の木棺墓と土坑墓1基がやや雑然と築かれている。第7号古墳の埋葬施設は土坑墓1基である。

ここでは、内容が比較的明確な第2号古墳と第3号古墳を中心に副葬遺物（須恵器・鉄鎌）と埋葬施設の構造及び配列について検討を加え、本古墳群の性格や年代について明らかにしたい。

(1) 副葬品について

A. 副葬状況 第2号古墳と第3号古墳の埋葬施設から出土した遺物については、

①大半の遺物が棺外から出土しており、棺内に副葬されたと考えられる遺物は第2号古墳SK1の刀子だけである。棺外出土の副葬品は、棺上に置かれたものと木棺と墓坑の間に入れ込まれたものがある。前者としては第2号古墳SK2の須恵器（杯身）と鉄鎌、第3号古墳SK1・2の須恵器（杯蓋・杯身）、同SK3の刀子、後者としては第2号古墳SK1の鉄器（鉄鎌・鉄鎌）、同SK2の須恵器（杯蓋・杯身）がある。

ところで、古墳時代前～後期（6世紀前半頃まで）の県内例によれば、鉄鎌は棺内出土例18点／32点（56.3%）、棺外出土例14点／32点（43.8%）とやや棺内出土例が多い。刀子は棺内出土例87点／106点（82.1%）、棺外出土例19点／106点（17.9%）と棺内出土例が8割強と多数を占める。これらに対して、鉄鎌は棺内出土例308点／841点（36.6%）、棺外出土例452点／841点（53.7%）と棺外出土例が半数を超える、棺内出土例は3割強である。県内例をみる限りでは、鉄鎌・刀子は棺内出土例が多いが、鉄鎌は棺外出土例が優勢である。

②須恵器を主体的に副葬する埋葬施設と鉄器を主体的に副葬する埋葬施設に明確に分かれる。第2号古墳SK2では両者が出土しているが、鉄器は鉄鎌1点で須恵器（杯蓋1点・杯身3点）が主体的である。このほかは鉄器のみの埋葬施設（第2号古墳SK1、第3号古墳SK3・4）と須恵器（杯蓋・杯身）のみを副葬する埋葬施設（第3号古墳SK1・2）である。副葬鉄器の組成は、第2号古墳SK1が鉄鎌・鉄鎌・刀子、第3号古墳SK3は刀子のみ、そして第3号古墳SK4は鉄刀・鉄鎌である。第3号古墳SK4の鉄刀を除けば、小型武器の鉄鎌を主体に農具の鉄鎌と工具の刀子である。

B. 須恵器の検討 大番奥池第1号古墳からは杯蓋（1）・杯身（2）各1点、第2号古墳SK2から杯蓋（14）1点、杯身（15～17）3点、第3号古墳SK1から杯蓋（20）・杯身（21）、SK2から杯蓋（22）・杯身（23）各1点の計10点（杯蓋4点・杯身6点）の須恵器が出土している。第1号古墳と第2号古墳SK2から出土した杯蓋・杯身（I類）と、第3号古墳の2つの埋葬施設から出土した杯蓋・杯身（II類）はそれぞれに形態・調整等が酷似している。先ず、I類については、杯蓋は2点と少なく、しかも第1号古墳出土の1は破片である。天井部の丸みが強く、口縁部との境に形骸化した鈍い稜とその下位にごく浅い凹線状の凹みがみられる。天井部外面の2／3の範囲に回転ヘラケズリが施されている。その他の範囲は回転ナデであるが、14の天井部内面中央は未調整と思われる。この14は口径14.2～14.6cm、器高5.6cmと大型で、稜の部分からハの字に開く口縁部の端部内面に比較的明瞭な段がある。杯身は、口径11.4～12.4cm、器高5.8～6.1cmとほぼ同じ大きさである。若干平底気味の底部から外上方に延びてやがて短く直立する体部からやや斜め上方に延びる受部の端部を尖り気味に納める。立ち上がり部は比較的高く、若干内傾しながら反り気味に直立し、端部を丸く納める。体部外面は底部から2／3程度の範囲に回転ヘラケズリを行い、そのほかは回転ナデである。内底面中央に一定方向のナデを行う。第1号古墳の2と第2号古墳SK2の15～17は酷似するが、若干の違いがある。法量の点では、2の口径は大きいが器高はむしろ低い。立ち上がり部は15～17に較べて2の方が内傾の度合いが比較的大きく、時期的に下る可能性がある。

第3号古墳SK1・2から出土した杯蓋・杯身は全体に扁平な器形で、大きさや形態の面でよく似ている。杯蓋は口径14.3～15.0cm、器高2.7～4.1cmで、歪みはあるものの平坦な天井部から直角に近く屈曲し、やや開き気味の口縁部に連なる。天井部と口縁部の境には第2号古墳のものよりも更に形骸化の進んだごく鈍い稜とその下位にごく浅い凹線状の凹みが廻る。天井部外面の2／3以上の範囲に回転ヘラケズリが施される。そのほかは回転ナデで、天井部内面中央には一定方向のナデがみられる。口縁端部の内面にはごく緩やかな段がみられる。杯身は口径12.2～13.1cm、器高4.6～4.7cmとほぼ均一の大きさである。ただ、幾分内傾気味に延びる立ち上がり部の形状はよく似ているものの、体部はやや異なる。杯蓋同様低平な形状であるが、21が緩やかな丸みをもつごく浅い器形であるのに対し、23は平底気味のやや深い底部から外上方に緩やかな曲線を描いて延びる。体部外面の2／3の範囲に回転ヘラケズリを施し、その他は回転ナデを行う。内底面中央に21は一定方向のナデを、23は同心円叩きを施す。また、23の立ち上がり部端部の内面には段の名残りかと思われる沈線がみられる。

I類とII類の杯蓋・杯身を比較すると、口径はほぼ等しいが、II類の方が器高は低い。杯身は口径はII類の方が大きいが、器高はI類の方が高い。つまり、I類の杯蓋・杯身は器高が高く、杯身はやや口径が小さい。II類は器高が低く、特に杯身の口径が大きい。I類はやや分厚い、II類は扁平な印象がある。しかし、天井部外面の回転ヘラケズリが2／3の範囲に及ぶこと、杯蓋の天井部と口縁部の境界の稜が形骸化してごく鈍いものであること、天井部内面や底部外面中央に一定方向のナデがみられること、口縁端部が丸く納められること、など共通する点も多い。ま

た、杯身の立ち上がり部はⅠ類はほぼ直立するが、Ⅱ類はやや強く内傾する。Ⅰ類は器高が高く、丸みの強い形態であるのに対して、Ⅱ類は器高が低く扁平な形状であるなど、形態的にある程度違いがみられる。このことから、これらの須恵器は若干の時期差が考えられるものの、全体的には共通する部分も多く、ほぼ陶邑編年のTK10型式段階（中村浩氏編年）のⅡ型式第2段階⁽²⁾に年代がおさえられる。ただ、杯蓋の口縁端部の内面におけるごく緩い段や杯身の立ち上がり部の端部内面における段の痕跡とみられる沈線の有無、杯身の立ち上がり部の内傾の度合い及び杯蓋の天井部と口縁部の境の稜の形骸化などの状況から若干の時間差が窺えることから、これらの須恵器の年代をほぼ6世紀前半を中心とした時期と捉えておきたい。

C. 須恵器の副葬について 県内例（第5表）では、須恵器の棺内（A）副葬例の明確なものはない。不明確な棺内副葬例1例（庄原市・一の谷第6号古墳）と棺外の周囲に副葬する事例（B・C）20例で、墳頂・墳丘裾など墳丘からの出土12例、周溝内出土が15例などである。墳丘（E）・周溝内（F）出土のものは供献によるもので、完形の須恵器をまとめて置くもの（E a・F a）と破碎するもの（E b・F b）とがある。棺外に副葬するものは、棺（櫛・室を含む）の上面付近に置くもの（B）と木棺外（墓坑内）側辺・小口付近に置くもの（C；木棺と墓坑の間、木棺と櫛・室の側壁・小口壁間、櫛・室外で墓坑内）に大きく分けられる。ただ、木棺そのものが検出されることは皆無に近く、多くの場合、土層観察や副葬品の出土状況などにより間接的に木棺の存在が認められることから、若干の誤差は生じえる。現状では棺外出土例のうち、棺上に須恵器を置く例が14例、棺の側辺や小口側の外面に置く例が6例である。つまり、埋葬施設への副葬例の多くは棺の上面付近に須恵器を置くもので、これに較べると棺外（側辺・小口）に副葬する例は少ない。また、後者のうち、側辺に置くものよりも小口側に置く例が多い。

ところで、須恵器の副葬・供献は日本列島で須恵器の製作が行われるようになる5世紀以降、一般的には6世紀中葉～7世紀代の横穴式石室墳において多くみられるが、ここでは横穴式石室導入に先行する5世紀代から6世紀中葉頃までの広島県内の堅穴系埋葬施設をもつ古墳の事例を主な対象とする。まず、県内の堅穴系埋葬施設をもつ古墳の墳丘・周溝内への須恵器の供献例としては、三次市・四拾貫小原第4号古墳（埋葬施設不明）の周溝内に杯身2点が供献された5世紀前半の例が最古で、同・上四拾貫第5号古墳（埋葬施設不明）の墳丘上（杯蓋1・杯身2）、広島市・月見城S T 8（土坑）の周溝内の小土坑への一括埋納（杯蓋3・杯身1・直口壺1）は5世紀後半、三次市・四拾貫小原第17号古墳（埋葬施設不明）の周溝内（杯蓋3・杯身1・聴1・甕1）出土例は5世紀末、安芸高田市・新宮第7号古墳（埋葬施設不明）の墳丘（杯蓋2）と周溝内（杯蓋1・甕1）の例は5世紀末～6世紀初頭と5世紀代の事例は少なく、主体は6世紀前半・中葉である。墳丘や周溝内へ須恵器を供献する古墳は計22基（のべ28例）で、埋葬施設別では土坑（木棺）、箱式石棺各6例、堅穴式石室5例、土坑4例などが主体である。明確な破碎供献例は墳丘・周溝内ともに3例で、完形の須恵器の供献例9例（墳丘）、11例（周溝内）に較べて少ない。

一方、埋葬施設への副葬例は、4世紀末～5世紀初頭とされる広島市・池の内第3号古墳のA主体（竪穴式石室）の例と5世紀中葉頃の同・諸木古墳（木槧墓）⁽⁴⁾の例がある。いずれも埋葬施設の上面からの出土で、前者が把手付短頭壺（加耶系陶質土器）、後者が甕各1点である。この2例を除けば、いずれも6世紀前半～中葉の事例で、埋葬施設別（計20基、延べ21基）では土坑（木棺）がのべ11基と大半を占め、ほかに竪穴式石室4例、土坑3例などがある。土坑（木棺）や土坑は棺（墓坑）上と棺外（墓坑内）の側辺・小口副葬例がほぼ同数だが、竪穴式石室はいずれも棺（室）の上面への副葬例である。

埋葬施設上面への副葬例（B）は計12例だが、出土状況があまり明確ではない広島市・池の内第3号古墳例と安芸高田市・向井古墳例を除いた計10例について検討する。埋葬施設は、土坑（木棺）4基、箱式石棺状の竪穴式石室2基をはじめ、箱式石棺・石蓋土坑・土坑・木槧で、墓坑に箱形木棺を納めた木棺墓が多い。ただ、棺（墓坑）や槧・室の直上に須恵器を置く例は、広島市・諸木古墳第1主体部（木槧墓）の直上中央に甕1点を供獻する例のみである。また、庄原市・川東大仙山第11号古墳では土坑上面を厚く被覆する粘土内から杯蓋・杯身各1点が割れた状態で出土した。箱式石棺や石蓋土坑では蓋石の下に差し挟むように須恵器を置く。庄原市・犬塚第3号古墳では石蓋土坑の小口側の蓋石の下に口縁を上に向かって杯蓋・杯身を入れ込み、広島市・弘住第4号古墳では箱式石棺の蓋石と南側壁中央の側石上面の間に杯蓋を伏せて置いている。安芸高田市・宮谷古墳では竪穴式石室の北小口側の蓋石の横に、伏せた状態の杯身と仰向けの状態の杯身各1点を置いていた。以上の事例以外は、小口側を主とした埋葬施設外の上面（多くの場合、墓坑肩附近）に杯蓋・杯身のセットを主体に整然と置き並べている（5例）。代表的な例としては、北広島町・古保利第44号古墳がある。箱形木棺を納めたとみられる竪穴式石室西小口側の墓坑上に杯蓋・杯身のセット8組をはじめ、甕・蓋付壙・高杯などを3点×4列の状態に整然と並べられている。杯蓋・杯身はいずれも口縁を合わせているが、1組は口縁を上に向かって状態で並べられていた。墳頂近くまで盛土したあと墓坑を掘り込んで石室を構築し、須恵器を置き並べて葬送儀礼を行い、その後最終的な盛土を行って、墳丘を完成させている。なお、この同じ盛土の面の石室外南側邊では底部を穿孔した大甕が潰れた状態でみつかっており、これも同様の儀礼に伴うと考えられている。三次市・燎東古墳の中心的な埋葬施設SK2の土坑（木棺）では、北西小口側の墓坑外上面に杯蓋・杯身4組と提瓶1点などを置き並べて葬送儀礼を行ったと考えられる。福山市・吹越第2号古墳では箱形木棺を納めた墓坑の東西両小口付近に須恵器を副葬している。東小口の北側壁際上面では杯蓋・杯身1組が口縁を合わせた状態で置かれ、その横には高杯1点が倒れていた。西小口の棺外では1組の杯蓋・杯身と杯蓋2点が各々口縁を合わせた状態で置かれ、もう1点の杯身は口縁を上に向かって状態で出土した。海田町・上安井古墳の埋葬施設3の土坑（木棺）は、西小口側の棺上に杯蓋2・杯身1が置かれていた。完形の杯蓋は伏せた状態で、セット関係のもう1組の杯蓋・杯身は割れた状態で出土した。後者の杯蓋は赤色顔料を塗布していた。三次市・寺津第1号古墳では木棺墓の墓坑北小口側の底面に杯蓋・杯身2組が副葬されていたが、これとは別に埋葬施設に付設する浅い掘り込みの上面に口縁を合わせた状態の杯蓋・杯

身1組が副葬されていた。

大番奥池第2号古墳SK2では、棺上中央に割れた状態の杯身1点が置かれていた。第3号古墳では、SK1・2の棺上中央に杯蓋・杯身1組が置かれていた。SK1では伏せた状態の、そしてSK2では仰向けの状態の杯蓋の横にそれぞれ杯身を立てた状態で、似通った出土状況を示していた。このような棺上中央付近に須恵器が副葬された例は少なく、県内では類例がない。

次に、棺外（墓坑内）側辺・小口への副葬例（C）は大番奥池例以外では計5例ある（三次市・寺津第1号古墳、同・寺津第2号古墳、同・大坂第6号古墳第2主体部、同・植松第1号古墳B主体、庄原市・犬塚第4号古墳）。前3者は箱形木棺を納めた土坑、後2者は土坑である。寺津第1号古墳例は棺外北小口側の墓坑底面に杯蓋・杯身2組、寺津第2号古墳例は棺外2か所の墓坑底面に須恵器が副葬されていた。南側辺中央では、口縁を上に向けた有蓋高杯の蓋の横に杯蓋・杯身2組が口縁を合わせて横向きに立てられた状態で副葬され、西小口では有蓋高杯・高杯・翫各1点が半ば倒れた状態で出土した。大坂第6号古墳例は木棺外両小口の墓坑底面に計17点のほぼ完形の須恵器が副葬されていた。大半は東小口に置かれ（杯蓋・杯身6組、蓋付壙1組、提瓶1点）、西小口には杯蓋・杯身1組が置かれていた。大半の杯蓋・杯身と蓋付壙は口縁を合わせた状態で置かれていたが、重ねられた状態の杯蓋・杯身が西小口のものを含め2、3組みられた。以上の3例で特徴的なのは、杯蓋・杯身や蓋付壙といったセット関係になるもの多くが口縁を合わせて置かれていたことである。これに対して、木棺の存在が明確でない植松第1号古墳例では墓坑西小口の底面に杯蓋・杯身・翫各1点が副葬されていたが、杯蓋・杯身は口縁を上に向かた状態である。犬塚第4号古墳例は南側壁際中央の墓坑底面に杯蓋・杯身各1点が口縁を上に向かって置かれていた。即ち、植松・犬塚例では、セット関係にある杯蓋・杯身がいずれも口縁を合わせることなく開いた状態で並べられていた。以上5例はいずれも木棺外小口側（一部側辺）の墓坑底面に杯蓋・杯身のセットを中心に完形の須恵器が副葬された例であるが、セット関係にある杯蓋・杯身の置き方に違いがみられる。

大番奥池第2号古墳SK2はB+Cの組み合わせで、棺上中央に破碎された杯身1点が置かれて、東小口寄りの北側辺では棺外の半ば付近の深さに唯一の杯蓋が口縁を斜め上方に向けた状態で、西小口中央棺外でも半ば付近の深さのところにやはり斜め上方に口縁を向けた状態で杯身が、東小口中央では棺外上面付近に口縁を棺の方に向けて横向きに立てられた杯身がそれぞれ副葬されていた。この大番奥池第2号古墳SK2の例は須恵器が棺外の中位付近と上面に副葬されており、棺外の墓坑底面付近に副葬されている県内例と異なる。棺外側辺・小口に置かれた杯蓋1点・杯身2点はいずれも、口縁をほぼ木棺側に向けて横向きに置かれていたと思われる。棺と墓坑の間に須恵器を立て置く例は寺津第2号古墳に類例がある。

このように、5世紀～6世紀前半頃の広島県内では須恵器の明確な棺内副葬例はみられず、埋葬施設上面や埋葬施設の裏込め部分（棺と墓坑の間など）の小口や側辺に須恵器を入れ置く例が中心である。日本列島では弥生墳丘墓以降前期古墳までは墳頂部を中心とした墳丘へ土器を多量に供献する例は多くみられても、埋葬施設への土器の副葬は極めて例外的である。死靈は大空を

飛翔するものと考えていた古代の日本列島の人々にとって、死後の世界は存在しないものであるから、死者が死後の生活で必要な器類などを墓坑に入れ込むことはしていなかった。⁽⁵⁾

ところが、5世紀前半に朝鮮半島南部から須恵器を製作・焼成する技術が伝わり国内で須恵器が焼かれ始める。そして、5世紀中頃～6世紀初頭には奈良県橿原町の野山古墳群や同大宇陀町の後出古墳群などの初期群集墳で埋葬施設（棺内・棺上・墓坑上）へ杯蓋・杯身のセットを中心とする須恵器の供献や副葬が行われる。これらの古墳は、いずれも割竹形木棺や箱形木棺を直葬した小規模古墳で、特別に優位な被葬者への供献や副葬ではない。従来、古墳の埋葬施設への須恵器の供献や副葬行為は横穴式石室（特に「畿内型石室」）の導入を契機に6世紀前半以降行われるようになるという理解であった。しかし、畿内周辺ではのちに全国的に普及することになる「畿内型石室」と呼ばれる横穴式石室の成立は5世紀末～6世紀初頭（これとは別系譜の「初期石室」は5世紀中葉～後半にすでに導入されている）とされている。これらのことから、埋葬施設への須恵器副葬の前提となる死後の世界の存在を認める黄泉国思想の受容には一定の相克の時を必要とすると考えられ、横穴式石室の導入を黄泉国思想の受容の契機とするのは無理があると思われる。すでに、5世紀中葉には須恵器副葬の風が畿内周辺をはじめかなりの範囲に広まっていたことからすると、少なくとも5世紀中葉～6世紀初頭頃には、日本列島において死後の世界の存在を認めるいわゆる黄泉国思想を受容しうる状況が十分醸成されていたと考える方が自然であろう。ではこの黄泉国思想の受容はどのような経緯や背景のもとになされたのであろうか。この黄泉国思想にみられる死生観は日本固有のものではなく、他地域、具体的には朝鮮半島から移入されたと考えられる。

ところで、朝鮮半島南部で埋葬施設に土器が埋納される比較的早い例は慶州市朝陽洞遺跡の木棺墓（2世紀後半～4世紀初頭）で、陶質土器の前身である瓦質土器が納められている。次いで、金海郡の礼安里遺跡では土坑木棺墓・箱形石棺系石棺墓・小型竪穴式石槨（室）などの4世紀代の埋葬施設に赤褐色軟質土器・瓦質土器、やがて陶質土器が埋納される。そして、4世紀後半～5世紀後半の釜山市の福泉洞古墳群では土坑木棺墓、さらには竪穴式石室といった埋葬施設に陶質土器を副葬している。⁽⁶⁾ いずれも6世紀前半頃に朝鮮半島南部に横穴式石室が導入される以前の竪穴系埋葬施設への土器副葬例であり、これらの例からも横穴式石室の導入と埋葬施設への土器副葬を必ずしも関連付ける必要はないことが分かる。ところで、朝鮮半島南部と日本列島とは、紀元前後以降伽耶地域の主に鉄素材（斧状鉄板・鉄錠）などを求めて盛んに交易を行うが、特に4世紀中葉～6世紀以降、この鉄素材を安定的に確保するために畿内中央政権が本格的に乗り出すことで急速に拡大する。そして、高句麗の伽耶諸国への侵攻を機に、5世紀初頭から中葉にかけて釜山・金海地域をはじめとする地域の工人集団の数次に亘る渡来によって、日本列島に須恵器製作技術が伝えられ、本格的な須恵器の焼成が開始される。⁽⁷⁾ そして、5世紀後半になると、高句麗の百濟侵攻を契機とする百濟系の集団を主体とする第2次渡来人の波があり、以後6世紀後半にかけて百濟系文物や技術の本格的な移入がみられるようになる。⁽⁸⁾

このように、紀元前後～5世紀代の伽耶地域、さらには4世紀末～6世紀後半の百濟との密接

な交流や技術者集団を核とする朝鮮半島の人々の数多の渡来は、日本列島全体に朝鮮半島の技術や文物のみならず精神文化をもたらすことになり、それらは列島の人々の社会生活、ひいては死生観にも大きな影響を与え、大きな変容を迫ったであろうことは想像に難くない。ただ、先進地域である畿内における死生観の転換の現れ方と安芸・備後国という遠隔の地域における現れ方には大きな差異がみられ、そのことが両者の間に、須恵器副葬の開始時期や副葬状況に一定のずれを生じさせたものと考えられる。つまり、畿内では須恵器副葬の風が5世紀中葉には行われるようになり、しかも棺内の遺骸のすぐ傍に器を入れ込むという積極的な受容であるのに対して、広島県域ではそれから半世紀も遅れた6世紀になってようやく須恵器副葬が広く行われるようになり、しかも遺骸の近くに器を入れ込むことを躊躇い、棺外の上面や裏側に辛うじて副葬するという消極的な受容に留まった。すなわち、旧来の列島的な死生観を克服して死後の世界の存在を容認するという半島的な新しい死生観を受け入れるのに必要以上に時間を要したのである。ただ、いずれにしろ、従来横穴式石室の導入が日本列島の人々に黄泉國思想の受容を促したといったような意見がみられたが、むしろ数世紀に及ぶ朝鮮半島との濃密な交流が日本列島の人々に半島的な新しい死生観への転換を促し、このことがやがて列島全域にほぼ同時的に円滑な横穴式石室の導入と普及を実現させたということができよう。

D. 鉄鎌の検討 今回の調査では計15本（鎌身部を含むもの10、頭茎部片5）の鉄鎌が出土している。第2号古墳SK1から計3本（9～11）、第3号古墳SK4から計4本（27～30）、同周溝から1本（31）、第7号古墳SK1から鎌身部片2本・頭茎部片5本（32～36）である。9・10は幅広で長く、27・28はやや短く細身と形態的にはやや異なるもののいずれも腸抉三角形鎌で、そのふくらや逆刺の外反の状況などが類似している。これらは杉山秀宏分類のA形式第1型式B類（9・10）とA類（27・28）で、時期的にはVII～IX期（5世紀後半～6世紀中頃）と考えられる。11は短い逆刺をもつ三角形鎌で、C形式第I形式や第II形式の類五角形状のものに系譜的な繋がりが考えられる。31は方頭斧箭鎌の系譜上にあるもので、両角関をもつB形式第3型式B類である。時期的にはX～XI期（6世紀後半～7世紀初頭）とされている。第3号古墳SK4の29・30、第7号古墳SK1の32・33はいずれも長頭鎌で、前2者は鎌身部（長さ1.9～2.0cm、幅1.1～1.2cm）が三角形（角関）で、後2者は鎌身部（長さ3.6～4.0cm、幅1.1～1.3cm）がふくらのある柳葉状の長三角形である。29・30は頭部の長さがいずれも7cmを越す長頭化のやや進んだ段階のA形式第V形式第1型式のもので、VII～XIII期（5世紀中頃～7世紀後半）と時期的にかなり幅がある。32・33は比較的弱く外反する逆刺をもつB形式第V形式第2型式のもので、VI～X期（5世紀前半～6世紀後半）とやはり時期的に幅がある。

埋葬施設毎の鉄鎌の組成については、第2号古墳SK1が腸抉三角形鎌2+三角形鎌（類五角形）1、第3号古墳SK4が細身の腸抉三角形鎌2+長頭鎌（三角形）2、第7号古墳SK1は長頭鎌（腸抉三角形）2+ α で、これらは腸抉三角形鎌・三角形鎌と長頭鎌（三角形・腸抉三角形）を主体としたVII期～X期に一般的にみられる組成である。これらのうち、第2号古墳SK1

(木棺墓) の鉄鎌群は頭位の北側辺東小口寄りの棺外裏込め部分の中・下位に副葬されていた。いずれも、木棺の主軸に鉄鎌の軸を沿わせ、切先は頭位の東小口側に向いていた。

次に、県内例と比較しながら、鉄鎌の副葬位置と組成などを検討する。鉄鎌を副葬する堅穴系埋葬施設をもつ広島県内の古墳は計56基（埋葬施設58基）で、複数の位置（棺内と棺外、同じ棺外でも棺上と棺側～小口などのように副葬位置が大きく異なる場合）に副葬される埋葬施設が3基あるので、鉄鎌が副葬された位置は計61例存在することになる。ひとつの埋葬施設で複数の位置に鉄鎌が副葬されていた事例は、福山市・石鎚權現第5号古墳（礫桟：A+C）、広島市・成岡第3号古墳第1主体（木桟=割竹形木棺；B+C）、東広島市・三ツ城第1号古墳3号棺（箱式石棺；A+C）で、棺内と棺外（棺側辺～小口）、棺外の棺上と棺側辺あるいは小口側の裏込め部分の組合せである。副葬位置別では、棺内（A）副葬例15例、棺外（B・C）副葬例37例（棺上15例・棺側辺～小口22例）、埋葬施設周辺（D）副葬例1例で、棺外副葬例が多い。ただ、棺内副葬例がほぼ皆無である須恵器副葬の事例と比較すると、棺内副葬例が全体の1/4程度存在している点が異なる。なお、棺外副葬例では棺上より棺側辺～小口の裏込め部分への副葬例（特に側辺）が多くみられる。これは棺内副葬例を含めて、鉄鎌は切先を頭部側（9例）あるいは足部側（8例）に向け、軸を被葬者に沿うように副葬する例が多い（32例/61例=52.5%）ことと関わりがある。

埋葬施設別では、堅穴式石室（堅穴式石室・礫桟を含む）19施設20例、土坑（箱形木棺）19施設・例、箱式石棺9施設・10例が多い。この他、土坑（割竹形木棺）、土坑、粘土桟（割竹形木棺）がある。埋葬施設毎の副葬位置は、堅穴式石室では棺外の側辺～小口のC（12施設・例）が半数以上を占め、棺内A（3施設・4例）・棺上B（2施設・例）などに比べて多い。土坑（箱形木棺）もCが8施設・例と多く、棺上B（6施設・例）や棺内A（4施設・例）がこれに次ぐ。しかし、箱式石棺は棺内A（3施設・4例）、棺上B（4施設・例）の副葬例が棺側辺～小口C（2施設・例）を上回り、やや様相が異なる。

県内例では、鉄鎌を副葬する埋葬施設をもつ古墳の37.5%（21基/56基）が墳頂部複数埋葬である。一方、鉄鎌と須恵器をいずれも副葬する堅穴系埋葬施設をもつ古墳は3基にすぎない。庄原市・一の谷第6号古墳（土坑=木棺）、福山市・吹越第2号古墳（土坑=木棺）、安芸高田市・向井古墳（堅穴式石室）で、いずれも6世紀前半～中葉に築造されている。これらはいずれも棺外副葬例（B1例・C2例）で副葬鎌の組み合わせは長頭鎌のみ、あるいは長頭鎌+腸抉三角形鎌・三角形鎌である。

本古墳のような鉄鎌という小型武器を主体とする副葬内容の被葬者については、国造軍の基盤をなす軍事組織の単位である共同体を構成する有力家族の長及び成員として、主に弓矢をもって仕えたと考えられている。⁽¹⁵⁾

（2）埋葬施設の配置と構造

第3号古墳のSK4を除けば、第2・3号古墳の埋葬施設はいずれも墓坑に箱形木棺を納めた

木棺墓である。第2号古墳では墳頂部に東西方向に主軸をもつ2基の木棺墓が整然と並葬されている。長さ241cm・272cm、幅121cm・116cm、深さ32cm・66cm（いずれも前者がSK1、後者がSK2。以下、同じ。）の平面長方形の墓坑の中に、長さ200cm・224cm、幅85cm・81cmの木棺を納めている。墓坑の規模や形状・木棺規模などは似ているが、北側のSK1の墓坑底面が南側のSK2のそれの40cm高位にある。第3号古墳は墳丘中央の擾乱坑によって4基の埋葬施設がいずれも損壊を受けており、木棺墓SK3や土坑墓SK4などや埋葬状況が不明確な部分がある。木棺墓SK1・2はほぼ東西方向に主軸を向け、南北に並葬されており、構造や副葬内容・状況は類似している。ただ、墓坑及び木棺の規模は異なり、長さ213cm・153cm（前者がSK1、後者がSK2、以下同じ。）、幅91cm・65cm、深さ31cm・31cmの大きさの墓坑に長方形の箱形木棺を納めていたと考えられる。SK1の木棺は長さ156cm、幅55～69cmの大きさであるが、SK2の木棺については不明である。第2号古墳と第3号古墳では埋葬施設の配列状況に大きな違いがみられる。これらから、①第2号古墳の被葬者は集団内の選ばれたほぼ同格の人々で、その埋葬も生前から計画的に考えられており、しかもほぼ同時期に埋葬されたと考えられる。ただ、墓坑底面に高低差がみられることから、被葬者間に何らかの格差あるいは木棺構造上の差異や埋葬時期差が存在する可能性も残される。②第3号古墳の埋葬施設はSK1・2は構造面では似るが、墓坑の大きさに差がみられる。SK3は木棺墓ではあるが、平面形や内部構造などSK1・2とは大きく異なる。SK4は現状では木棺痕跡を見つけることができず、土坑墓と捉えるをえない。このように第3号古墳の4基の埋葬施設間には様々な相違点がみられることから、被葬者間に集団内における階層面など何らかの点で一定程度の格差を窺うことができよう。また、埋葬施設の配置がやや雑然としていることから、埋葬時期に時間差が窺え、その死や埋葬が予期されていなかったものである可能性もある。ただ、少なくとも4人の死者を古墳の墳頂部に集中的に葬っていることから、これらの被葬者が比較的強い紐帯によって結ばれていた可能性は高い、といえるだろう。

ここで、県内例93基（埋葬施設225基）の堅穴系埋葬施設を墳頂部に複数埋葬する古墳について検討する。これらの古墳の築造時期は4～6世紀代で、5世紀代を主体とするものが54基（58.1%）と過半数を占め、4世紀代が15基、6世紀代が13基である。

古墳の立地は丘陵頂部が67基（72.0%）と大半を占め、丘陵端部19基、丘陵斜面4基、丘陵傾斜変換点付近3基である。周囲の平野部からの比高は20m以上・30m未満21基を含め、10m以上60m未満が66基（71.0%）と最も多く、10m未満が1基、60m以上（最大が100m）が8基である。墳形は円・梢円・長円形が64基（68.8%）と大半で、方・長方形20基（21.5%）、帆立貝・前方後円形・造出付円形4基である。墳丘規模は、10m未満28基、10m以上15m未満33基と15m未満が61基（65.6%）と大半を占める。15m以上20m未満が15基、20m以上（最大91m）が11基である。

古墳1基あたりの埋葬施設数は2～5基で、2基の古墳が62基（66.7%）と最も多く、3基のもの（24基=25.8%）、4基のもの（6基）、5基のもの（1基）となる。埋葬施設の配列状況は、整然と並列するもの（A）、ほぼ並列するものの、やや斜めになるもの（A'），中心的な埋葬施設は比較的整然と並列するが、従属的な埋葬施設をはじめ、一部の埋葬施設が並列しないもの

(B), 埋葬施設がまったく並列しないもの (C) の4通りに分けられる。2基タイプの古墳62基の内訳は、A=47基、A'=7基、C=8基、3基タイプの古墳24基の内訳は、A=10基、A'=1基、B=6基、C=7基、4基タイプの古墳6基の内訳は、A=2基、A'=1基、B=2基、C=1基、5基タイプの古墳1基はC類である。A類が59基(63.4%)と多く、A'類9基、B類8基、C類17基となる。整然と複数の埋葬施設が並葬されるものが大半を占めており、まったく並列せず整然と葬られていらないC類は全体の2割弱である。

次に、埋葬施設の内容毎にみてみる。墳頂部複数埋葬を構成する古墳の埋葬施設(計225基)としては、箱式石棺79基(35.1%)が最も多い。次いで、土坑(木棺)54基(24.0%)、土坑35基(15.6%)、竪穴式石室24基(10.7%)、石蓋土坑13基、粘土梆(割竹形木棺)9基、土坑(割竹形木棺)8基、木蓋土坑2基、粘土梆(箱形木棺)1基である。埋葬施設の組合せは1~2種類の埋葬施設であることが殆どで、3種類以上の埋葬施設からなる例は福山市・長迫第2号古墳例のみである。その組合せについて具体的にみてみると(2A=2基タイプA類、を表す。以下、同じ)、

- ①箱式石棺のみ；21基 (2A=8, 2A'=1, 2C=3, 3A=2, 3B=3, 3C=2, 4A'=1, 5C=1)
- ②箱式石棺+土坑(木棺)；4基 (2A・3A'=各1, 3C=2)
- ③箱式石棺+土坑；4基 (2A=2基, 2A'・2C=各1)
- ④箱式石棺+竪穴式石室；3基 (2A・3A・3B=各1)
- ⑤箱式石棺+石蓋土坑；5基 (2A=2, 2C・3B・3C=各1)
- ⑥箱式石棺+粘土梆(割竹形木棺)；2基 (2A・3A=各1)
- ⑦土坑(木棺)のみ；13基 (2A=11, 3A・3C=各1)
- ⑧土坑(木棺)+土坑；6基 (2A'=2, 3A・3C・4A・4C=各1)
- ⑨土坑(木棺)+竪穴式石室；5基 (2A=3, 2A'・4B=各1)
- ⑩土坑(木棺)+粘土梆(割竹形木棺)；2基 (2A'・3A=各1)
- ⑪土坑(木棺)+土坑(割竹形木棺)；2基 (2A・3A=各1)
- ⑫土坑(木棺)+粘土梆(箱形木棺)；1基 (2C=1)
- ⑬土坑のみ；9基 (2A=8, 3A=1)
- ⑭土坑+竪穴式石室；1基 (3A)
- ⑮土坑+石蓋土坑；2基 (2A・3B=各1)
- ⑯竪穴式石室のみ；6基 (2A=5, 2A'=1)
- ⑰竪穴式石室+土坑(割竹形木棺)；1基 (2C)
- ⑱石蓋土坑のみ；1基 (2A)
- ⑲石蓋土坑+粘土梆(割竹形木棺)；1基 (4B)
- ⑳石蓋土坑+土坑(割竹形木棺)；1基 (2C)
- ㉑粘土梆(割竹形木棺)のみ；1基 (4A)

②土坑（割竹形木棺）のみ；1基（2A）

③木蓋土坑のみ；1基（2A）

の23通りの組合せがある。組合せ的には各埋葬施設を含む古墳の延べ数は、箱式石棺39基、土坑（木棺）32基、土坑22基、竪穴式石室16基、石蓋土坑10基、粘土槨（割竹形木棺）5基、土坑（割竹形木棺）5基、木蓋土坑1基、粘土槨（箱形木棺）1基で、箱式石棺・土坑（木棺）・土坑・竪穴式石室などを埋葬施設とする古墳が主体的である。同一の埋葬施設だけで構成される例が多く、箱式石棺のみを埋葬施設とする古墳21基をはじめ、土坑（木棺）13基、土坑9基、竪穴式石室6基、石蓋土坑・粘土槨（割竹形木棺）・土坑（割竹形木棺）・木蓋土坑各1基の計53基の古墳が1種類の埋葬施設（最多5基）で構成されている。異種同土の組み合わせでは、土坑（木棺）+土坑6基、箱式石棺+石蓋土坑・土坑（木棺）+竪穴式石室が各5基、箱式石棺+土坑（木棺）・箱式石棺+土坑が各4基が比較的多い。また、埋葬施設の配列状況では、2基タイプ=62基（66.7%）、3基タイプ=24基（25.8%）、4基タイプ=6基、5基タイプ=1基で、整然と並列するA類の古墳が59基（63.4%）と多く、特に2基が整然と並ぶものが47基と目立つ。このほか、A'類9基、B類8基、C類17基である。

ところで、これら墳頂部複数埋葬の埋葬施設間では、内容的には通常それほど明確な差異はみられないが、一部に埋葬施設の規模・構造や配置、あるいは副葬内容などの点で明確な優位性のあるものや逆に劣勢で従属性が高いもののが存在する。ほかの埋葬施設に較べて明らかに従属性の高い埋葬施設としては、墓坑規模の小さい小児墓が考えられる（墳丘裾や斜面など明確に墳頂部の埋葬施設とかけ離れた位置に構築されているものは、今回の分析では除外する）。石蓋土坑9基／13基（従属葬の比率69.2%）が最も従属性が高い埋葬施設である。ほかに、箱式石棺23基／79基（29.1%）、土坑8基／35基（22.9%）も3～4基に1基の割合で従属葬がみられ、従属性が比較的高い埋葬施設といえる。土坑（木棺）、竪穴式石室にも若干の従属葬がみられるが、粘土槨（割竹形木棺）や土坑（割竹形木棺）などの埋葬施設には従属葬はみられない。従属性の高い埋葬施設（44基）が存在する古墳は計35基で、古墳1基あたり1～3基の従属葬を含む。複数（2・3基）の従属葬がみられる古墳は7基である。箱式石棺・石蓋土坑・土坑・土坑（木棺）などの従属葬が存在する古墳の中心的埋葬は箱式石棺であることが多く、ほかには土坑（木棺）・竪穴式石室・土坑などである。一般的には中心的埋葬と従属葬が同一の種類の埋葬施設である例が比較的多い（箱式石棺12基、土坑4基、土坑=木棺1基）。また、従属葬に較べるとそれほど明確ではないが、優位性の高い埋葬施設としては箱式石棺7基、土坑（木棺）・竪穴式石室4基、粘土槨（割竹形木棺）2基などがある。優位性の高い埋葬施設が明確な古墳は16基、従属性の高い埋葬施設をもつ古墳は35基で、これらのうち10基は優位性の高い埋葬施設と従属性の高い埋葬施設が併存する。優位性の高い埋葬施設はもつが従属性の高い埋葬施設はもたない古墳6基は2基タイプA類5基と2基タイプA'類1基で、優位性の高い埋葬施設としては土坑（木棺）2基、箱式石棺・竪穴式石室・粘土槨（割竹形木棺）・土坑（割竹形木棺）各1基で、通常の埋葬施設+優位性の高い埋葬施設の組み合わせでは特定の組合せに偏ることはない。即ち、箱式石棺+粘土槨

(割竹形木棺)・土坑+箱式石棺・土坑(木棺)+土坑(木棺)・土坑(木棺)+土坑(割竹形木棺)・土坑(木棺)+堅穴式石室・土坑+土坑(木棺)各1基である(いずれも前者が通常の埋葬施設、後者が優位性の高い埋葬施設)。次に、優位性の高い埋葬施設と従属性の高い埋葬施設の両方が存在する古墳10基は、2基タイプA類・同C類各1基、3基タイプB類3基、同C類2基、4基タイプB類2基、5基タイプC類1基で、整然と並葬するA類が殆どみられず、配列に乱れがみられるB・C類が多い点が特徴である。この配列に乱れが生ずることと埋葬施設間に階層性が窺える点とは何らかの関連性があろう。この配列の乱れについては、優位性の高い埋葬施設はもつが、従属性は存在しない6基の古墳がほぼ2基タイプA類にまとまり、埋葬施設が整然と配列されている点と好対照である。次に、従属性の高い埋葬施設を含むがそのほかの埋葬施設に特に優位性がみられない25基の古墳について検討してみる。2基タイプA類9基、同A'類1基、同C類4基、3基タイプA類4基、同A'類1基、同B類2基、同C類2基、4基タイプA類1基、同A'類1基で、A類14基、A'類3基、B類2基、C類6基となる。整然と並列するA類が大半を占めるが、C類も一定数みられることから、優位性の高い埋葬施設と従属性の高い埋葬施設が併存する古墳ほどではないが、埋葬施設の配列に一定程度の乱れがみられる。これらのことから、墳頂部における複数埋葬の古墳において、従属性の高い埋葬施設が存在する場合、及び優位性の高い埋葬施設と従属性の高い埋葬施設が併存する場合が特に配列に生ずる乱れが大きいといえる。すなわち、埋葬施設の配列の乱れは埋葬施設間の階層面の格差の大きさに比例することが分かる。よって、整然と並葬されるA類の埋葬施設間には階層差が余りないと理解される。

(3) 大番奥池古墳群の年代と性格

以上の検討から、大番奥池第1号古墳と第2号古墳はごく近接した時期に築造され、これらに若干遅れて第3号古墳、更には第7号古墳が築造されたと考えられる。第1号古墳と第2号古墳出土の須恵器(杯蓋・杯身)は丸みが強く、扁平な第3号古墳の須恵器(杯蓋・杯身)に時期的に先行する。第1号古墳と第2号古墳では、尾根頂部の最高所に立地し、杯身の立ち上がり部が直立する第2号古墳が時期的に先行し、次いで同じ尾根頂部でもやや低位の傾斜変換点付近に立地し、杯身の立ち上がり部が内傾気味の第1号古墳が築造されたとみられる。なお、第2号古墳築造段階では被葬者は共同体内の有力家族の家長及び近親で、被葬者間に格差はほとんどみられない。第1号古墳に統いて、出土須恵器が扁平な形態をもち、杯蓋の縁の形骸化が第2号古墳のものに比べて更に進むとともに杯身の立ち上がり部の内傾の度合いが第1号古墳のものよりも強い第3号古墳が尾根頂部からやや下がった緩斜面上端付近に築かれたと考えられる。第2号古墳から第1号古墳の築造を経て、第3号古墳を築造する時点では、被葬者が増えて家長と近親のはかに成長した有力成員2名が加わっている。ただ、それら4基の埋葬施設の配列に乱れが生じていることから明らかのように、被葬者間には一定の格差がみられる。第7号古墳はその立地から分かるように、第3号古墳に統いて最後に築造された古墳である。

大番奥池第1～3・7号古墳は、以上のように6世紀前半を中心とした時期に築造された古墳

群で、埋葬施設への須恵器（杯蓋・杯身）の主体的な副葬は、6世紀後半以降盛んになる当地域への横穴式石室の採用に先立って半島から移入された死生觀（黄泉国思想）に拠るものであり、また、鉄鎌という小型武器を主体的に副葬していることから、古墳の被葬者は弓矢をもって軍事組織に仕えた有力家族の長であると考えられる。また、須恵器を主体的に副葬する埋葬施設と鉄鎌などの鉄器を主体的に副葬する埋葬施設に明確に分かれ、両埋葬施設の被葬者の間に何らかの差異が窺えるが、その内容については現状では明らかでない。

なお、第7号古墳の墳丘からは類例の少ない鉄製紡錘車が出土している。一般的に、紡錘車が古墳の墳丘や周溝から出土する場合、古墳築造から期間をおいて行われる先祖供養の意味合いの強い供獻祭祀的行為に伴うと考えられている。鉄製紡錘車は6世紀後半から中世にかけてみられるが、特に7世紀前半の西日本に多くみられる。そして、これらは、評衛（のちの郡衛）の先駆的形態とみられる「ミヤケ（屯倉）」に関わる遺跡やのちに評衛が成立する遺跡、さらにはこれら役所的施設に納められる貢物としての瓦や須恵器、鉄器の生産に関わる遺跡などで出土する傾向がつよく、のちの郡領層となる豪族が紡織の工程に深く関与していたことを示す、とされている。

以上、本古墳群は6世紀前半の横穴式石室導入前に築造された、当地域の国造軍の一翼を担う軍事組織の末端を形成するとともに、当地域の紡織全般に深く関与したのちの郡領層に繋がりをもつ共同体のなかの有力家族の長及び成員を被葬者とする古墳群と考えることができる。

註

- (1) 鉄鎌・刀子の県内例の分析については、
財団法人広島県教育事業団『中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告（10）一権
現第1～3号古墳-』 2010年の「Vまとめ」及び第5表参照。また、鉄鎌については、本書第6表参照。
- (2) 田辯昭三『須恵器大成』 角川書店 1981年
- (3) 中村浩『和泉陶邑窯の研究』 柏書房 1981年
- (4) 定森秀夫『陶質土器・初期須恵器からみた瀬戸内と朝鮮』 松原弘宣編『瀬戸内海地域における交流の展開』 名著出版 1995年
- (5) 士生田純之『第三部第3章黄泉国の成立』『黄泉国の成立』 学生社 1998年
- (6) 奈良県立橿原考古学研究所『野山遺跡群』 I 1988年
- (7) 奈良県立橿原考古学研究所『後出古墳群！』『奈良県遺跡調査概報1985年度（第二分冊）』 1986年
- (8) 白石太一郎『石光山古墳群の提起する問題』『葛城・石光山古墳群』 奈良県立橿原考古学研究所 1976年
関川尚功『群集墳をめぐる諸問題一大和を中心として-』『桜井市外鐵山北麓古墳群』 奈良県立橿原考古学研究所 1978年
- (9) 註（5）と同じ。
- (10) (11) 士生田純之『畿内型石室の成立と伝播』荒木敏之編『ヤマト王權と交流の諸相』 名著出版 1994年
- (12) 士生田純之『古墳出土の須恵器（一）』末永先生米寿記念会『末永先生米壽記念獻呈論文集』 乾 1985年
- (13) 東潮『倭と加耶の國際環境』 吉川弘文館 2006年
- (14) 福永伸哉『共同研究 四、五世紀における韓日交渉の考古学的再検討—地域間相互交流の観点から 第一章 対半島交渉から見た古墳時代倭政権の性格』『青丘学術論集』第12号 財團法人韓國文化研究振興財团 1998年
- (15) 朴天秀「同上 第四章 考古学から見た古代の韓・日交渉」同上

- (16) 註(15)と同じ。
- (17) 註(5)と同じ。
白石太一郎「横穴式石室誕生」「横穴式石室誕生－黄泉国の成立－」平成19年度秋季特別展 大阪府立近つ飛鳥博物館 2007年
- (18) 杉山秀宏「古墳時代の鐵鎌について」『樋原考古学研究所論集』第8 吉川弘文館 1988年
以下、鐵鎌の形式・型式や編年については、基本的にこの論文による。
- (19) 新納泉「裝飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』第30卷第3号 考古学研究会 1983年
- (20) 「墳丘内に併行する墓壙を穿つ時期の古墳の埋葬施設間には計画性が看取され、埋葬時期に一世代以上の時間的経過は認められない。」(井上義光「第4章野山支群の調査 第18節まとめ」『野山遺跡群』I 奈良県立樋原考古学研究所 1988年 142頁)
- (21) 角南聰一郎「古墳副葬・供獻紡錘車の検討」大阪大学稻荷塚古墳発掘調査団編『井ノ内稻荷塚古墳の研究』2005年
- (22) 東村純子「律令国家形成期における鐵製紡錘車の導入と紡織体制」『洛北史学』第7号 洛北史学会 2005年



a 古墳群遠景
(空中写真、東から)



b 古墳群全景
(空中写真、東から)



a 第1号古墳全景
(空中写真、北から)



b 第2号古墳全景
(空中写真、南から)

a 第3・7号古墳全景
(空中写真、南から)



b 第1号古墳全景
(調査前、西から)



c 第1号古墳墳丘
(北西から)





a 第1号古墳墳丘土層
(東西方向東半,
北から)



b 同上
(東西方向西半,
北から)



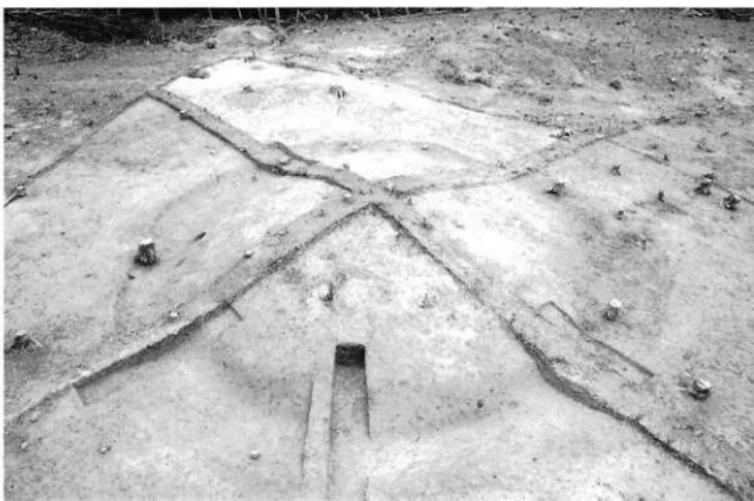
c 同上
(南北方向北半,
西から)



a 第1号古墳埴丘土層
(南北方向南半,
西から)



b 第2号古墳全景
(調査前, 北から)



c 第2号古墳埴丘
(南西から)



a 第2号古墳墳丘土層
(東西方向東半、
南から)



b 同上
(東西方向西半、
南から)



c 同上
(南北方向南半、
東から)

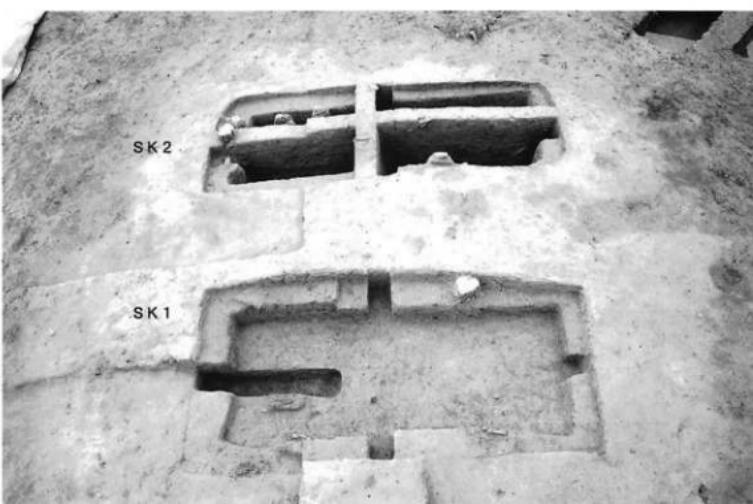
a 第2号古墳埴丘土層
(南北方向北半,
東から)



b 第2号古墳周溝土層
(SW区, 南東から)

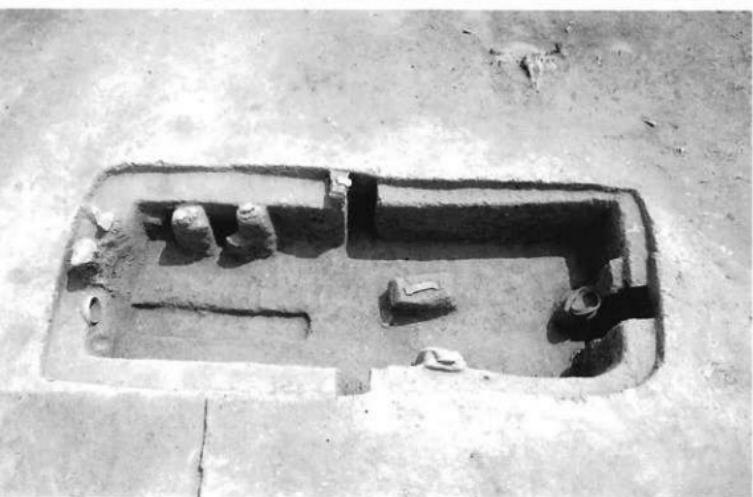


c 第2号古墳SK1・2
(北から)





a 第2号古墳SK 1
(北から)



b 第2号古墳SK 2
(北から)



c 第3号古墳全景
(調査前, 南から)

a 第3号古墳墳丘
(南西から)



b 第3号古墳墳丘土層
(東西方向東半,
北から)



c 同上
(東西方向西半,
北から)





a 第3号古墳墳丘土層
(南北方向北半,
西から)



b 同上
(南北方向南半,
西から)



c 第3号古墳SK 1
(北から)

a 第3号古墳SK2
(北から)



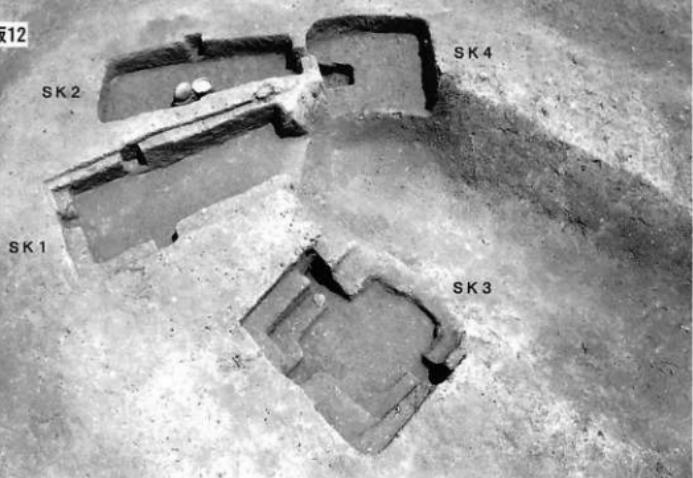
b 同上SK3 (北から)



c 同上SK4 (南から)



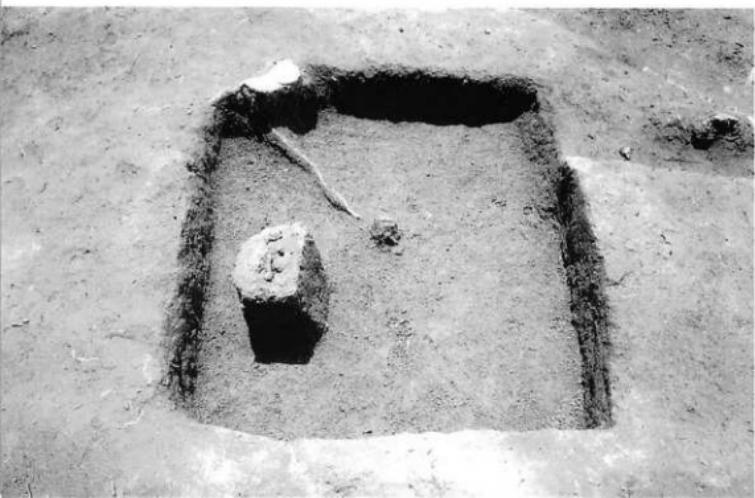
図版12



a 第3号古墳SK 1~4
(南西から)



b 第7号古墳墳丘土層
(東西方向, 南から)



c 同上SK 1 (北から)



a 第2号古墳SK 1 鉄鎌12出土状況（南から）



b 同上鐵鎌9～11出土状況（南から）



c 同上SK 2 須恵器14出土状況（南西から）



d 第2号古墳SK 2 作業風景（西から）



e 第3号古墳SK 1 須恵器出土状況（北から）



f 同上SK 2 須恵器出土状況（北から）



g 同上SK 3 刀子出土状況（東から）



h 同上SK 4 鉄器出土状況（南東から）

第1号古墳



3



4



5



6



7



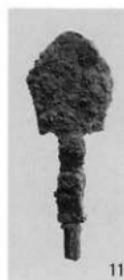
8

第2号古墳

SK 1



10



11



12



13

SK 2



14



15



16



17

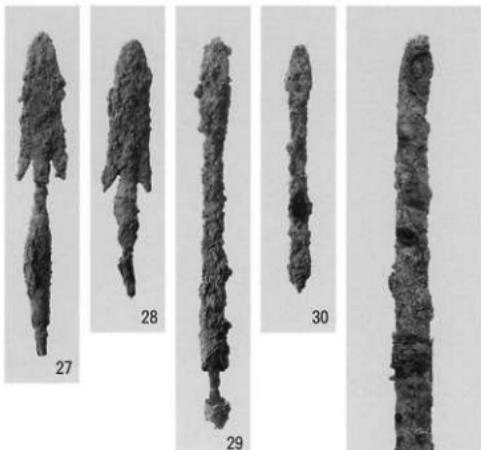
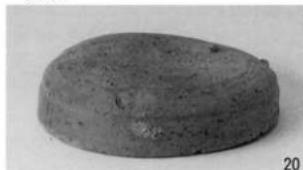


19

出土遺物（1）

第3号古墳

SK 1

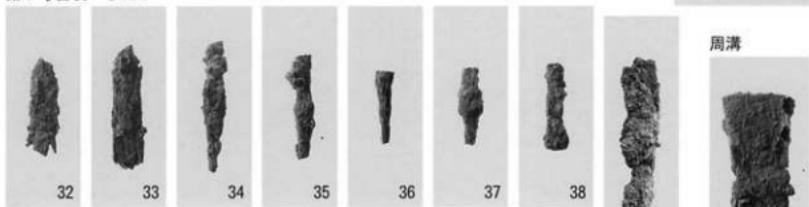


SK 2



25

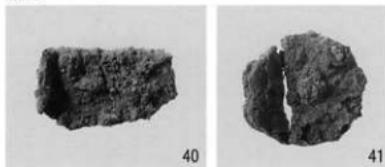
第7号古墳 SK 1



周溝



填丘



出土遺物 (2)

報 告 書 抄 錄

財団法人広島県教育事業団発掘調査報告書第33集

中国横断自動車道尾道松江線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告（11）

大畠奥池第1～3・7号古墳

発行日 平成22（2010）年3月31日

編 集 財団法人 広島県教育事業団事務局埋蔵文化財調査室
〒733-0036 広島市西区観音新町四丁目8番49号

T E L (082)295-5751 F A X (082)291-3951

発 行 財団法人 広島県教育事業団

印刷所 鯉城印刷 株式会社